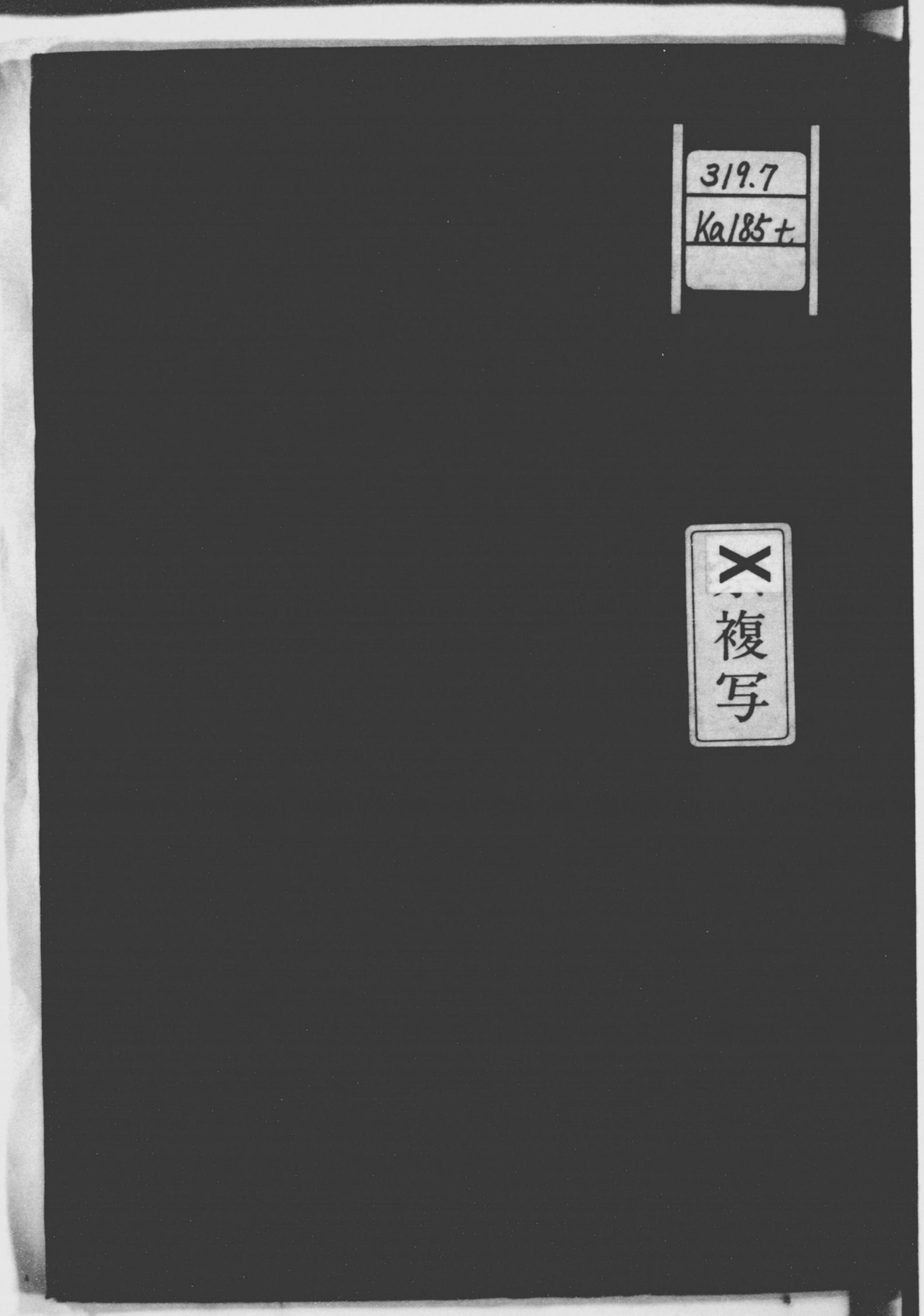


0011345000

0011345-000

３１９．７－Ｋａ１８５ｔ

太平洋二千六百年史

海軍有終会

１９４１　３版

ABJ

K27A-2X

財團法人 海軍有終會編

太平洋二千六百年史

不須息刻

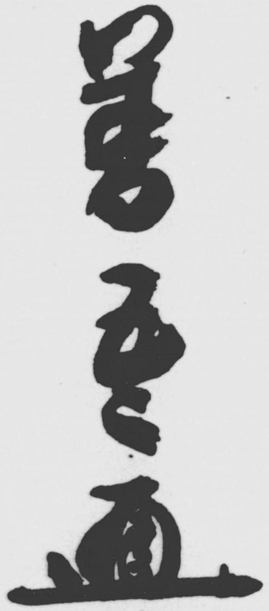
光政題

319.7
Ka185t

31708

興天無極

萬壽通



序

支倉特使の乘船陸奥丸が太平洋を横斷せし往時は問はず、幕末わが咸臨丸が太平洋の怒濤を凌いで桑港に到達するに三十有七日の日子を要せり。然も現時海路約二週間、空路僅に三日にて達し得ることは、時間的に見て太平洋が如何に狹められしかを如實に物語るものなり。此の驚異的變化は吾人をして國防上、將又經濟上の新なる見地に立ちて、太平洋を見直すことの必要を痛感せしむ。今や東洋の盟主たる帝國は支那事變を契機として、東亞新秩序の建設に邁進しつゝあり、而して東亞新秩序の建設は將來南方問題の解決により、始めて畫龍點睛の域に達するものなることを思ふとき、太平洋問題は一層の關心を惹く。況んや歐洲動亂の極東波及端睨すべからざるに加へ、米國は其の全艦隊を太平洋に集中して、英佛勢力後退後に於ける東洋の番犬を

以て自ら任じつゝあり、太平洋の波靜ならんと欲して能はざるに於てをや。

夫れ溫故知新は不磨の金言、太平洋問題を解決せんと欲せば、須く先づ洋の歷史を究めざるべからず。財團法人海軍有終會夙に見る所あり、義勇財團海防義會と協力して、光輝ある紀元二千六百年を期し、「太平洋二千六百年史」を編纂刊行す。洵に恰好にして意義深き記念事業と謂ふべし。余其の內容を看るに叙事整然、資料正確豐富、讀者をして太平洋に於ける列國勢力の消長を知悉せしむると共に、克く海國日本の自然の理法たる海洋發展の神髓に徹底せしめ、併せて海防は素より、海運・海產等海事一切の重要性を認識せしむるに寄與する所頗る大なるものあるを思ひ、深く關係諸彥の努力に對し敬意を表しつゝ、本書を江湖に推稱するものなり。聊か蕪辭を述べて序となす。

昭和十五年六月十五日

海軍大將　有馬良橘

緒言

本會曩に（幕末以降）帝國軍艦寫眞と史實」、次で「近世帝國海軍史要」を編纂公刊し、以て帝國海軍近代に於ける發展沿革をば寫眞と文章とに依つて世に紹介し、多少此の方面に關する國民的知識普及に勗めたり。然れども、近代我が海軍の勃興は、現實それ自體を語ることのみを以て完しとすべきにあらず、因つて來れる遠き源泉を檢討し、更に之が將來に及ぼすべき影響に就ても論及するの要あるは素設を要せざるところなり。

惟ふに我が帝國が悠久玆に二千六百年、海國として如何なる經路を辿り來りしかを顧みるに、肇國の初めより今日に至るまで幾多の波瀾曲折あり、更に之に交錯するに亞細亞大陸との關係、及び歐米人東漸の

史實あり、彼此之を研究するとき、皇國の現在竝に將來の發展に參考となるべき史料尠しとせず、仍て我が國を中心とする太平洋を繞る諸國勢力消長の歷史、竝に關係地方の現勢を編述するに於ては、恐らく此の間の消息を窺知し、國民の向ふところを明示し得るに足らんか。

若し此の編述にして完成せば、前記二著と相俟つて國民の海事思想普及に資すること頗る大なるものあるべしとは、本會の夙に抱懷せるところなりしに、會々海軍軍事普及部より、皇紀二千六百年記念事業として同樣の慫慂あり、(財團法人義勇海防義會)と協力し、昨年五月本書編纂の事業を起し、爾來一年有餘、東洋史其の他に精通せる學者、竝に關係地方の事情に明るき研究家等を煩し、又是等に關する先輩長老の高配を得、更に海軍省方面の校閱をも仰ぎ、茲にその完成を見るに至れり。

終りに臨み、本書刊行に當り、總理大臣米內光政、海軍大臣吉田善吾兩閣下の題字、竝に樞密顧問官海軍大將有馬良橘閣下の序文を忝うせるは本會の最も光榮とするところなり。尙ほ本書編纂に關しては、本事業主務を囑託せる海軍大佐大島良之助氏及び各執筆者は勿論、幾多貴重なる文獻、資料を寄與せられたる諸官廳、各會社、諸團體及び特志諸彦竝に之が蒐集整理、編輯、監修、校閱、校正等に當られたる閣下竝に各位に對し茲に深厚の謝意を表するものの也。

尙ほ一言を附す、紙幅の關係上、凡例に記せる如く、力作に成る數種の原稿を割愛するの已むなきに至りしは甚だ遺憾とするところ、執筆者各位の特に寬恕を乞ふて止まざるところなり。

昭和十五年八月

(財團法人)海軍有終會

凡例

一、本書の記述は我が國を本位とし、第一歴史篇（太平洋に於ける我國勢力消長の推移）、第二現勢篇（太平洋沿岸主要地方竝に諸島の現狀）に分ち、巻末に參考附表及び索引を附せり。

二、叙事は口語體とせるも、引用文は成るべく原文の儘とし、又叙述の簡略を旨として敬稱及び敬語を省略せり。

三、曆日は明治五年十二月二日以前は大陰曆に由る。（明治五年十一月九日大陰曆を廢し太陽曆に改め、同年十二月三日を明治六年一月一日と定む）。

四、外國の地名・人名・船名等は年代又は出所の關係により一樣ならざるものあり。又附表・附圖と本文とに多少の差異なきを保し難し。

五、第一歴史篇には、我國に歐船の來航せる以前の事柄より記述し、巻末は概ね今次支那事變勃發直前迄とせり。

六、第二現勢篇には、太平洋を繞る各地方（中・南米を除く）及び諸島嶼の狀況を、日・支・泰・英・米・佛・蘇聯邦・蘭・葡の順序に列擧し、また沿革・地誌・政治・軍備・產業・貿易・交通等の部門に分ち詳述せり。

七、地圖は蘇聯邦を除く外は、特に最新の資料により特輯せるものなり。

八、「軍用資源秘密保護法（昭和十四年三月二十四日法律第二十五號）により」昭和十三年一月以降の物資に就きては、明かに想像せらるゝ理由により、生產額・生產能力・貯藏・輸出入、其の他運輸・通信・氣象等に關する記事を省略せり。

九、紙幅制限の爲め初版に於ては現勢篇中左記を割愛せしも、再版以後に於ては之を「補遺」として一括し收錄せり。

第二章の內、　汕頭・厦門・福州
第四章の內、　印度・緬甸
第六章の內、　印度佛領各地
第九章の內、　印度葡領各地
第十章　　中央アメリカ全部
第十一章　　南アメリカ太平洋岸各國

太平洋二千六百年史編纂委員及顧問（＊印は海軍有終會理事）

委員長　海軍大將　竹下勇（海軍有終會理事長）
委員　海軍中將　竹內重利＊
海軍造船中將　平賀讓＊
海軍少將　筑土次郎＊
同　武村耕太郎＊
同　松本匠＊
海軍主計少將　棚町五十吉＊
海軍大佐　廣瀨彥太＊
同　小山與四郎＊
同　西川速水＊
同　大島良之助
海軍主計大佐　生島稠
海軍大將　山梨勝之進
同　中村良三
海軍中將　小笠原長生
同　中島資明
海軍造兵中將　有坂鉛藏
海軍少將　向田金一
同　中島權吉
同　糟谷宗一
同　關根郡平
海軍大佐　有馬成甫
文學博士　辻善之助
東京帝國大學史料編纂所長　龍肅
日印協會理事　副島八十六

太平洋二千六百年史　目次

題字　前内閣總理大臣　海軍大將　米内光政
序　前海軍大臣　海軍大將　吉田善吾
緒言　樞密顧問官　海軍大將　有馬良橘
凡例
總說……一頁
第一歷史篇……一九
第一章　歐羅巴諸國の東洋發展以前の時代……一九
第一節　歐船來航以前の太平洋……一九
第二節　歐船來航以前の日本……二〇
第二章　歐羅巴諸國の東洋發展より寛永鎖國に至る時代……二〇

編纂分擔者

篇	章	節	氏名	
總說歷史篇	第一、二章		海軍少將	關根郡平
	第三章		東京帝國大學史料編纂所	文學士 岡田章雄
	第四章		東京帝國大學附屬圖書館	文學士 百瀨弘
	第五章		東京帝國大學史料編纂所	文學士 石井孝
	第六、七章		外務省	文學士 下村富士男
	第八章		法政大學講師	文學士 江口朴郎
			海軍大佐	大島良之助
現勢篇	第一章	第一節	南洋群島文化協會	大和瞭
		第二節	海軍大佐	大島良之助
	第二章		東亞經濟調査局	井出季和太
	第三章		醫學博士	磯部美知
			日本タイ協會	佐藤致孝
	第四章	第一、二節	東京女子高等師範學校教授	飯本信之
		第三、六節	マスター・オブ・アーツ	清水博
		第四節	東亞經濟調査局	井出季和太
	第五章	第一節	南洋經濟研究所囑託	三吉朋十
		第二、四節	海軍大佐	大島良之助
		第三節	南洋經濟研究所囑託	三吉朋十
		第一節	日本大學講師	今村忠助
	第六章	第一節	外務省囑託	伊東敬
		第二節	南洋經濟研究所囑託	三吉朋十
	第七章		元總領事	島田正靖
	第八章		外務省囑託	長谷川了
	第九章		南洋興發株式會社	齋藤太郎

第一節　歐羅巴諸國の太平洋進出……一四〇
ポルトガルの太平洋進出——スペインの太平洋進出——オランダ、イギリスの太平洋進出
第二節　太平洋に於ける日本と歐羅巴諸國との交渉……一六九
歐羅巴諸國の日本貿易——海外發展の氣運——南方への進出——寛永鎖國
第三章　歐米近代諸國の太平洋發展時代……一二一
第一節　歐米諸國東洋貿易の發展と東洋植民地……一二一
印度を中心とする蘭・英・佛三國の抗爭——歐米諸國の支那通商——露人の東進
第二節　歐米列强の東洋侵略……一三六
歐洲列强の東洋植民地の發展——列强の支那侵略の端緒——支那の内亂と列强の活躍
第四章　歐米勢力の日本進出……一九七
第一節　歐米勢力の日本進出前史……一九七
時代の概觀——日露關係の發生——日英及び日米關係の發生——鎖國制度の動搖
第二節　歐米列國の日本進出……二一〇
時代の概觀——米國の太平洋進出と開港——英國勢力の進出——英佛の對立——幕末に於ける對外
建設——緒言
第五章　明治維新より日清戰爭に至る時代……二〇五
第一節　太平洋に於ける列强……二〇五
「南洋方面に於ける英・獨對立の現出——佛・英・露の支那外郭侵略——朝鮮支那沿岸に於ける英・露の抗爭」
第二節　近代日本の國內建設……二三六
內政の刷新——經濟の發展——軍備の充實
第三節　近代日本の外交刷新……二七一
國土の開拓——條約改正——大陸政策の端緒
第六章　日清戰爭後より日露戰爭に至る時代……二二四
第一節　日清戰爭後の太平洋と列强……二二四
總說——英國——フランス——ロシヤ——ドイツ——米國
第二節　日露戰爭に至る迄の極東問題……二四九
日清戰爭後の支那問題——我國の擡頭——日露戰爭の原因

第七章　日露戰爭より世界大戰に至る時代……六八七

第一節　日露戰爭と其の後の太平洋……六八七

日露戰爭——我が國力の發展——日露戰爭後に於ける國際關係の變動

第二節　世界大戰と太平洋……六九〇

世界大戰の初期——世界大戰の中期——世界大戰の末期

第八章　世界大戰後の太平洋……六九〇

第一節　軍備縮少會議……六九〇

華府會議（附、九國條約）——華府會議（附、不戰條約）——倫敦會議

第二節　滿洲事變及び上海事變……六九七

事變前の支那情勢——事變の經過——上海事變——國際聯盟脫退と滿洲國の建國

第三節　支那事變……七二四

滿洲事變・上海事變後の支那情勢——事變の經過

第二篇　現勢篇……六四七

第一章　日本……六四七

第一節　內南洋……六四七

第二節　新南群島……六四七

第二章　中華民國……六四七

第一節　海南島……六四七

第二節　廣東……六四七

第三章　泰國（舊暹羅）……六四七

第一節　泰國史概觀……六四七

第二節　地誌……六四七

第三節　政府の對華僑政策……六四七

第四節　國防及び軍備……六四七

第五節　產　業……七四五
第六節　日泰貿易……七五七
第七節　交　通……七五九
第四章　英領各地、自治領及び委任統治領……七六七
第一節　濠　洲……七六七
第二節　ニュー・ジーランド……七八九
第三節　海峽植民地……八〇〇
第四節　英領ボルネオ……八一三
英領北ボルネオ——サラワク——ブルネイ
第五節　熱帶太平洋諸群島……八三五
概說——英領パプア——トーレス海峽諸島——ソロモン群島——サンタ・クルズ群島——英領ギルバート諸島——オシァン島——英領エリス諸島——英領フィジー諸島——英領フェニックス諸島——イルン島——英領ニューギニア——ビスマルク群島——ナウル島——英領サモア諸島——ニュー・ヘブリデス諸島
第六節　カナダ……八六七
第五章　北米合衆國及び同領有地……八八八
第一節　北米太平洋岸……八八八
太平洋岸三洲——アラスカ——パナマ運河地帶
第二節　ハワイ諸島　附ミッドウェー島……九二五
第三節　比律賓諸島……九三〇
第四節　其の他の太平洋諸島……九七五
グァム島——米領サモア諸島——ウェーク島——ハウランド島——ベーカー島——カントン島——エンダーベリー島——パルミラ島——ジャービス島——ジョンストン島
第六章　佛領各地……九八三
第一節　印度支那……九八三
第二節　佛領太平洋諸島……一〇〇八
佛領ニュー・カレドニア——佛領パウモト群島——ニュー・ヘブリデス
第七章　蘇聯邦極東三州……一〇二五
沿海州——カムチャツカ——樺太

第八章　蘭領各地……一〇三〇
第九章　葡領各地……一〇三九
第一節　チモール……一〇五九
第二節　澳門……一〇八二

附表

第一　太平洋に於ける海上權力の消長……一〇八六—附表一
第二　海外發展の偉人（附、著名漂流者）……附表一
第三　太平洋沿岸獨立國及び屬領……同　六
第四　本朝年號表……同　九
第五　太平洋諸國通貨一覽……同　一四
第六　太平洋各地度量衡一覽……同　一六
第七　主なる參考圖書……同　二三
第八　索引……索引一—一〇
附圖（卷末ポケット）
第一　太平洋航路航空圖
第二　太平洋諸島圖

挿入地圖（八葉）

內南洋地圖……六五四—六五五
海南島全圖……六八〇—六八一
アヘン問題紛爭當時の廣東・虎門・香港地方圖……六九六—六九七
泰國全圖……七二二—七二三
比律賓諸島圖……九五八—九五九
蘇聯邦極東三州圖……一〇一八—一〇一九
蘭領東印度諸島全圖……一〇四〇—一〇四一
葡領チモール附近圖……一〇五〇—一〇五一

挿入寫眞（アート紙十八葉）

渡唐船の圖……二八―二九
倭寇圖卷（二葉）……九八―一〇九
リンスホーテン東洋紀行地圖（二頁續）……六〇―六一
織田信長の軍船注文狀……八八―八九
荒木宗太郎の朱印船……九六―九七
日本義勇軍行列圖……一〇四―一〇五
英軍廈門砲撃の圖（二頁續）……一九六―一九七
露國使節根室冬營の圖……二〇〇―二〇一
薩英戰爭の圖（二頁續）……二五四―二五五
英米佛聯合艦隊下關砲臺占據の圖……二六〇―二六一
長藩主父子と英提督キング……二七八―二七九
長崎海軍傳習所……二八六―二八七
華府會議場……五八四―五八五
戰役記念碑及び記念樹と島民の母子……六五〇―六五一
新南群島先占記念碑……六七四―六七五
泰國皇帝及び首相と國會議事堂……七二〇―七二一
濠洲の牧羊……七八二―七八三

太平洋二千六百年史目次終

太平洋二千六百年史

總說

世界の強國と大國民

惟ふに太平洋二千六百年史は我が肇國以來現今に至る大和民族の太平洋生活乃至發展史である。上古九州南東部の一角から出發した　神武天皇御東征の舟師は船舶の一大集團から成つて居つたに相違ないが、それが南海及び瀨戸內海の制海權を掌握し、長くも　天皇はそれに搭乘した將兵どもを御直率遊ばされ、先づ大阪灣、次で紀伊の沿岸に揚陸を敢行し、遂に大和に攻入り、賊徒を誅定し、國礎を常磐堅磐に樹立し給ふたのであるが、それ以來國家も國民も共に發展向上して止まるところを知らず、今や世界の强國及び大國民の一となり、陸軍は東亞を睥睨し、又海軍は名實共に東亞に於ける最强海軍であり、居ながらにして該方面の制海權を完全に掌握して居るので、凡そ世界最大の海軍國たる英米でも、帝國に挨拶なくしては一指をも東亞に觸るゝ能はずと云ふ現狀である。斯く言つて了へば事柄は非常に簡單であるが、其の間波瀾重疊たるものがあり、又曲折頻繁たるものがあつたことを忘れてはならぬと同時に、由來大和民族は海洋問題を重要視し、陸でも强かつたが、海でも强かつたことを忘れてはならない。前述した神武天皇の御東征の如きは其の顯著なる實例であつて、前後六箇年に亙る御遠征は、當時としては明治時代の日淸・日露の兩役にも優る大規模のものであつたに相違ないが、吾人をして一層敬仰措く能はざらしむるものは、長くもそ

れが今日から見ても正に海陸聯合作戰の原則を文字通り實行に移されたものなることである。

然らば海陸聯合作戰の原則とは如何なることを指すかと言へば、我が國の作戰は原則として、海陸聯合の形式を取るべきものであると云ふことを指すのであつて、海軍は先づ敵の海軍を擊滅するか、或は之を其の根據地に閉籠めるかして制海權を獲得し、次で此の獲得した制海權を行使して敵の通商を破壞すると共に、渡洋陸軍輸送と其の敵地への揚陸を掩護する。斯くして揚陸作戰が成功したならば、陸軍が海軍に代つて作戰の主役を演ずることゝなり、敵の野戰軍を擊滅若くは驅逐し、敵に城下の盟をなさしめて、最終目的を達すると云ふ段取になるのである。

對外作戰の相違

之は判り切つた事柄のやうであるが、外國では假令對外作戰は斯樣な形式で行はれるとしても、それが信念となり、敎條となつて居ると云ふ場合は少ないやうに思はれる。卽ち彼のコロム提督に從へば、イギリスの如きは前記原則の前半たる海洋を制すると云ふ思想すら、西紀一六〇三年、卽ちエリザベス女王が逝去する年（皇紀二二六三年）迄は存在しなかつたのであり、尙ほ其の後に於ても、敵國の船舶や領土に海賊的侵襲を加へることを對外作戰の本旨として居つたのである。

然るに日本では神代の昔から斯樣な思想、否な事實が存在したやうに考へられる。單に　神武天皇の御東征許りでなく、天照皇大神が武甕槌及び經津主の兩神を遣はされて、國內を平定された場合に於ても之が窺はれるのである。是れ卽ち吾人が特に「大和民族は海洋問題を重要視し、陸でも強かつたが、海でも強かつた。」といふ言葉を用ひた所以であつて、日淸戰爭に於ても、將た又日露戰爭に於ても大體に於て海軍を以て先づ制海權を獲得し、次で陸軍の大陸作戰に移り、以て終局の目的を達成したのである。

今回の支那事變も亦これと同樣で、帝國海軍が西太平洋の管制權を確實に掌握して居つたと云ふ事實を基礎として帝國陸軍の倒蔣作戰が發展して往つた事は明白である。世人或は「日本人は明治維新以後、歐米人から兵術の傳授を受けた。」と言ふかも知れぬが、決してさうではない。それは長年月に亙り、吾人の腦裏に祀つて居つた思想が時代に惠まれて萠え出したものに過ぎないのである。繰返へして言ふが、我が海外作戰の傳統は決して海賊的侵襲を加へるのでなく、古今を通じて法に副へる所謂渡洋作戰を實施したと云ふところに、大和民族の面目が曜如として居るのである。

海洋關係の神話

大和民族は海洋に關係が深いので海洋關係の神話が多い。海軍の先輩であり、晩年を建國史の研鑽に捧げられた故松岡靜雄大佐は、「神代に於ける大和民族の日本開發は出雲が最初であつて、それから大阪灣・東京灣及び鹿兒島灣の順序に行はれたが、其の何れもが黑潮の本支流に沿つて居ることは、吾々の祖先が如何に海洋の利用に熱心であり、機敏であつたかを如實に說明するものである。」と言はれて居る。吾人は「天の逆鉾を以て普く蒼海を搜された結果、此の大八洲を發見された。」と云ふことに、我が肇國と海洋との重大なる關係の存在することを信ぜざるを得ぬのである。

世人は動もすれば帝國固有の特質に關して、「領土は狹隘であり、且つ天然資源が貧弱である許りでなく、風水害や地震が多い。」と云ふ風に悲觀的見解を持する者もあるが、四面環海であつて海洋の影響を受け易いと云ふ大きな特色に對しては目を蔽ふ傾向がないではない。申すも恐れ多いことながら、斯樣なる位置を占める日本列島に肇國された天祖の御偉業を恢弘し奉る爲には、吾人はどうしても海洋の影響を受けることが如何なる意義を有するか、先づ此の

問題を闡明しなくてはならぬ。

古來人口に膾炙する通り「帝國は四面環海である」。故に海洋の影響を受ける爲の最大要件は殆んど具備して居ると謂ふべきである。

帝國の地理的狀勢

地理學上から言へば立派に四面環海であつても、地形の如何に依つては、海洋の影響を受ける程度に差異があり、而かもそれは面積に反比例する。濠洲のやうな形狀をして居つてはいけないが、地形が狹長で熱帶から寒帶に亙つて擴延し、寒暖兩流に洗はれ、且颱風の通路上に橫はつて居れば、海洋の影響を受けることが極めて大きいのである。一昨千里の平野よりも、起伏の多い山地の方が氣象關係も複雜であり、又同じく海洋の影響を受けるにしても變化があり興味が多い。然らば帝國の地理的狀勢はどうかと言ふに、概ね左の通りであつて、海洋の影響を受けること甚大なるものがある。

(一)大體に於て東經百十度から同百七十度、赤道から北緯五十度に亙る海面に碁布散在する大小二千有餘の島嶼から成ること。

(二)島嶼中面積が相當に大きいものは僅に數個に過ぎず、それとても形狀が細長いから、國內の如何なる場所でも、海岸から僅か百粁とは隔つて居らぬこと。

(三)主要島嶼系統は、亞細亞大陸の南東岸に沿ひ、南西から北東へと伸び、寒暖兩流に洗はれる許りでなく颱風の通路上に存在すること。

(四)各島嶼は起伏甚しく、地形が極めて複雜であること。

元來海洋は陸地に對して、單に氣象學的のみならず、政治的乃至產業的影響をも及ぼさずには措かない。前述した神代に於ける大和民族の發展が、何れも黑潮の本支流に沿つて居るが如きは、確かに其の一例であるが、帝國では海流が近海を流れて居る爲に古來相當大きな影響を被つて居る。蓋し終始一定方面に流走して居るところの海流は、絕えず、漂流人又は漂流物を其の沿岸に齎らして、該地方の居住者に刺戟を與へ、之を促して溯上への交通を開かせることゝなり、海運業や水產業の興隆を招來することは爭ふべからざる事實であるからである。波間に躍る大魚を見れば何人も漁撈がやつて見たくなるであらうが、磯邊に打寄せらるゝ珍奇な生物や物件を見れば、恐らく萬人が萬人、海洋の彼岸に對する憧憬を持つであらう。ヨーロッパに於けるノルウェーは之に關する最も模範的な例證であると言つても良いが、帝國に於ては到るところ斯樣な條件に惠まれて居る。之は鎖國下舊幕時代に加賀・能登方面で海運業が非常に發達したことでも判るであらう。此の點から觀れば帝國は正に東亞のノルウェーであるが、凡そ寒暖兩流が一國の海岸に沿うて流れるならば、それは概ね違つた方向を取るからして、交通上に及ぼす效果も亦甚大であるに相違ない。要するに海洋は之に親炙する人類を刺戟して海洋精神を鼓吹するのであるが、帝國は此の點に就て世界の如何なる國家も比肩すること能はざる天惠を持つて居るものと謂はねばならぬ。若し吾人にして此の天惠に目覺め海洋を家とし波濤を友として海洋發展を試むるならば、我が國威は益々伸張するであらう。

海洋精神の鼓吹

前述したところに依り、帝國は肇國當時既に海洋帝國として大々的發展を遂ぐべき幾多の特質を持つて居つたことが明瞭となつたであらうと思ふが、しかし何も之で以て全部を盡した譯ではなく、其の他一々、之を擧げれば枚擧に

遺ないのであるが、次には唯だ其の四大要項を掲げて聊か說明を試みることゝしよう。

肇國の理想

第一は國民の民族的包容力が大きいことに就いてゞある。畏れ多くも　神武天皇は肇國の大詔に於て「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ふて宇と爲さむ。」と仰せられたが、之は單に一國を以て家とし、民を赤子の如く愛撫して、皇道を內外に布かむと云ふ意味である許りでなく、轉ては、世界一家の人類愛にまで進展する可能性を持つて居るのであつて、又以て日本精神が排他的でないことを如實に證明するものと謂ふべきである。惟ふに祖國愛と人類愛とは相扞格するものではなく、充實した祖國愛があつてこそ、初めて充實した人類愛があるのであつて、祖國愛なくして何の人類愛ぞと謂はなくてはならぬ。　神武天皇は更に、「吾れ必ず鋒刃の威を假らずして、坐ながら天下を平げむ。」と仰せられたが、我が肇國が如何に崇高なる理想の下に行はれたか、之で以て何人も想像出來るであらう。

國民の生活樣式

第二は帝國國民の生活樣式に就てゞあるが、吾々は肇國以來米と魚とを常食として居る。而して米の生産高は原則として住民を養ふに充分であるのみならず、要すれば尙ほ米を增産する餘地をも存するのである。次には魚類に就いてゞあるが、一般家畜は一單位の動物性蛋白質を人類に提供する爲には六乃至七單位に上る植物性蛋白質を攝取しなければならぬのに反し、魚類は然らず、たゞ捕獲するだけで飼料を與へる必要は毫もない。餌を與へるのは釣る時だけである。漁場は廣く七大洋全部に亙り、魚族は殆んど無盡藏である上に、漁業は日本人の最も得意とするところで、夙に驚異的發達を遂げ、日本は世界第一の漁業國となつて居るのみならず、將來益々發展の可能性があるのである。之を要するに帝國國民は米と魚を常食とする限り、勿論或る種の努力を必要とはするが、食糧品には缺乏を來さぬ筈である。併しながら、吾人が最も重要視するのは米と魚を常食とする帝國々民は其の生活費が非常に安く、從つて帝國商品の生產費が非常に安い點である。イギリスが全世界に亙つて搾取の魔手を伸ばし續けてゐなければならないのは、畢竟生產費が高い爲であるからして、生產費の安い我帝國は世界の如何なる地方と貿易を營んでも、イギリスとは全然其の趣を異にし、搾取にはならぬとも言ひ得るであらう。

帝國の植民政策

第三は帝國固有の植民政策問題であるが、之れ亦一大特徵を有してゐる。帝國は肇國以來、幾度か新領土を獲得して居るが、其の都度採つたところの植民政策を檢討して見ると、確かに同化主義を堅持し、己の欲するところを新領土にも施さうと云ふのであつて、イギリスの如く、生產・航海及び植民と云ふ三つの連環から成る植民政策を採つて、新領土から搾取しようと云ふ傾向は露程も看取することが出來ないのである。彼の臺灣、將た又、朝鮮の開發にしても、何處迄も帝國は同化主義を採り、新領土を本國と同じものに作り上げよう、育て上げようとして居るのである。要するに、帝國の植民政策は歐米のそれと異なり、己の欲するところを新領土に施さうと言ふのが帝國の植民政策である。所謂皇道精神が斯樣なところにも現はれて居るのである。

國民皆兵の傳統

第四は建國以來帝國の傳統となつて居り、國防上から觀ても極めて重要視しなければならぬところの國民皆兵主義に就てゞある。

誠に恐れ多いことではあるが、明治天皇が軍人に下し給ふた御勅諭の御精神は何處に在るかと言へば、それは「神武の昔に歸つて、國防は國民皆兵で之に當れ」と仰せられた點に在る。今御勅諭の前半の御意味を平易な言葉で要約すれば、「神武の昔には擧國皆兵で、而かも　天皇御統率の制度であつたのに、中世以降それが武家の私兵となり、統治權も統帥權も實質的には武家の頭目たるもの〻有に歸したのであつたが、明治維新に際して、國民皆兵主義の昔に

復した。」と云ふことにならうと思ふ。

實にや帝國は以上の如き特質の基礎の上に洋々たる前途に惠まれつゝ、潑剌たる意氣を以て肇國の當初より海洋發展に乘出したのであつた。斯くして先づ帝國の統一と云ふ當時としては一大事業が完成されたのであるが、吾々の祖先が海洋國民であつて、海洋を大々的に利用したと云ふことが其の成功の主要原因であつたに相違ない。

海面の管制

神功皇后の三韓遠征は帝國として最初の外征と認むべきであるが、三韓に對する此の遠征の結果、之を我が勢力下に收めたと云ふことは、取りも直さず朝鮮海峽を管制したことになるのであつて、之は海軍戰略から見て決して輕々に看過出來ない重要問題である。世人或は、「三韓遠征は大陸發展の端緒であつて海洋發展ではない。」と言ふかも知れぬが、帝國は臺灣から占守島に亙る其の島嶼線に依つてアジア大陸との間に包容するオホツク海・日本海、及び東支那海に於て後顧の憂があるやうでは、太平洋若くはインド洋上で自由に手腕を揮ふことは出來ない。就中最も重要性を持つのは日本海及び東支那海であるが、兩海面の管制權を掌握せんが爲には、どうしても朝鮮海峽を我が支配下に置かなければならぬのである。彼のマハン提督は一八八七年初めてアメリカの海軍大學校で海軍戰略を講述した際に、「アメリカはカリブ海を管制する爲に同海を圍繞する諸鎖鑰點を占據しなければならぬ。」と言つたが、朝鮮海峽は正に日本海及び東支那海を管制する爲の鎖鑰點である。

恐れ多いことではあるが、吾人は　天祖が特に帝國を選んで國を肇めさせられたのは、畢竟前記三海面を我が支配下に置かんとする御意思があつた爲であらうと拜察するが故に、此の問題に就て聊か所見を開陳したい。抑々海洋を支配管制すると云ふことは、要するに海上交通線の確保に外ならぬのであるが、それには二つの方法がある。第一は

一定區域の海面全體を自國の支配下に置くことであり、第二は海洋を橫斷して自國根據地の連鎖を作ることである。前者を地域式管制法とすれば、後者は路線式管制法である。アメリカがカリブ海を其の勢力下に置かんとすることは地域式管制の一例であるが、イギリスでは、多數根據地の連鎖幾條かを設け、路線式管制に依つて、本國と世界各地に亙る屬領との交通線を維持して居るのである。世人は往々にして「イギリスは戰時北海を管制することが出來る」と言ふけれども、イギリスにして若し一三四七年エドワード三世がフランスから奪取したカレーを失はず、それから又一八〇七年占領したところのヘリゴラント島を手放さず、現今のデンマークを領し、且又ノールウエーのベルゲンを持つて居るとすれば、同國は北海を完全に管制するものと謂ふべきであるが、現狀に於てはそれは全く不可能のことである。

北海の爭奪

現に第一次世界戰爭の際には、英獨兩國の間に前後四箇年間に亙り、北海の管制權を繞つて爭奪戰が行はれた譯であるが、此のことはイギリス側の北海管制が完全でないことを最も雄辯に物語つて居る。それでも北海沿岸諸國と戰ふ場合には、英佛海峽とノールウエーとスコットランドとの間に在る海面を閉鎖することに依つて、然らざれば世界全部に亙るべき制海權の爭奪戰を北海だけに局限することに依つて、自國は北海以外の海面を自由に使用することが得られるに拘らず、敵にはそれが全然不可能であるやうにすることが出來るけれども、他の海洋を隔てた他の大國と事を構へる場合には、イギリス本國の安寧は、一に北歐諸國の好意的中立に依存しなければならぬ。若し然らざる場合には、恰もアメリカ獨立戰爭の際に於けるが如く、イギリス本國は絶大な危機に直面するであらう。それ故にイギリスが、戰時居ながらにして北海を管制し得る地位にないことは、科學の進步した現今に於てはイギリス本國に對す

る不安の原因と謂はねばならぬ。之に反して北海を繞る領土的關係が前述した假定の如く、イギリスに有利であるとしたならば、同國の世界的地位は一層重きを加へるであらう。イタリーは世界戰爭以來、努力に努力を重ねた結果、今や完全にアドリア海を自國の湖水たらしめ得たのであるが、同海面は假令狹くとも同國としては決して輕視出來ないのである。今やイタリーはコルシカ及チュニジアの兩鎖鑰點を狙つてゐるが、將來これ等の地を領有することに依つて、チレニア海を自國の支配下に置かんとして居るのである。

基礎海面の獲得

之に依つて之を觀れば、一つの國家が斯樣な海面を持つた場合には、平時に於て其の上に引いた發展線は、戰時に於ても却々容易に切斷されるものでなく、之が切斷されざる限り、該國家の發展を助長することは確實であり、又戰時には作戰の基礎となることも明瞭であるが故に、吾人は之を基礎海面と稱して居るのである。彼のバルト海はドイツに對する基礎海面であり、黑海は不完全ながらもトルコに對して、又カリブ海はアメリカに對して同樣の價値を持つて居るのである。マハン提督は曾て「內線占位は割中占位の延長若くは集合である。」と言つたが、基礎海面は內線占位を寄せ集めたものとも言ひ得るのであつて、多ければ多いほど當該國家は發展の態勢が大きいものと謂ふべきである。果して然らば帝國が居ながらにして、オホツク海・日本海及び東支那海の三海面を管制し得る地理的位置を占めて居ることは、海洋發展上の一大利點と謂はざるを得ぬ。

それと同時に又內地と朝鮮の如き地理的關係に在る兩國の間には、古來何れかの一方から併呑運動が進められるのを例としたことを忘れてはならぬ。蓋し分離して居つては、互に不安を感するからである。丁度二個の帶電體を近づけた如く、ポテンシャルの高い方から低い方に電氣は流れるのである。フロリダとキューバとの間にも斯の如き關係があつた。昔イスパニアの國力が盛んな時代に、デ・ソートはキューバからフロリダに渡つてミスシッピー河の流域まで探檢し、爾來フロリダはイスパニアの領土となつて居つたが、アメリカの勃興に伴ひ、漸次フロリダ側のポテンシャルは高くなり、一八一九年アメリカは遂にフロリダを買收し、一八八九年の米西戰爭に依つて、遂にキューバをも其の勢力下に收めて了つた。

地理的關係に及ぼす國力消長の影響

內地と朝鮮との間に於ては、古來幾度か日本から朝鮮に働き掛けたが、朝鮮からも日本に手を出した。フロリダと同樣、朝鮮は日本に對し餘り危險ではなかつたが、其の背後に在る勢力が朝鮮なり、フロリダなりを橋梁として使用したのである。刀伊の入寇、及び元寇は卽ちそれであるが、日淸戰爭の支那、日露戰爭のロシア、これ亦朝鮮經由で帝國を侵略せんとしたのである。樺太と日本との關係も亦た之に酷似して居る。未だ此の方面の歸屬が明瞭でない時代に、德川幕府は間宮林藏に命じて探檢を行はしめ、間宮は文化五年（一八〇八年）內地發、樺太西岸及び沿海州を實地踏査して黑龍江を發見し、之を遡つてハバロウスク附近に達し、翌年歸國した。それ故に樺太は勿論、黑龍江以南の沿海州は全部、否な其の北方地帶迄も先取權に依り、帝國の領土であつたのであるが、帝國の國力が振はなかつた爲に、遺憾ながらロシアに略取されたのである。又カムチャツカも海流の關係からロシア人よりも日本人が先に發見したに相違ないのである。尙ほ是等の關係は我が臺灣と其の對岸大陸との間に於ても之を認め得るのである。衙も帝國側のポテンシャルが低ければ敵の侵略を受けることは必然である。現在對手が弱國であるからとて油斷するのは頗る危險である。

觀じ來れば、彼の三韓遠征の極めて重大な意義を有するものであつたことが判ると同時に、古代の大和民族は出處

進退すべて進取的大乘的であつた。併しながら、時日の推移と共にそれが段々退嬰的小乘的となり、海上權力も次第に衰微したから、三韓は離反し、折角の日鮮海峽管制權も之を放棄せざるを得なくなつた。その後は海洋を管制することはおろか、海岸線さへも守り切れぬと云ふ想定下に、所謂水城を設けて萬一の場合、太宰府の安全を期すると云ふが如き情けない有樣になつた。

斯くて帝國の貴重なる傳統が廢たれて行つたことは返へす〳〵も遺憾であつたと謂はねばならぬ。

海洋發展と國力の消長

爾來約九百年間、造船業の如きは衰頽その極に達した。平安朝時代の初期には、日支兩國間の航海に堪へ得る船舶を建造する事が出來ない爲め、遂に遣唐使の派遣を中止したと云ふ事もあつた。又彼の元寇の役當時には、我軍用船は大きさに於て恐らく敵の百分の一にも及ばなかつたと云ふ悲境に墮した。海外進出の橋梁たる船舶が斯樣な有樣であつては、海洋發展そのものゝ振はなかつたのも亦當然のことゝ謂はねばならぬ。換言すれば、帝國は海軍が衰へれば海運業も亦衰へ、丁度殼の中に蹙まつて居る蝸牛のやうに、國外に出て居つた一切のものを引込めて了ひ、國內だけで生活して行かうとしたのであつた。併しながら、果してそれで完全であつたかと言ふに、然らず、其の間、或は刀伊の入寇とか、或は又元寇の役などが起り、一步を過まれば國家は崩壞するかも知れぬと云ふ大國難に見舞はれたのである。併かし、幸にしてそれを免れたのは全く天佑と謂はざるを得ぬのであつて、海上權力を失へば帝國の發展は固より、生存すらも不可能であると云ふことが如實に證明されたのである。

吾人は帝國最初の開國は肇國其のものであると思惟するのであるが、鎖國の夢は皇紀二二〇三年ポルトガル船の種子島來航に依つて突如として破れ、爾來世界各國との交通が自由且つ活潑に行はれるやうになつた。久しく藪中に蹙まつて居つた蝸牛が悠々と角を伸ばしたのである。併しながら、縱令、鎖國の幕は閉ざされてあつても、帝國々民は持つて生れた海國性を何時までも死藏するものではない。僅かの刺戟で以て爆發し、鎖國下に於ても既に早く海外進出に乘出してゐたのであつた。それは外でもない、彼の所謂倭寇である。元來倭寇なるものは、西國の邊民が元寇擊攘後の大勢に乘じて海外に進出し私貿易を營んだものであつて、必ずしも帝國の傳統に準據した正々堂々の對外發展と謂ふことは出來ないが、又以て我が海國的國民性の迫力を證するに足るものと謂はねばならぬ。

正々堂々たる海外發展

其の後、寬永鎖國に至る九十六年間には正々堂々たる對外發展が行はれた。豐臣秀吉の朝鮮遠征や德川家康の琉球遠征、又は貿易振興策がそれであつて、其のまゝ進んだならば、帝國は一大海上權力國となり、歐米列强と伍して世界に雄飛することが出來たかも知れぬと思はれるが、不幸にして寬永鎖國が行はれた爲、あたら好機會を逸したのであつた。

併しながら、それは決して完全なる鎖國ではなくて支那及び和蘭との通商は依然として繼續せられたのみならず、或は國學が復興し、或は沿岸海運業が盛んになり、更に又具眼の士は既に早く直接蘭人を通じて、若くは漢譯の洋書を介して世界の大勢を研究した。更に他日の大發展に資すべき準備的現象が各方面で認められたのである。換言すれば此の期間は單なる鎖國ではなく、次の開國時代の到來を待つて大に外に伸びんが爲に先づ內部的に實力を培養した時代であるとも謂ひ得るのであるが、之と同時に此の期間に於て、帝國を繞る國際情勢が急激なる變化を來たしたに拘らず、帝國は手を空しうして之を傍觀せざるを得なかつたことは、何と言つても寬永鎖國の因果應報と謂はなければならぬ。寬永鎖國が德川幕府に依つて初めて斷行されたのは皇紀二二九九年（寬永十六年・西紀一六三九年）であ

るが、此の年に其の後帝國の海洋發展に極めて大なる影響を及ぼすべき三つの出來事があつた。卽ち、シベリアの北部を東進したロシア人が初めて太平洋に顏を出したことは其の一であり、イギリス人が大陸インドの沿岸にスラット、マドラス及びカルカッタの三要地を取得して、「これから大インドを併呑するぞ。」と言はん許りの姿勢を示したことは其の二であり、それから又、アメリカの植民がイギリスに依つて眞劍に開始されたことは其の三であつた。彼のペリー提督の我が國への來訪に依つて、帝國が開國するに至つたのは、皇紀二五一四年（安政元年・西紀一八五四年）であるから、二二九九年より二百十餘年を經過して居るのであるが、此の間にアメリカは既に大西及び太平の兩大洋に臨む一國となつて、其の勢力は遠く東亞までも波及し、又イギリスは全インドを略取した許りでなく、支那にも魔手を伸ばし、それから又ロシアは現極東蘇聯領の殆んど全部を取つた許りでなく、更に千島及び樺太を略し、北海道をすら窺つたのであつた。

英・露・米の海洋進出

二百十餘年の間帝國が長夜の惰眠を貪つて居る間に、其の周圍は全部英・露・米三國の勢力範圍になつて了つた譯である。當時表面は儀禮を重んじつゝも內心斷乎たる決意を藏して居つたペリーは、德川幕府の煮え切らない態度に飽き足らず、或は麾下諸艦を品川沖に遊弋させ、或は又江戶からその砲聲の聞えるところで實彈射擊を行つたりなどして頻りに幕吏を威喝し、開國談判を有利に導いたことすらあつたが、海軍も無ければ沿岸に適當の防備施設をも持つてゐなかつた帝國としては唯々泣寢入りに終るの外なかつた。

由來、海上に於ける一國の境界線は波間に浮動しつゝ、海上權力の消長に因つて進退するものである。されば苟も海上權力にして衰頹せんか、境界線も亦從つて後退し、遂には我が海岸線に至つて止まるが、之に反して海上權力の興隆せんか、境界線も亦從つて前進し、遂には海洋の彼岸、他國の海岸線にまで達するのである。而かも吾人は海上權力の影響は何れの場合を問はず、更に海岸線を越えて內陸に迄も及ぶものであることを忘れてはならぬ。

歐米脅威の發來

「海を制すれば結局、世界を制するを得る」ことは、最早些の疑もないのであるが、ペリー來訪當時の帝國は我が海上權力が全く衰滅し、之と反對に他國の海上權力が我が海岸線を越えて內陸までも其の威力を及ぼした適例と見做すことを得るのであつて、雄大な海上權力を擁する當時の英米露三國は帝國に對して生殺與奪の實力を持つて居つたのである。

そこで「斯樣に無力な帝國が當時無事であつたのは何故であつたか？」と云ふ疑問が起るのであるが、之は當時偶然にも、帝國の周圍に迫つて來た前記三國が相抗爭し相排擊して居つた結果に外ならなかつた。吾人は今にして當時を追懷すれば、所謂薄氷を履んで深淵に臨むの感なき能はずであるが、是等三國の勢力が相排擊して居ると云ふ情勢は左程容易に再び起つて來るものではない。「天は自ら助くるものを助くる」のであつて、天佑を過信すれば災禍立ちどころに至るのである。尙ほ又此の際吾人として銘記しなくてはならぬことは、帝國の存立に對する歐米の脅威は、何時でもアジア大陸、インド洋及び太平洋の海陸三方面から襲來する點であつて、之は今も昔と變化がなく、帝國は斯樣な三つの脅威を排除克服する實力がなければ發展は固より、存立さへも亦不可能と云ふことになるのである。故に實力保持は絕對に必要である。然かも其の實力を行使するのは最後の手段であつて、一般的には斯樣な實力を背景とする外交のみに依つて、偶に前述の如き外來の脅威を排除克服し得ること勿論である。

現在アジア大陸に勢力を扶植した帝國としては、蘇聯の侵略に對しては先づ大陸に國防の第一線を設定しなければ

ならぬが、日本海やオホツク海が我が完全なる基礎海面と成つて居らぬ現狀では、海上からする脅威々度外視することは出來ない。況んや海上を唯一の進攻路とする英米兩國を相手とする一朝有事の日を考ふるに於てをやである。凡そ「同時に多數國家を敵とする勿れ」とは古代ローマの箴言であつて、之を嚴守したればこそ、あれ程の大帝國が出來上つた譯であるが、吾人は外交に於ても將た又戰略に於ても、苟も一正面で敵對行動に出でんとせば、他の正面に於ては難攻不落な防禦線を設定して置かねばならぬ。併しながら、吾人は外交と戰略との相關性を主張するが如く、海陸軍の間にも之と同樣な、否なそれ以上の關係が存在することを確認するものであつて、海陸軍は飽く迄も協同戮力、相互困難の排除克服を期せねばならぬ。

海洋發展の國是

斯く觀察し來れば、安政開國の行はれた德川幕府の末期頃、帝國の國際的地位は如何にも危險極まりないものであつたことが明瞭になるのであるが、幸なる哉、其の後幾何もなくして明治維新となり、帝國は神武の昔に歸り、擧國舊來の陋習を一擲し、開國進取を國是として海洋發展に乘り出したのである。熱々惟ふに帝國が爾來七十餘年にして世界屈指の富强を致し、國運の隆昌いま尙ほ瞹々乎として止まざる所以のものは、海洋國民としての傳統を遺憾なく發揮した爲であると謂はねばならぬ。彼のシーボルト博士は明治維新以來帝國が興隆した原因を國民皆兵及び義務敎育の兩制度を布いたことに歸して居るが、帝國は西洋文明を採り入れ、之を咀嚼消化する能力を擧國以來滿養して來たのであつた。世人或は帝國の陸軍は最初フランス人、後ちドイツ人に依つて敎導され、又海軍は最初オランダ人後ちイギリス人に依つて敎導されたと思惟するかも知れぬが、縱令技術や兵器は歐米人の傳授を受けたとしても、之を活かしたものは何處までも我が傳統的日本精神であつて、換言すれば帝國は隨神（かんながら）の陸海軍を持つて居るのである。

新秩序要望

最後に吾人は所謂東亞の新秩序問題に就て一言したいと思ふ。凡そ新秩序が要望される處には舊秩序がなければならぬ筈なのであるが、世界舊秩序とは、要するに本國の繁榮を維持せんが爲に植民の對象となつた世界の大部分をして鑛產國及び農產國として存續させ、而かも一般工業の發達は之を阻止しつゝ、安く買ひ取り高く賣り捌き、搾取を繼續して行かうとする歐米諸國、殊にイギリスの世界開發體制の如き以外の何ものでもないであらう。

現在世界人類多數の生活が內外から脅威され壓迫されつゝあるのは、畢竟斯樣な舊秩序が依然として暴威を揮つて居るからであるが、所謂新秩序建設運動は斯樣な舊秩序を破壞し、人類全體の福祉を增進せんとする其の新生存體制を樹立せんとするものに外ならぬ。卽ち舊秩序に惱んで居るのは世界全體であるが、イギリスが海洋發展に乘り出して以來こゝに三百餘年間、其の間搾取に苦しみ拔いた東亞の地から、特に新秩序建設の要望の聲が熾烈に擧がつたのは洵に無理からぬ次第である。「然らば東亞の新秩序とは如何なるものであるか」と云ふことになるが、惟ふに「他から搾取されず、又他を搾取しない東亞全民族の生存體制」を樹立したならば、槪ね此の要求に適應し得るのではあるまいかと思はれる。之れ取りも直さず四海同胞共存共榮を以て理想とする我が皇道主義、八紘一字の精神に合致するが所以であるからである。

支那事變勃發以來二箇年有半を經過し、蔣政權は未だ倒るゝには至らないが、執拗なる列國の援助に依つて僅に瞼喘を保つに過ぎぬと云ふ有樣であるから、既に汪政權の成立を見たことでもあり、さしも長期に亙つた本事變も愈々終末に向つて一段階を畫することゝなり、玆に初めて新秩序建設問題は愈々本格的に進展を見るに至るであらう。卽ち支那事變は東亞新秩序の建設に依つて局を結ぶことになるのであるが、それは單に我が傳統たる海洋國民的世界政

策が實行の緒に就いたと云ふまでのことである。

悠久二千六百年、我が制海威力には幾多の消長あり、之に伴つて皇國々民の海外發展も自ら消長し、海上權は皇國發展上缺くべからざる要素なりとの原則は常に實證せられて來た。「海行かばみづく屍」と大伴家持をして　天皇に捧ぐる忠誠を披瀝せしめた此の歌詞は、日本民族の海に親み海を怖れぬ氣概を餘韻にこめ漂はして居る。「天皇の御命長み石に觸りうのはら渡る父母をおきて」に至りては、忠誠の至情に海洋征服の氣宇を昂揚させてゐる。由來海に生き世界を家とし、天雲のむかぶす限り海洋發展を志す性質は、遠く祖先の血潮より脈々と承け繼いで居りながら、中古以來一般に浦安の國、瑞穗の國として海上權に對する認識を缺き、屢々海外發展の好機を逸して來たことは洵に遺憾の至りである。

太平洋時代

顧つて眼を西歐に轉ずるとき、往古の海洋は地中海の時代であつて、之を制壓したる羅馬帝國は西歐の覇者であつた。次で舞臺は大西洋に遷り、一時西班牙全盛の時代を見たるも、其の施策に堅實性を缺きたる爲、間もなく英國の爲に壓倒せられ、爾來百有餘年間大西洋の時代となり、英國は實に其の覇者として今日に及んだ。今世紀に入りては舞臺は三遷して太平洋の時代となり、太平洋の利權を繞る列强の角逐は眞に遠大の規模を以て熾烈を極めてゐる、克く之に優勝する國家は興隆し、然らざるものは衰ふるは當然である。今や我國は興亞の聖業を手始めに一大飛躍を爲さんとし、未曾有の重大時機に逢著してゐる。事の成るも成らざるも、制空權を含む制海權確保の上のことであつて、所要方面の海上制壓こそは、實に我國家發展の礎石であり、核心であると謂はねばならぬ。

第一歷史篇

第一章　歐羅巴諸國の東洋發展以前の時代

第一節　歐舶來航以前の太平洋

古代史と海洋

東洋で最も早く文化の開けた地方は黃河の沿岸地方とガンヂス、インダス兩河の流域とであつた。これ等の大河に沿うて擴がる豐饒な沃野に農業民族が築き上げた農業文化が古代支那、古代印度の文化を形づくつてゐたのである。而して是等の大河が注ぎこむ大洋は未だ交通のために利用されること少なく、かへつて他の地方との接觸を妨げる障壁となつてゐたと考へられる。

此のことは歐羅巴の古代文化が地中海に發生したこと〳〵較べて意義が深い。卽ち地中海は二つの大陸に圍まれた平穩な內海で、そこには早くから海上交通が行はれてゐた。世界で最も古い通商航海國であるフェニキヤの商人たちは既に西曆紀元前十五世紀の頃から盛んに地中海を往來して沿岸各地の仲介貿易に從ひ文化の傳播に盡してゐる。又バルカン半島の南端に興つたギリシャは、其の國土が狹かつた爲に人口が早くから國外に溢れて遠く黑海の沿岸からアフリカの北岸、及び現在のフランスの南岸地方にまで植民市が出來てゐる。かうして地中海は沿岸諸國や島々を結びつけ、その間に文化を交換し、物資や商品を運搬するための交通路として早くから歐羅巴の歷史の上に大きな役割を

果してゐた。この地中海を制壓し、始めてこれを完全な統治の下に置いたのが後のローマ帝國である。

ところが東洋にあつては自然の條件が全くこれと異なつてゐる。支那でもまた印度でも同樣に、その海岸地方は直接風浪の激しい外洋に面してゐるので、上古に在つては沿岸航行を除いて海洋の交通はあまり發達しなかつたのである。

古代支那の海上交通

黃河流域に最古の支那文化を築いた漢民族は全く海に緣遠い民族であつた。それ故、支那の海上交通の起源は寧ろ漢民族によつて東夷と蔑まれ、南蠻と卑しまれてゐた東南岸地方の民族によつて行はれた沿岸航行にあつた。春秋戰國の時代に吳や越の國が興つた揚子江口方面と、齊が據つた山東地方とは沿岸航行の據點として可なり早くから開けてゐたやうである。殊に山東地方は黃河の河口に近く、また北支那の海上交通の要衝に當つてゐた。秦が黃河上流地方から興つて統一事業を完成して後、始皇帝は山東半島の南岸膠州灣に臨む琅邪に滯在してゐた時、多くの船を派遣して東方の海上にあると信じられてゐた蓬萊の島を探り、不死長生の仙藥を求めさせたといふからには、大規模な海上探檢の事業が營まれたのであらう。蓬萊の島とはわが國のことを指したものとも考へられる。そのころ渤海灣の航行も盛んに行はれてゐた。山東地方はまた朝鮮に渡るために重要な地位を占めてゐた。秦の後をうけた漢の武帝が朝鮮を伐つた際に、五萬の軍勢が水軍として大同江口に迫つたと傳へられてゐる。北朝鮮が漢によつて征服され、その郡縣が置かれることゝなつてからは、一層頻繁に船舶が往來するやうになつたに相違ない。

黃代の南海地方

玆で眼を轉じて南海地方を見ると、この方面に支那の勢力が及ぶやうになつたのは、やはり漢の武帝の時代であつた。尤もこれより先、秦の始皇帝が南方を經略した時に現在の廣東省・廣西省から安南北部に亙る一帶の地が其の版圖に入つたけれども、秦が滅びてからは、これ等南支那の地方は異民族である南越の領有するところとなつてしまつた。武帝はこれを伐つてその地方に郡縣を置いたが、この方面の中心地は廣東である。廣東は南海から支那本土に入る重要な海港として當時すでに繁榮を見せてゐた。象牙・犀角・翡翠・眞珠など南海地方から齎らされる珍奇な物貨は支那では奢侈品として極めて珍重された。これ等の品は總て廣東を通じて輸入された。また同じ港から支那に產出する良質の絹が海外に輸出されてゐた。なほ支那の絹は當時主に陸路を遠く印度地方にも齎らされ、更に波斯方面から地中海を渡つてローマの貴族市民たちの手にわたり、その愛用するところとなつてゐた。

支那と印度との海上交通

漢の時代に、始めて南海地方と直接交通の路が開けるに及んで、盛んに使節が派遣され、馬來半島、爪哇、スマトラ、ボルネオ、その他南海の島々にあつた多くの國々はいづれも漢の威力に服し、朝貢するやうになつた。漢の使節はまた印度地方にも派遣された。この頃から支那と印度との間に海上交通が行はれるに至つた。當時印度から支那に通ずる交通路としては陸路を除いて、一は緬甸に渡航してそれから雲南地方に入るもの、今一つは海上マラッカを廻つて南支那に達するものがあつた。併し支那の商船は此の時代には未だ印度洋までは進出しなかつた。支那の商船が印度洋に往來し、貿易に從ふやうになつたのは後漢のころからで卽ち二世紀のことである。印度を通じて支那とローマ帝國との間に海上の交通が行はれるに至つたのも此の時代である。

古代印度と歐羅巴との交通

今それに先立つて、印度と歐羅巴との間の海上交通の歷史を辿つて見るのに、西曆紀元前四世紀にアレキサンダー大王は、波斯、バクトリヤを經て陸路インダス河の流域にまで兵を進め、その歸途都將ネアルコスに命じて海路をとらせ、インダス河口から波斯灣に至る沿岸の航行日誌をつくらせたと傳へられてゐる。この沿岸航路は長い間、歐羅

巴から印度に行く唯一の海上交通路となつてゐた。

西曆紀元前二世紀にローマによつて地中海が完全に統一されてから、その國勢が益々富强に赴くに從ひ、ローマの貴族たちの間には東洋の物貨が愛好され、その需要が高まるやうになつた。印度の寶石類・香料・木綿・織物類、又支那の絹などがそれである。是等の物貨を印度地方から地中海に運ぶ爲の交通路は陸路中央アジアを經てシリヤに達するか、波斯灣からチグリス、ユーフラテス河の流域を溯り、沙漠を越えてシリヤに出るか、何れかであつた。然かしどちらの路をとるにしても、その間にローマ帝國に敵對する中央アジアの大國、パルチヤ（安息國）の勢力が伸びてゐたし、また途中土民による掠奪の危險も少なくなかつた。紀元一世紀の始にエジプト地方から紅海を經て、印度洋に出で、この印度洋をば、夏は西南から、冬は東北から吹く季節風を巧に利用して橫斷し、北印度に直航する航路が新に發見された。その後は此の交通路が專ら利用されることゝなり、エジプトのアレキサンドリヤが其の貿易基地となつた。ローマ帝國はこの交通路の安全を期するためにアラビヤ地方の經略に從ひ、紅海の關門であるアデンを其の治下に收めたこともあつた。而して其の世紀の末になるとローマの商船は印度東岸ガンジス河口にまで達した。かうしてベンガル灣に沿つて東へ東へと進んだ結果が、二世紀の半ばに至り、終に支那の沿岸にまで達することゝなつた。

支那とローマとの交通

漢の武帝の時代、支那の版圖は遙に西方に伸びて、中央アジア、ペルシヤ地方にあつた國々と境を接し、その方面の陸路交通が盛んに行はれるやうになつた。

ローマ帝國は早くから中央アジアを經て陸路支那に通ずる商路の開拓を希望してゐたけれども、その地方に勢力を占めてゐたパルチヤの妨碍によつて遂に成功しなかつたのである。その後、後漢の桓帝の時代になつて、ローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌス（支那の記錄によれば大秦王安敦と記されてゐる。）の使者が始めて海路を經て交趾地方に到著した。延熹九年（西曆一六六年）のことである。こゝに支那とローマ帝國との間に交涉が結ばれ、この後ローマの商人が交趾地方にも來航するやうになつた。併し其の關係も永くは續かなかつた。後漢はこの後凡そ五十年程經て滅び、またローマ帝國も內亂や蕃族の侵入によつて其の國勢が傾き、終に四世紀の末には東西に分裂してしまつた。

隋代の南海交通

六世紀の末、隋によつて統一が完成するまで支那には分裂の時代が續いてゐた。その間にも南海地方や印度方面との海上交通は盛んに行はれてゐた。殊に此のころから支那に佛教の信仰が熾烈となつたので、その影響として香料の需要が高まり、是等の香料は主に南海の島々に產出した爲め、その後、商船の南海地方への往來は益々頻繁となつた。また佛教が弘まるに從つて印度との交通が盛んに行はれるやうになり、多くの佛僧が印度から支那に行き、また支那から法を求め、佛蹟を探るために印度に渡るものもあつた。五世紀の初に法顯は陸路印度に赴いたが、ガンジス河口からセイロン島に渡り、次いで海路マラッカ海峽を經て、山東半島に歸著した。また七世紀の末に義淨は廣東から船に乘り、スマトラを經、マラッカ海峽を通つてガンジス河口に赴き、佛跡を巡歷して後、再び海路をとつて歸國してゐる。是等の佛僧の殘した紀行は當時の南海諸國の事情や海上交通の模樣を傳へる貴重な資料となつてゐる。

佛僧の印度渡航

尙ほ　平城天皇の皇子に當らせられる高岳親王が日本人として最初に印度渡航を企てさせられたのも此の頃のことであつた。親王は早くから佛教に歸依し、唐に赴かれて各地を巡歷せられたが、後に印度に渡つて佛蹟を探ることに思を致され、廣東から海路出發せられたが、途中マラッカ海峽の北岸の地に於て病の爲め、八十餘歲の御高齡を以てその地に薨ぜられたのである。

爪哇佛跡ボロブヅール寺院の全景

法顯は印度から支那に渡航する途中、西爪哇に約五箇月間滯在し、その後、商船で支那に渡つたといふ。當時南印度から支那に達する航路は常に爪哇島を經たものらしい。印度と爪哇との海上交通は早くから行はれ、すでに一世紀の頃に印度東岸から移住民が此の島に渡つて印度人の統治權を確立したのを始めとして、その後大規模な移住が屢々繰返され、印度文化も植付けられた。現在この島に遺つてゐる豪壯なボロブヅール寺院の跡は七世紀のころに傳はつた印度佛教の記念物である。

これより先き隋の煬帝の時代にわが國と支那との間に、初めて正式の國交が結ばれた。小野妹子は聖徳太子の命を奉じて、推古天皇十五年（皇紀一二六七年、隋に使したのである。それは煬帝の大業三年（西曆六〇七年）に當つてゐる。この最初の遣使の目的は專ら國威を海外に宣揚することにあつた。その國書に「日出處天子、致書日沒處天子無恙」と記してあつたので、煬帝はこれを讀んで我が國から對等の國交を求めたことに不滿の色を示したといふ。隋は此の後十年ほど經て亡びたが、唐の世となつてからわが國との關係は極めて密接となつた。而して二百餘年を通じ、十數回の遣唐使が僧侶や留學生を從へて其の都、長安を訪れたのである。

唐船の圖

爪哇佛蹟ボロブヅール寺院浮彫壁面の一部にして當時南海に活躍したる唐船の構造を見ることが出來る。

隋の煬帝時代に大規模な土木工事によつて運河が開かれ、江南と河北の地が水路で結びつけられてから揚子江の河口に近い揚州は、唐末まで東西南北の貨物運送の中心地として繁榮した。揚州はたゞに貨物の集散地として發達したゞけではなく、隋唐の時代を通じて江南地方は一帶に强力な水軍の根據地となつてゐた。唐の大宗が高句麗を討つた時には此の地方に數百隻の大船の建造を命じこれを山東地方に廻送させ、朝鮮に送つたといふ。

唐代には支那の海運は非常に發達した。即ち七世紀の末、アラビヤ商人が漸く東洋の海上に活動し始める頃まで、大型の支那船は盛んに南海地方を往來し、印度洋から波斯灣、紅海地方までも進出してゐる。造船術も進歩し、また航海術も極めて優秀であつた。其の船の構造を見ると、四、五本から十二本に及ぶ帆柱と、自由に風の

方向に順應するやうに布帆や蒂帆を備へた大型の帆船で、四層の甲板を有つものさへあり、五百人から一千人の乘組員を收容し、また海賊を防ぐために立派に武裝を整へてゐた。例へば或るものは火箭を發射する弩を備へてゐたし、又或るものは敵船を燒く目的で石腦油を積んでゐたといふことである。また船の進路を知るために太陽や星を觀測することは古くから行はれてゐたところであるが、その外既にこの頃から羅針儀が用ひられ、當時指南針と呼ばれてゐた。支那では指南針の用法は上古から知られてゐたけれども、これを始めて航海に利用したのは四世紀ころであつたといふ。この羅針儀は後にアラビヤ人によつて歐羅巴に傳へられ、十三世紀になつて始めて航海に利用されるに至つたのである。

羅針儀の使用

アラビヤ人の進出

アラビヤ人が盛んに印度・支那方面の海上貿易に從事するやうになつたのは唐の中世以後のことである。アラビヤ人はもと遊牧民族でアラビヤ地方に分立割據してゐたが、七世紀の半ばごろ敎祖マホメットによつて回敎徒として統合されてから大きな勢力となり、東西兩洋に雄飛するに至つたものである。八世紀の初には地中海方面にあつてはその勢力はアフリカの北岸一帶を占め、更にスペインから、南フランス地方にまで及んだ。イタリア本土が彼等のために攻擊を受けたことさへあつて、此の時代の地中海は全くこの兩民族の間を隔てる深い溝となつてゐた觀がある。

一方東にのびたアラビヤ人の勢力はシリヤから波斯を經て印度に及んだ。西は大西洋から東は印度にまで連する此の大帝國が東西に分裂したのは八世紀半ばのことで、丁度唐の中世に當たる。其の東の首都バグダッドは其の後回敎文化の中心地として發達するに至つた。この頃からアラビヤ商人は盛んに東洋方面の海上貿易に活躍するやうにな

つた。元來彼等が波斯灣で用ひた商船は小型のもので、普通造船に釘を用ひず、たゞ椰子樹の皮で造つた繩で舟板を縫ひつけ、その縫目に油脂やタールを塗りつけたもので到底大洋の航海に堪へるものではなかつた。彼等は當初普通に印度地方に來航する大型の支那商船に便乘して支那方面に渡航し貿易を營んだのである。その後彼等の東洋進出は極めて活潑となり、唐宋元明の時代を通じて、十五世紀に歐羅巴人の勢力が始めて印度に及ぶまで、東洋一帶の海運は殆んど彼等の手に歸したのであつた。印度の西海岸の海港はすべて其の植民地となり、セイロン島にも移住した。馬來半島、占城、爪哇、スマトラ、海南島、これ等印度と支那とを結ぶ海路の要衝には總てアラビヤ人の商業根據地が設けられた。

杭州と泉州

彼等が盛んに來航して貿易を營んだ支那沿岸の交趾地方・廣東・福建の泉州・江南の揚州などには其の居留地が設けられた。これ等の海港は外國貿易港として其のころ最も隆盛を極め、唐代から外國貿易事務を取扱ふ市舶司と呼ぶ役所が設けられてゐたが、外國貿易による政府の收入は極めて大きかつた。そのことは唐が滅び宋が國を建てたころ、大いに外國貿易を奬勵し、香料・藥種・犀角・象牙・眞珠・龍腦など重要な南方の輸入品を悉く政府が獨占して、その收入を財源に充てたといふ一例によつても察せられる。

北宋は滿洲民族である金の壓迫をうけて都を浙江省の杭州に移した。其の後の時代が南宋と呼ばれてゐる。やがて蒙古に興つた元が南下して、その金を滅ぼし、次で南宋を滅ぼすまで、凡そ百四十年の間、杭州は支那第一の大都會となつた。南宋は國庫の收入を增すため盛んに外國貿易を奬勵した。杭州に近い福建の泉州が外國貿易港として特に繁昌するやうになつたのは此の頃からである。その後、元の時代を經て、明の初まで此の港は南海諸國との交通の關

門となり、古來南海貿易の要津として長い間繁榮して來た廣東を凌いで支那第一の貿易港となつた。されば元の時代泉州を訪れた伊太利人マルコ・ポーロの如きも、此の港を世界最大の貿易港であるといつてゐる。

元軍と水上戰

蒙古民族である元は騎馬戰を最も得意とした。大陸を遠く席卷して、西は歐羅巴諸國までも震駭させたほどであつたが、海洋に對しては全く其の知識を有せず。船を利用する水上戰は不得手であつた。江南にあやて水戰に長じた南宋の兵と戰を交へるに當つても、渡河する場合に幼稚な革製の舟を用ひたといふことである。南宋が外國貿易を奬勵したのは國庫の收入をはかる目的であつたが、同時に南海諸國の後援をたのんで元と對抗する爲めでもあつた。併しそれは遂に功を奏しなかつた。元の世祖が南宋を潰滅させた十三世紀の末には、既に南支那の地方は元に懷柔され、その勢力下に歸してゐた。世祖は其の方面の海上權力を掌中に收めてから南宋に迫つたのである。

元の日本遠征

元はわが國に對しても前後二回に亙つて遠征を行つた。その際に用ひた水軍は高麗で整へられたもので、再度の來襲には南宋の水軍が江南軍として參加した。この遠征は其の水軍が不統一の結果、全く失敗に終つた。

元の世祖の時代、その勢力は印度支那方面に伸び、更に爪哇に向つて遠征が行はれたこともあり、爪哇、スマトラを始めとして南海地方の國々が歸服するやうになつた。世祖は武力によつて是等の地方を威壓したばかりでなく、海外經營と海外貿易とに意を注ぎ、國庫の資金で盛んに船を建造し、物資を積んで遠く海外に通商させたので、海上交通は此の時代に最も頻繁となり、また造船技術も發達して優秀な大船が造られるやうになつた。

西紀十四世紀の中頃、元が滅びて、明が江南地方に國を建てた。元・明の時代、朝鮮半島から支那沿岸にかけて日本人の進出は目覺ましいものがあつた。後にも述べるやうに、それは一種の私貿易であつたが、彼等は之れを倭寇と

倭寇

呼び、その活躍を最も怖れてゐた。高麗朝は倭寇の進出に堪へ兼ねて滅亡し、明もまた其の劫掠に苦しみ、邊海の防備を嚴重にしたが、惠帝の時に至つて我が足利幕府に交渉して一旦これを鎭壓させることに成功した。然かしそれも長くはつゞかず、やがて支那の海賊や亂民が加はるに及んで益々猖獗をきわめるに至つた。明は倭寇に備へるために次第に强力な水軍を整へるやうになり、遂に十六世紀の半ばには之を擊破して、倭寇はその跡を絶つことゝなつた。

鄭和の遠征

これより先、明は南海地方に對して盛んに其の勢力を伸ばし、多くの國々を服屬させた。その南方經略の最も華々しい事業は鄭和の遠征である。鄭和は成祖の時代、その命を奉じ、成祖に敗れて出奔した惠帝の行衞を搜索する目的で永樂三年（西曆一四〇五年）揚子江口から六十二隻の艦隊を率ゐてスマトラ方面を廻つたのを始めとして、前後七回に亙つて南方の遠征航海を行つたのである。宣宗の宣德五年（西曆一四三〇年）には遙かに印度洋を超えて、アラビヤ方面にまで進んだ。それは、ポルトガル人が初めて印度に達するよりも凡そ半世紀ほど前のことであつた。この遠征は結局、明の水軍の南海諸國への示威となり、また同時に南海貿易の振興にも寄與するところが大きかつた。

琉球船の活躍

然かし明は倭寇や海賊の猖獗に惱まされて、海防を嚴重にした結果、やがて海外諸國との交通や貿易に對して極めて消極的な態度を以て臨むことゝなり、遂に海外への通航に嚴しい制限を加へるに至つた。その後ち商人達は海外へ進出し、南海各地に渡航して私貿易を營むに至り、其等の地方には支那人の居留地が出來るやうになつた。今日の華僑の起源はこゝに求められる。

尙ほ此の時代西太平洋上には琉球の商船が活躍してゐた。琉球は明の初めに始めて入貢し、これから支那との間に海上往來が行はれるやうになつた。琉球の商船は、また此の頃から南海貿易に進出し始めた。暹羅、スマトラ、爪哇

方面と通商し、その地の物資を齎らしてわが國にも渡來し、朝鮮や支那にも通じ、仲介貿易の利益を收めてゐたのである。この琉球船の活躍は十六世紀に歐羅巴人が此の方面に現れるに及んで全く衰へてしまつた。

第二節　歐舶來航以前の日本

海洋日本の傳說

記紀によれば日本民族は上古から海洋の民として、海洋に發展し、海洋を支配すべく定められた民族であつた。畏くも　皇祖天照大神の御弟素戔嗚尊は伊邪那岐命から、海原を統治せよとの詔を受け、專ら海洋の支配に盡し給うたと傳へられる。そのころ海途は遙かに陸と海とを連ね、彥火火出見尊は此の海途によつて海神之宮に赴かれ、潮滿瓊と潮涸瓊とを得て歸られ、この二箇の瓊の力によつて能く海潮の干滿を支配し給ふことが出來たといふことである。我が肇國の神々が常に海洋に親しまれ給ひ、また能く海洋を征服し給うた數多くの傳說は、我々の遠い祖先が既に海洋民族として海上に發展してゐた事實を物語つてゐる。

上古の舟

記紀の傳へるところによれば、上古の民が海上交通のために用ひた船には獨木船卽ち刳船の類と、葦船・無目籠などと呼ばれる葦や竹を編んで作つた筏の類と、二樣のものがあつたやうである。獨木船は特に浮寶と呼ばれて重んぜられてゐた。日本書紀によれば、素戔嗚尊が杉・檜・柀・櫲樟などをつくり出された時に、「杉及び櫲樟、この兩つの樹は以て浮寶となすべし」と仰せられたと傳へてゐる。この話は是等の木が船材として一般に用ひられてゐたことを證據立てるものである。

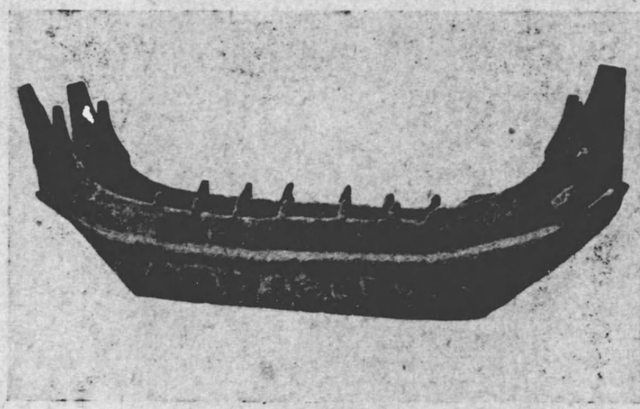
上古の民が用ひてゐた獨木船の遺物が、時として大地の中から掘り出されることがある。それを見ると、或るものは大きな丸太を刳りぬいて前後を尖らせて舳艫としてゐる。また丸太を二つに割つて前後を切り、上部を刳りぬいてゐるものもある。何れも極めて簡單な原始的なものである。

埴輪の船

此の獨木船は其の後次第に進化し、軈て立派な寄木の木造船として殆んど完全な形式を整へるやうになつた。この種の船の模型が日向國西都原の古墳から埴輪として出土したことがある。一見ゴンドラに似た舳艫の高い船で其の兩舷には櫂の杭があり、また中央には帆柱を受ける穴が設けられ、風向を利用して帆走する方法が用ひられてゐたことを示してゐる。（上圖參照）

我々はまた其の當時の人々が描いた繪畫の中に、このゴンドラに似た船が海上を航行する樣を見ることが出來る。例へば大阪府中河內郡堅下村高井田に在る古墳の橫穴の壁に描かれた原始繪畫（次圖參照）の中に、これに似た舳艫の高い船が描かれてゐる。その船の中には武裝した一人の男が立上り、前後にはその從者であらう、一人は石錨の綱を持ち、他の一人は櫂を手にしてゐる。之れは海を往く武人の勇姿を示した貴重な資料といふべきであらう。

埴輪船



宮崎縣西都原古墳の出土品、舳艫共に舷側板を垂直に立て兩舷に六對の櫂杭がある

神武天皇の御東征

日本民族は斯樣に上古から海洋と鬪ひ、海洋を征服し、海洋を支配して來たのである。我々は　神武天皇の御東征の偉業が海上制覇によつて全うせられた事の意義深きを銘記しなければならない。

天皇が親しく率ゐさせ給うた舟師は、恐らく日本民族が當時達してゐた最高の造船技術の粹を傾けて建造した優秀な軍船を集め、堂々たる陣容を整へた船隊であつたに相違ない。加ふるに充分に練磨された航海技術を以て瀨戸內海を制壓しながら、皇軍の舟師は東へ東へと進んだが、やがて吉備國の沿岸に至りこゝに碇泊すること三年に及び、專ら船舶を整備充實し、また糧食を準備した。此のことは天皇が大和地方を平定し、肇國の大業を成就せられるために、先づ海上權力を完全に掌握しようとせられた極めて周到な御作戰によるものであつたと拜せられる。この周到な御作戰があつてこそ始めて皇軍は幾多の困難を克服し、終に賊軍を潰滅することが出來たのである。

古代の船の圖

大阪府中河內郡堅下村大字高井田の古墳內壁に描かれた原始繪畫の一部
櫂を操り錨を用ひたと認めらるゝ船

こゝに肇國の大理想は宣布せられ、海洋の民、日本民族の二千六百年の歷史が繰りひろげられることゝなつた。

崇神天皇船舶建造を命ぜらる

既に海洋を支配し、海上權力を掌握することによつて、日本の肇國が出來たといふ事實は實に我國の歷史が我々に示す大きな敎訓といはなければならない。歷代の天皇は克く此の點に留意あらせられ、常に海事御奬勵のために盡し給うたのである。　崇神天皇が初めて諸國に令して船舶の建造を行はしめ給ふた事も、恐らく此の思召から出たものと拜察される。これより先、四道將軍派遣のことがあり、邊境の蒼民も漸く皇化に潤ふに至つたが、猶ほ東日本は西日本に較べると沿岸の海上交通に惠まれてゐなかつた。然かし東國方面の經營が進むに從つて先づ太平洋岸の航路が確保されるやうになつた。　景行天皇の御代、日本武尊は東國方面の蝦夷を御征伐になつたが、その御行程に當つて相模から海路上總を經て常陸地方に進まれた。而して其の御乘船の船首に大鏡を懸けて蝦夷の本據に迫つたので、蝦夷の酋長は其の堂々とした威勢に惧れて戰はずして歸順したといふ。

船名の濫觴

太平洋岸に面する遠江國や伊豆國は、氣候が溫暖で良材に富んでゐた爲めであらう、上代には特に造船術の發達してゐた地方として知られて居り、當時皇室の御用船は是等の地方に於て建造されることが多かつた。　應神天皇の御代に伊豆國から獻上した船は長さ十丈に及んで、極めて輕く海上を走つた爲め枯野（からの）と命名された。我が國で船に命名することはこの時初めて行はれたのである。この船は朝夕大御水に獻ずる寒泉を酌むために難波（大阪）から淡路島に往復してゐた。後に腐朽して用に堪へなくなつたので之れを破壞し、その船材を薪に用ひて五百籠の鹽を燒き、その鹽を遍く諸國に賜り、其の代りに諸國から船を貢獻させたので、たちまち五百隻の船が武庫の水門（兵庫港）に滿ちたといふ。當時いかに造船技術が進步してゐたかゞ之によつて察せられる。

又この頃、朝鮮半島に勢力を占めてゐた新羅を通じて大陸の造船技術も採入れられた。新羅から優秀な船匠を獻じ

たので、之を播津の猪名郡に置き其の子孫を代々造船のことに當らせた。これを猪名部と呼び、猪名部の建造した新羅式の船を當時猪名船といつたのである。この新らしい大陸の造船技術が我が國固有の船の樣式の上に直接、間接に與へた影響は少なくなかつたであらう。

朝鮮半島との關係

わが國と朝鮮半島とは、既に上古から極めて密接な關係に結びつけられてゐた。殊に出雲地方は早くから半島との間に交渉が多かつたやうである。出雲風土記には、八束水臣津野命が新羅の餘りの地に綱をかけてこれを出雲に引きよせ給うたいはゆる國引傳說を傳へてゐる。この兩地方の相互密接な關係は、濟州島方面から出雲・石見地方に流れる潮流によつて生じたものであつたと考へられる。その潮流の中間に位してゐる孤島、沖島は古くから海北中道と呼ばれ、半島との海上の往來に重要な據點であつた。

上代の朝鮮半島

漢の武帝が北朝鮮を收めて其の郡縣を置いた頃、半島南部には今日の全羅道方面に馬韓、慶尙南道方面に弁韓、慶尙北道方面に辰韓の國々があり、いづれも多くの小國から成つてゐた。九州地方の豪族の中には半島を經て漢と交渉を持つたものも少くなかつた。中には漢の朝廷と通交し服屬のしるしとして漢委奴國王と記した黃金の印を受けたものさへあつた。前漢の末に鴨綠江の上流地方から高句麗が南下して北朝鮮の地を占め、また西海岸地方の馬韓の地が百濟によつて統一され、東海岸地方の辰韓の地に新羅が國を建てるに及んで、弁韓の中にあつた大伽羅國は新羅の壓迫に苦しんで我が國に救援を求める爲め、垂仁天皇の御代に使者を派遣した。その使者は穴門（長門）を經て海路越前敦賀に來航した。その頃敦賀は北陸道方面の皇化發展の根據地に當り、九州や朝鮮方面と大和地方とを結ぶ日本海沿岸航路の要津に當つてゐた。使者は天皇に謁し、この時任那の國號を拜受した。それは御父　崇神天皇の御諱御間城によつたものである。

任那日本府

この任那を新羅の壓迫から救ふために我が國はその後ち半島に兵を用ひる事となつた。　神功皇后の新羅討伐は我が國として最初の外征である。その船隊は肥前松浦を出發して、對馬和珥津を過ぎて半島の東海岸に直行し、新羅の國都、金城（現今の慶州）に迫つた。新羅王は海上を壓する我が船隊の威容に全く戰意を失ひ、白旗を揭げて降つたといふ。次いで高句麗と百濟の國王も降服したので皇威は大いに半島に擴張されるやうになつた。此の時に置かれた任那日本府の所在地は慶尙南道金海附近と推定されてゐる。この任那日本府によつて我が國の南朝鮮における支配權が確立された。此のことは全く半島の諸國が意を海上に注がず、また沿岸の防備を等閑にし、互にたゞ陸上戰を事としてゐた時に當つて、わが國が專ら海軍の整備に力を注いで、本國と半島との間に橫はる海峽は勿論、進んで半島の沿海をも總て我が兵船の制壓下に置いた結果に外ならない。

瀨戶內海航路

その後ち任那地方との往來が頻繁となるに及んで、日本海沿岸航路に代つて瀨戶內海航路が專ら行はれるやうになつた。仁德天皇の御代には難波津（大阪）と筑前の儺津（博多）とが大陸進出の要津として榮えるに至つた。

斯くて半島との交通はいよ〳〵開け、新羅・百濟・高麗の朝貢船も此の地に來航し、又歸化する人も多かつた。是等の歸化人によつて大陸の產業技術や文化が移入され、國運はます〳〵隆昌に向つたのである。

然かし我が國の半島に於ける支配的地位は程なく失はれることゝなつた。それは朝廷に豪族が跋扈して徒らに政權の爭奪を事とし、社會の風潮が文弱に流れるに至つた爲め、半島に對して積極的な政策を採ることが出來なくなつた

結果である。新羅の勢力は益々增大する、而かも任那日本府の綱紀は弛緩してゐる。雄略天皇の御代に、任那國司吉備田狹が新羅に內通してゐた爲め、我が國から派遣された新羅征討の大軍は、統制が亂れ、止むなく退却したこともあつた。斯くして　欽明天皇の御代に任那日本府は遂に新羅の爲めに滅ぼされ、南朝鮮は玆に我が勢力の外に立つことゝなつた。

任那回復の擧

其の後ち任那を復興して、我が國の地位を取戻さうとする計畫はしば〳〵行はれ、就中　推古天皇の御代に境部の臣を大將軍として派遣された新羅征討の軍は、海路を進んで同地の海岸を襲ひ、五城を拔き、六城を奪還して國王を降服させたといふ。然かし一旦新羅の爲めに奪ひ取られた南朝鮮の根據地は、其の後、幾度かの遠征にも拘らず、これを回復することは出來なかつた。

新羅はこの頃隋と通じ、また其の滅亡の後は唐と結んで、その勢力は殆んど半島を風靡し、百濟も高句麗も其のために威壓されてゐた。

我が國はこの間に隋と國交を結んだ。小野妹子が聖德太子の命を奉じて始めて隋に使したのは、推古天皇の十五年（煬帝の大業三年）のことであつたが、その後凡そ十年も過ぎない間に隋は滅びた。これは煬帝が高句麗遠征に失敗したことが原因になつてゐる。隋に代うた唐も半島に野心を持ち、屢々遠征軍を起した。

わが水軍と唐の水軍との交戰

百濟が唐の爲に滅ぼされたのは　齊明天皇の御代であつた。百濟の王弟、豐はその時わが國に人質となつてゐたが、朝廷では百濟の遺臣鬼室福信の請を容れ、その國の復興のために大軍を半島に遣つた。此の時高句麗も我が國へ救援を求めてゐたので、我が遠征軍は兩國の軍を援けて新羅と唐の聯合軍に當ることゝなつた。有力な唐の水軍は熊津江（錦江）の下流白村江（白江口）に我が船隊をむかへた。斯くてわが船隊は忽ち敵の包圍するところとなり、敗戰の悲運に陷つた。

半島立脚地の喪失

此の敗戰はつひに大勢を決した。それは啻に百濟復興の擧が失敗に終つただけではなかつた、上古以來わが民族が半島に築きあげて來た地步がこゝに全く覆されたのである。その後、我が國の海上に於ける覇權は全く失墜し、之に伴つて對外政策も一變した。對外政策の變化は一層社會の文弱傾向を募らせ、延いて國防方針にも著しい影響を及ぼし、爾來徒らに沿岸防備を事とする退嬰主義に墮するに至つた。卽ち新羅が大同江以南の地を統一し强力な國家を建設するに及んで、その來寇に備へる爲め、壹岐・對馬の金田・讃岐の屋島・大和の高安山などには城塞が構築され、また對馬・壹岐・筑紫に防人、烽火の制度が設けられた。殊に國防の第一線に當る筑紫には太宰府が置かれ、その防備のために水城・大野城が築かれ、また水城が設けられた。上古以來の進取的な國防方針が是に於て一轉したのである。

遣唐船の貢獻

其の後ち唐との國交が回復し、遣唐使が送られるやうになつた。其の用船は支那式の造船技術を採入れた大型のもので乘組員は二百人を超えることすらあり、但し一回の渡航船數は四隻と定められた。使節に從つて大陸に渡つた僧侶や留學生によつて、その地の優れた學術文化が我が國に齎らされたのであるから、遣唐船が奈良朝文化に寄與したところは極めて大きかつたといふべきである。

難波の三津浦（大阪市南區に三津寺町あり）を出帆した四隻の船は筑前の大津浦（博多）に到著すると、こゝで大陸に渡る順風を待つた。その頃唐に渡る爲めには北路と南路との二つの航路があつた。北路とは、先づ壹岐・對馬を經て朝鮮半島の

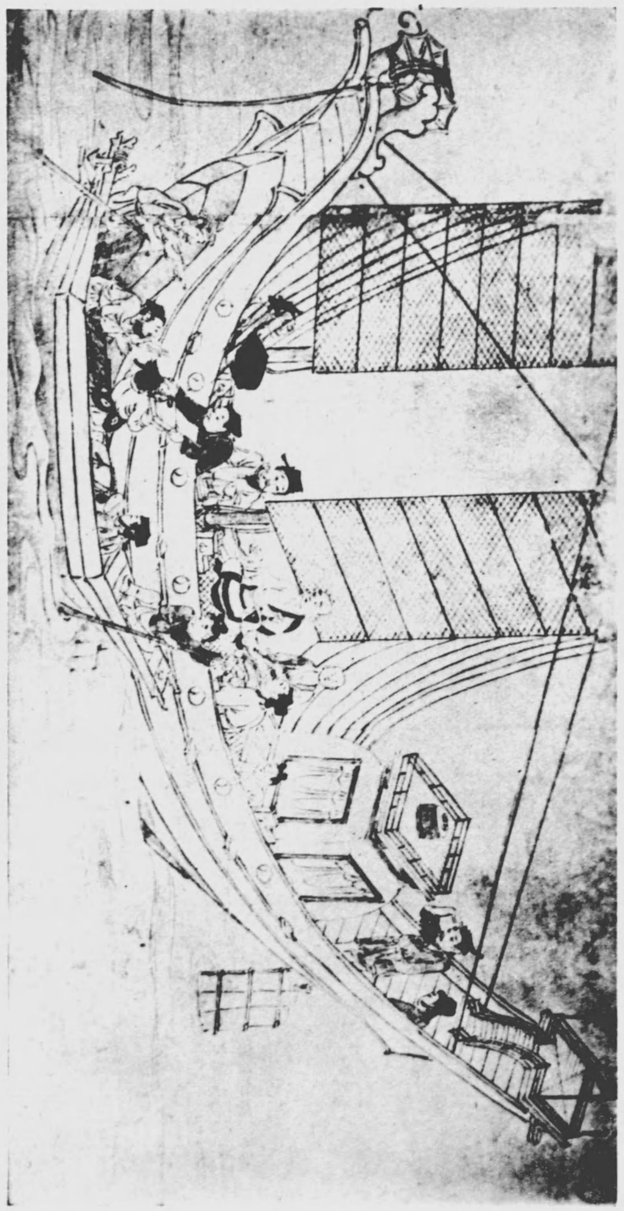
西海岸に沿つて北上し、渤海灣口を横斷して山東半島の萊州または登州に達するものである。此の航路は隋との交通にも用ひられてゐた。また南路とは壹岐海峽を過ぎて、肥前値賀島に出てから順風に乘つて支那海を横斷し、揚子江口の楊州・蘇州方面に至るものである。而して無事これ等の港に到著して後ちは、或は陸路により、または水路を利用して國都長安に入つたのである。北路は南路に較べて遙かに安全であつたにも拘らず、新羅が半島を統一してからは之を利用することが出來なくなり、止むを得ず危險の多い南路を採つた爲め屢々遭難するものがあり、南方の島々に漂著するものも少くなかつた。寶龜七年に歸國の途についた船隊などは、四隻の中一隻は海上で分解し、舳は肥前の天草に、艫は薩摩の甑島に漂著し、一隻は薩摩の海岸に、また一隻は肥前松浦の海岸に到著した。而して殘る一隻は耽羅島（濟州島）に漂著して、乘組員は島民に捕へられ、後に辛うじて薩摩に逃げ歸つたといふ。阿部仲麿が歸國の途中に安南地方に漂流したこともまた南路の危險を物語るものである。南路をとつた遣唐船が屢々南方の島々に漂著するので、是等の島々を我が勢力範圍として確保して置く必要が生じて來た。

南島の經營

この頃種子島・屋久島・奄美大島・徳之島などの經營が盛んに行はれ、島民の朝貢が促されたのは斯かる意味であつた。是等の島々には牌が建てられ、島の名を始め、碇泊すべき場所、飲料水の所在などが記された。漂著した船はこの牌の記載に從つて正しく其の位置を知り、恙なく歸國の途に就くことが出來たのである。

神佛の加護

航海の危險は風波の難ばかりではなく、長期航行に堪へる支那式の大型船舶の建造技術が未だ不完全であつたことも考へられる。而して航海の安全を期する爲にはひたすら神佛の加護に縋るより外はなかつた。其のため遣唐船の出發に當つては諸國の神社佛寺を擧げて航路平安の祈禱が嚴かに行はれるのが常であつた。天平五年多治比眞人廣成が



（藏所寺山高尾楊都京）　圖の船唐渡

船唐渡るたれか描に（卷六全）起緣嚴華物卷繪寶圖

遣唐使として出發した際、山上憶良は次のやうな長歌を贈つて餞としてゐる。

神代より、言ひつてけらく、空見つ、日本の國は、皇神の嚴しき國、言靈の幸ふ國と語りつぎ、言ひつがひけり、今の世の人も悉、目の前に、見たり知りたり、人さはに、滿ちてはあれども高光る、日の朝廷、神ながら、めでの盛に、天の下、まをし給ひし、家の子と選び給ひて、大命戴き持ちて、唐の、遠き境に遣はされ、罷り座せ、海原の邊にも沖にも神づまり、うしはき座す、諸の大御神たち、船の舳に、導ち申し、天地の大御神たち、大和の大國御魂、久方の、天の御空ゆ、天翔り、見渡し給ひ、事終り、歸らむ日には、又更に大御神たち、船の舳に、御手打ち掛けて、墨繩をはへたる如く、あてかをし、血鹿の岬より大伴の、御津の濱邊に直泊てに、御船は泊てむ、恙なく、幸く座して早や歸りませ

反歌

大伴の御津の松原掻き掃きて我立ち待たむ早や歸りませ

難波津に御船泊てぬと聞え來ば紐解きさけて立走りせむ

遣唐船の廢止

宇多天皇の御代に菅原道眞の奏上によつて遣唐使の派遣は停止されることになつた。その理由は唐が衰微して、その派遣の意味が失はれたといふのであるが、一つには海上に新羅の海賊が跳梁して遣唐船の航海が危險に曝されてゐた爲であつた。此の頃すでに我が國は西方海上に於ける制海權を全く喪つてゐた。新羅の海賊は盛んに近海に出沒してゐた。弘仁二年には二十餘隻の賊船が對馬海峽に現はれ、貞觀十一年には博多灣に二隻の賊船が闖入して豐前國の貢物を積んだ官船を掠奪した。遣唐使停止の議が決定されたのは寛平六年であつたが、その前年には海賊が肥前松浦

と肥後鮑田に上陸して放火掠奪を行つた。然かも當時の我が國としては是等の海賊の跋扈に對抗してたゞ沿岸防備を嚴重にする外、施す術を知らなかつた。

渤海との交通

唐の盛時に滿洲の東北部に渤海國があつた。その版圖は南は大同江の北方に於て新羅と境を接し、北は黑龍江、東は日本海に臨んでゐた。その渤海國が初めて我國に朝貢し貿易を求めて來たのは　聖武天皇の御代であつたが、兩國の親交はその後ち　醍醐天皇の御代その國が滅亡する迄つゞけられた。それは初め、新羅を牽制しようとする政策に出た修好であつたが、後には全く其の意味は失はれ、貿易を主とするものとなつた。而して其の地方に産出する毛皮類などが輸入されて平安朝の貴族たちに愛好された。渤海國の都は現在の滿洲國牡丹江省寧安縣東京城にあつた。その使節の船は日本海に臨んだ暉春から出發し、潮流を利用して日本海を橫斷し、我が國の海岸に達し、そこから我が國の都に向ふのが常であつた。その到著せる地方は一定せず、又越後や出羽の海岸に漂著することも少くなかつた。

日本海沿岸支配と蝦夷征伐

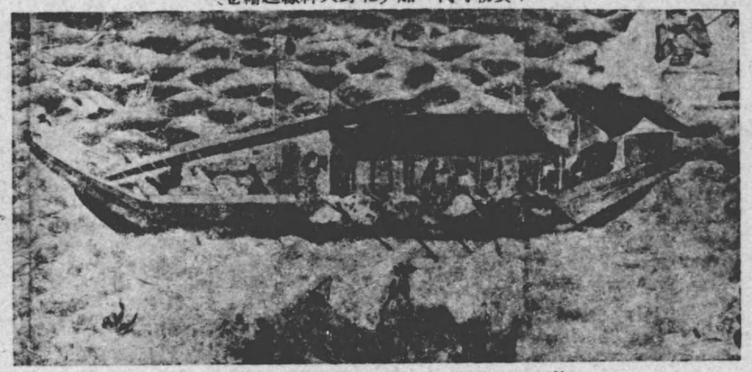
日本海方面では沿岸の海上交通路は既に此の時代に完全に確保されてゐた。上古以來東日本に勢力を占めてゐた强暴な異民族、蝦夷を征討し、またこれを懷柔して皇化に浴させるために、日本民族は極めて長い年代を通じて不斷の努力を續けて來たが、蝦夷は狩獵を業とする民族で海洋の民ではなかつたのである。而して平安朝時代までに東北地方が全く平靜となるに至つたのも、一つには日本海沿岸一帶の海上交通路が我が制壓の下に歸してゐた爲であつた。

齊明天皇の御代に阿倍比羅夫は百八十隻の兵船を率ゐて出羽地方の蝦夷を討ち、また北海道方面に渡つて肅愼人と戰を交へたといふ。越前・越中・越後など沿海の國々は屢々命をうけて出羽方面に兵船を派し、また軍需品を輸送したのである。

北宋との交通

貢物の運送と海上交通の發達

平安朝時代の船（北野天神緣起繪卷）



筑紫に配流された菅原道眞の船出を描いたもので當時瀨戶內海で用ひられた船の樣式を示す

奈良朝時代から平安朝時代にかけて諸國から朝廷に貢物を運送するために海上交通は大いに發達した。國毎に一つの港灣を定め、こゝに國司の管理する官船が備へつけられ、この官船によつて貢物は運送されたのである。その航海が甚だ困難であつたことは土佐日記の筆者紀貫之が、土佐の國府から難波津（大阪）に到る海路に三十九日を費した例によつても察せられる。それは風波の危險と海賊の跳梁とに由るもので、貫之は其の航海中海賊の來襲を惧れる餘り、其の旅行が終へるまでに頭髮が白くなつてしまつたと記してゐる。瀨戶內海は平安朝時代、中央と九州の太宰府とを結ぶ重要な交通路となつてゐたにも拘らず海賊の橫行に委ねられてゐた。伊豫國日振島を根據として千餘隻の船を操つて官船に對する劫掠を事とし、遂に叛亂を企てた藤原純友はその著しい適例であつて、これは畢竟中央政府の紀綱が緩んで地方制度の亂れた結果といふべきである。

其のころ大陸では滿洲に起つた契丹、すなはち遼が大いに南下の勢を示し、唐滅亡の後をうけ宋は開封に都して之れと對峙してゐた。宋の商船は博多や越前敦賀に來て貿易を行つてゐたけれども、わが國

から海外へ渡航することは禁ぜられてゐた。後冷泉天皇の御代には筑前の人が窃かに宋に赴いて貿易を營んだ事が發覺して所罰されたこともあつた。日宋の國交は宋の商船に便乘して渡宋する佛僧を通じて結ばれてゐたのである。

刀伊の入寇

九州沿岸は其の後も屢々外敵の劫掠に曝され、後一條天皇の寛仁二年には凡そ五十隻から成る刀伊の賊船が對馬・壹岐を襲ひ、進んで博多灣に入り、能古島（殘島）を占據し、更に沿岸に上陸して、家屋に火をかけ、劫掠を擅にし、多くの良民を殺傷し、或は之れを捕へて連れ歸るなどの暴擧を行ひ、また肥前松浦郡の海岸も其の劫掠をうけた。刀伊は朝鮮半島の東北部に擡頭した女眞族で、當時新羅に代つて半島を支配してゐた高麗を壓迫し、また海賊として其の沿岸を横行してゐたのである。太宰府はすぐに軍隊を派遣して沿岸の警固を嚴重にし、辛うじて之れを逐ひ退けることが出來たが、その間、博多灣附近は殆んど一週間全く此の外敵の蹂躙に委ねられた。之れは實に退嬰的な國防方針が招いた災禍であつたといふべきであらう。

南宋との交通

女眞族の勢力は其の後愈々强大となり、統一國家を建て、金と呼んだ。金は遼を滅ぼし進んで宋に迫つたので、宋は都を浙江省の杭州に遷したのである。それは丁度平安朝時代の末に當つてゐる。此の頃から武士が漸く頭を擡げて、やがて政治上の實權を收めるやうになると、社會各方面の沈滯した氣運が一掃された。對外關係にも克くそれが現はれて、南宋との間には爾來商船の往來が頻繁に行はれるやうになつた。

當時平清盛は保元の亂に功勞があり、太宰府の役人となつたが、この時その管轄下にある博多でいろ〳〵海外の事情を知り、日宋貿易の利益が多いことに著眼し、その後は貿易の振興に力を注いだ。而して兵庫の港を修築し、また航行の便利に供する爲め音戸の瀨戸（安藝）を開鑿したといふ。此の頃から宋の人々の來朝するものも多く、後白河法皇が攝津福原の清盛の別莊に行幸になつて宋の人を御引見になつたこともあり、宋に渡航する商船も年々多くなつた。後に鎌倉幕府では其の隻數を制限し、それ以外の他の商船が渡航を一切禁止する旨の命令を出してゐる。而して宋は此の頃上流の貴族達の憧れの地となつてゐた。鎌倉の將軍源實朝が或るとき宋に渡航を企て、宋の人陳和卿に命じて鎌倉由比濱で大型の唐船を建造させたことがある。地形がよくなかつたので其の船は結局進水することが出來ず、砂濱で朽ちてしまつたといふ。

元の日本遠征

日宋貿易が特に盛んに行はれたことは、大陸側から見れば、北支の金と對抗し、また蒙古に興つた元の南下に備へる爲め、南宋が貿易の利をはかつて、盛んに奬勵した結果であるといふことが出來る。

其の後、南宋と同盟して金を滅した元が更に南宋を併呑してしまつた時、元の勢力は既に朝鮮半島を蔽ひ、世祖の日本遠征計畫は著々進行してゐた。此の遠征の動機は日本の豐かな富を收めようとする意圖に出たもので、殊に此の島に夥しい黄金を産出するといふ說は大きな魅力であつた。この風說は入宋の佛僧や商人たちが大陸に傳へたもので あつた。其のころ輸出品として黄金や砂金をはじめ、金銀蒔繪を施した漆器類が多く大陸に賞らされたことも、これを實際に證明する結果となつた。官吏として元の朝廷に仕へてゐた伊太利人マルコ・ポーロは歸國後、その東方見聞錄の中で、この日本を黄金國であるとする說を其のまゝ歐羅巴に傳へた。歐羅巴人は此の書物によつて始めて日本の存在を知り、やがてそれは彼等の東洋への發展を導く原因となつたのである。

元の世祖は高麗を通じて文永年間に前後五回に亙つて鎌倉幕府に使節を派遣し、國書を以て通聘を促がした。その最後の使節が空しく歸國した時には、すでに六千の蒙古兵は慶尚南道の金海（金州）附近に屯田兵として駐屯し、日

本邦征の命令を待つてゐたのである。全羅道方面の海岸では夜を日についで兵船が建造された。二萬六千の大軍が九百隻の兵船に分乘して、合浦（鎭海灣馬山浦）を出發したのは文永十一年秋のことであつた。

文永の役

これより先、鎌倉幕府は、九州沿岸が屢々外敵の侵掠を受けたので、沿岸防備を嚴重にすることを命じ、城塞を補修し、また警戒を嚴重にすることに力を注いだ。海上に出て賊船を邀へ擊つことは不利であるとして却つて之れを誡めたこともあつた。此のことは實に海を越えて我が國土に迫る外敵に沿海の海上權力を委ねたものに外ならず、この方針に從つて、陸上戰に慣れた元の大軍を悉に上陸せしめた結果が、我が將士を苦戰に陷れることゝなつたのである。

賊船は對馬・壹岐を經て肥前松浦郡を侵し、一擧に太宰府を衝かうとして博多灣に迫つた。而して蒙古人・漢人を主とする主力は博多附近に上陸し、得意の騎馬戰でこれを邀へた我が軍の將士を惱ました。然し菊地武房・竹崎季長等の力闘は善くこれを支へ、また夜半に博多灣を襲つた颶風によつて敵の兵船が大半覆沒した爲め、つひに勝利は我が軍に歸したのである。

遠征の外征計畫

斯くして文永の役は我が軍の勝利に歸したとはいへ、我が將士が拂つた犧牲は決して少なくなかつた。鎌倉幕府はこの役の苦戰から學んだことは、兵船を整へ進んで沿海の制海權を收めることが外寇に備へる最良の方策であることである。其の結果が建治元年の外征計畫となつて現はれた。それは元の使節が鎌倉龍ノ口で斬られた年で、國を擧げて外敵に對する敵愾心の高まつた時である。此の年幕府は北條實政を九州に派遣して異國征伐の準備に當らせた。即ち翌年三月頃、海を越えて元軍の根據地である朝鮮半島に遠征しようといふ計畫で、其のため兵船を整へ、梶取や水手を九州各地から集めることを太宰府に命じた。此の計畫が愈々熟して、鎭西奉行は、九州各地の武士に命じて外征に參加する兵士の數、梶取や水手の人數などを書出させ、また其の管轄下にある大小の船を博多に回航させた。將士達は何れも進んで從軍を希望し、士氣は大いにあがつたが、この外征計畫は色々な事情で實行されるに至らず、中止された。

弘安の役

弘安四年の蒙古襲來は文永の役に比べると遙に規模の大きいものであつた。元（げん）の世祖（クブライ）（忽必烈）の計畫によれば、其の軍勢は蒙古人と漢人・高麗人とから成る東路軍四萬、これは半島南端の合浦から壹岐にむかふ。之に加ふるに先に元が滅ぼした南宋の降將達を利用し、水上戰鬪に秀でてゐる南宋の兵士達から成る江南軍十萬が揚子江河口方面から一路我が壹岐にむかひ、互に合して總勢十四萬の大軍と爲し、この地から九州に渡らうとしたのである。然かし其の大軍は統率を缺き指令が徹底してゐなかつた爲め、東路軍は江南軍の到著を待たずに、壹岐から博多灣の志賀島に迫つた。我が將士は奮戰よくこれを擊退せしのみならず、更に江南軍が壹岐に到著したことを知るに及んで、進んでその島に渡り之と戰を交へるものもあつた。例の暴風雨が起つたのは、丁度東路・江南兩軍が肥前平戸島に集つて準備を整へ、鷹島から、一擧太宰府に迫らうとした時であつた。その機會に乘じて我が將士達は海上に出て敵船を襲つて打破つた。敵船は大半覆沒し、殘るものは先を爭つて合浦に逃げかへつた。この輝かしい勝利は決して所謂神風の威力のみによつて得られたものではない。我が將士達が進んで海上に出て、敵船をむかへ討ち、また敵の根據とたのむ地に迫つて之を襲ふた攻擊的戰法が效を奏したものといふことが出來る。

西の海よせくるなみもこゝろせよ　神のまもれるやまと島根ぞ

之は其の時異國降伏の祈願に專念した大和の春日若宮の神主中臣祐春が詠んだ和歌であるが、また當時に於ける上

下共通の心裡であつた。

元三度日本遠征を企つ

元は再度の日本遠征に敗れたにも拘らず、更に三度その決行を計畫し、高麗や江南地方に命じて新に三千隻の船をつくらせ、水軍に戰術を習はせ、また高麗に命じて糧食を整へさせ、遠征軍の司令官を任命するなど其の計畫が進められてゐたけれども、其の國内の民心が之を支持しなかつた爲め終に其の企圖は實行されなかつたが、我が國では彼等の來寇を豫期し之に備へるために、九州沿岸一帶には更に嚴重な防壘を施し、また警備をも怠らなかつた。然し此の未曾有の國難によつて國内の疲弊はつのり、幕府の基礎も漸く傾くやうになつた。

海運の發達

平安朝時代の末から鎌倉・室町時代にかけて國内の商業が次第に發達し、その商品を輸送するために海運が利用された結果、國内の海上交通は著しく進歩した。而して幕府が置かれてゐた鎌倉や、伊勢灣の大湊、和泉の堺浦、備後の尾ノ道、長門の赤間關、若狹の小濱、出雲の美保關、九州地方では博多、薩摩の坊ノ津、四國では土佐の浦戸などが商港として最も繁榮した。

鎌倉幕府の統制がゆるむに從つて海賊衆の勢力が次第に強くなつた。當時の海賊衆といふのは地方の豪族が自衛の必要から設けた海軍に外ならなかつた。吉野朝時代に至つて其の實力は益々强大となつた。吉野朝廷が僅に大和・伊勢・紀伊の三國を根據地としてよく足利方の勢力を抑へることが出來たのは、一つには紀伊沿岸を本據とした海賊衆の勢力を利用した結果であつた。又その忠勤によつて遠く常陸・陸前方面の義軍と聯絡をとることが出來たのである。紀伊の海賊衆は更に瀨戸内海方面の海賊衆と互に連絡をとつて、遠く九州の沿岸地方に出沒し、その地方の足利方の軍勢を惱ましたことさへあつた。

其の後ち戰國時代に入り地方の諸大名が次第に勢力を占め、互に割據してその覇權を爭ふに至るや、この海賊衆は彼等の支配下に水軍として大きな役割を果すことゝなつたのであるが、他方かくして長い間に鍛へられた國民の武力と鬪志とは、やがて之を海外に向つて發するに至つた。其れは海外貿易を力によつて解決しようとする積極的行動であつた。其の進出に脅かされた朝鮮や支那ではこれを呼ぶに倭寇の名を以てしたのである。

倭寇

所謂倭寇がはじめて朝鮮の沿岸に進出したのは鎌倉時代で、文永の役の前後に當つてゐる。而して爾來、建武中興の頃まで、南朝鮮一帶は殆んど毎年のやうに其の侵寇をうけた。元來朝鮮半島の南部一帶は米の産地として高麗の最も重んじてゐた地方で、國營の倉庫が各地に設けられ、また年々租米を積んだ官船が北にむかつて沿海を航行した。倭寇はこの官船を襲つて積米を掠奪し、また上陸して倉庫を侵し、また農民等を捕へて歸ることを常としてゐた。然もその行動には統制があり、武力も優れて居り、高麗の軍隊も之れを防ぐ實力を缺いてゐた。南朝鮮の海上は年々數百隻の船で渡航する倭寇の活躍に全く委ねられてゐたが、高麗朝は之が爲に全く國力が疲弊して、終に滅亡した。而して之れに代つて李朝が半島の統治に當ることゝなつたのは室町時代の始めのことである。李朝に入つても倭寇の侵入は止まなかつた。李朝は頻りに我が國と和平するの策を講じ、足利幕府や九州探題、西國の諸大名などの許に屢々使者を送り、倭寇を禁止するやう要求した。

朝鮮との修交

西國諸大名の間には周防の大内氏のやうに早くから高麗の請を受けて倭寇禁止に力を盡し、その國と修交を結び、貿易の利益を收めてゐたものがあつた。足利幕府は大内氏の修交を通じて朝鮮と親善關係を結んだ。而して平和的な通商が行はれるやうになつたけれども、なほ沿岸を荒らす倭寇は跡を絶たなかつた。朝鮮では水軍を整へ、倭寇に備

へ應永年間には其の根據地の一たる對馬に來襲し、却つて擊退されたこともあつた。

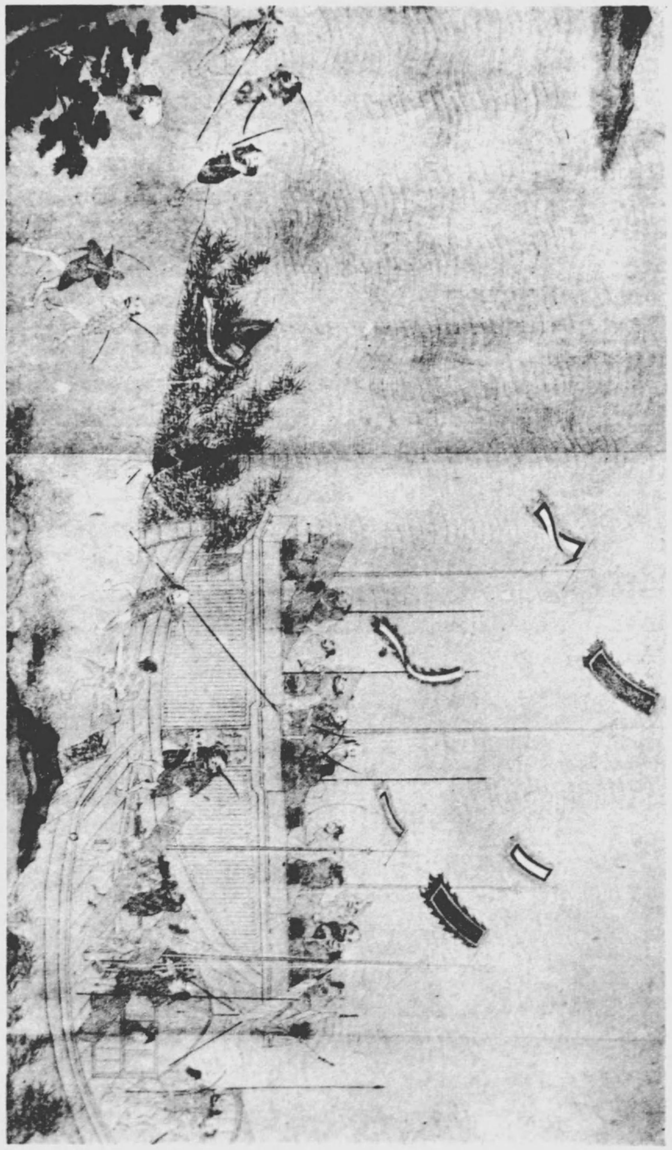
其の後半島との間の貿易關係は統制され、對馬の島主宗氏が專ら其の利益を收めるやうになつた。年々渡航する貿易船の數は制限され、また交易する港をも限定され、それ以外の地方に往く船は總て倭寇と見做されたのである。かうした關係は豐臣秀吉の朝鮮出兵の頃まで續いてゐたが、是等の南朝鮮の港には一時日本人の居住地が出來て二千人の日本人が在住してゐた。其の中には土著して附近の土地の耕作を行ふものもあつたといふ。

倭寇の支那沿岸劫掠

高麗朝の末年、半島の沿岸を頻りに侵した倭寇の勢力は次第に支那沿岸地方に伸び、遼東から山東・江蘇・浙江、揚子江沿岸から更に福建・廣東方面にまで及んだ。元が滅びて明が國を建てたのは、我が吉野朝時代の末のことで、李朝の半島統一より二十餘年前に當つてゐる。元の滅亡原因は財政の破綻によるものであつたが、倭寇の猖獗はそれに拍車をかけたものと考へられる。明の大祖は卽位の後ち倭寇を防ぐことに專ら力を注ぎ、輕快な兵船を造つて常備し、また沿海の諸地方に城塞を築き、陣營を設け、沿岸警備を嚴重にする一方、我が國に使者を送つて倭寇を禁止することを求め、また國交を調整し、貿易を振興する交渉を行つた。

明との修交

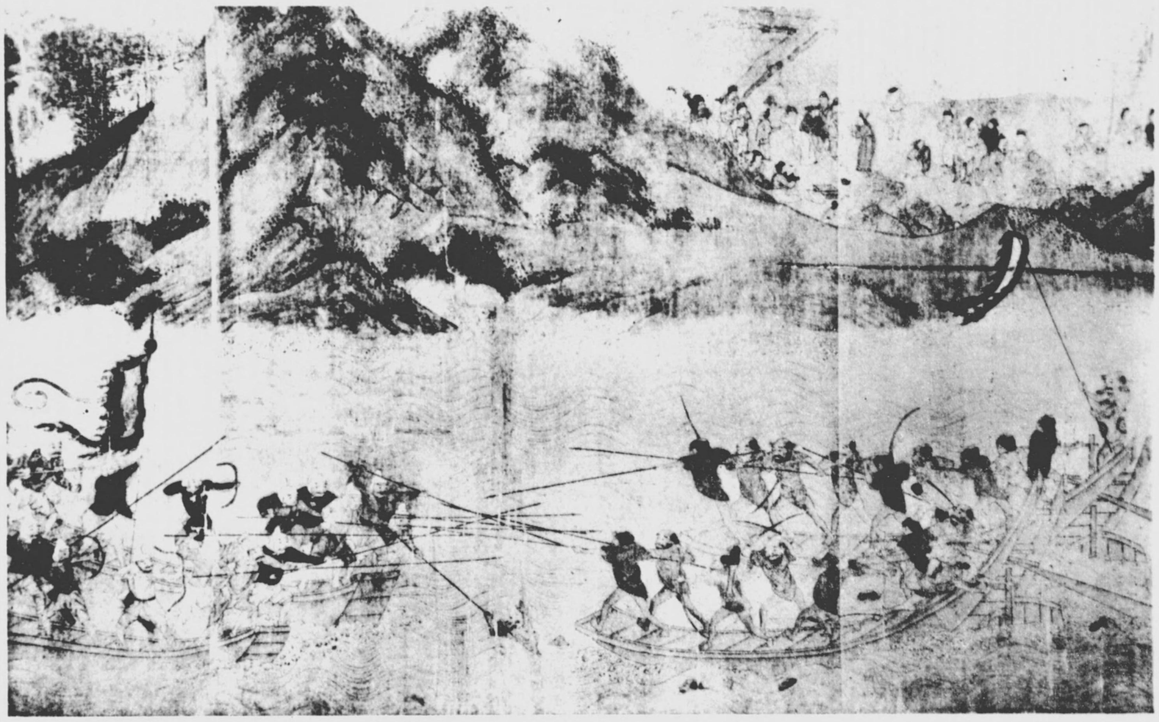
其のころ京都には足利幕府が勢力を占めてゐたが、將軍義滿は日明貿易の利益を計つて玆に明との國交が結ばれるに至つた。足利義滿は倭寇を禁ずる政策をとり、九州・壹岐・對馬の人民に命じて明の沿海に寇することを禁じ、その首魁を捕へて明に送り、又は倭寇が捕へて歸つた支那人達を送り返した。かくして日明關係は好轉し、幕府と明政府との間に此の後貿易船が往來することになつた。然かし明としては我が國を朝貢國として待遇してゐたのであつて、幕府の使船も進貢船として入港を許され、貿易品も進貢品として認められてゐた。卽ち足利將軍は「日本國王」



部一の（藏所所纂編料史學大國帝京東）卷圖寇倭

料資な重貴たい描に實如を羅活の寇倭、り成に筆の家畫代明だん苦に略侵の寇倭は物卷繪の此

倭寇圖卷の一部（出所同前）



として明に臣屬し、朝貢する形式をとつて貿易を行つてゐたのである。自由貿易は禁壓されてゐたが、大名・豪族・豪商・寺院は此の公の外國貿易に參加して、次第にその富を蓄へ、やがて幕府の勢力が失はれるに及んで、是等の大名達が之に代つて明との貿易の實權を占めるに至つた。殊に應仁の亂後には、博多商人の經濟力を背景とした大內氏の勢力と、堺商人の經濟力を背景とした細川氏の勢力とが此の貿易による利益を挾んで對立し、遂に兩氏がそれ〳〵派遣した遣明船の船員が其の渡航先の寧波で、亂鬪を交へるといふ事件さへ起つた。瀨戸內海の制海權は其のころ大內氏の手に歸してゐたので、堺の商船は土佐沖を迂廻して直接薩摩南岸の山川や坊ノ津、または種子島に赴き此處から明に渡航した。是等の港ではまた琉球との貿易も行はれてゐたので、旁々次第に繁榮するやうになつた。此のころ琉球の商船は博多にも來航して香料や染料・藥種など南洋方面の商品を傳へた。この琉球の商船は更に我が國と明・朝鮮との仲介貿易にも當つてゐたのである。

大內細川兩氏の貿易

大內氏が滅びまた細川氏も分裂するに及んで、明との公貿易は全く行はれなくなり、而して之れに代つて私貿易が盛んとなり、一旦跡を絕つてゐた倭寇が其の後また明の邊海に活躍するやうになつた。

歐羅巴人の勢力が我が國に達するやうになつたのは此の頃である。ポルトガルの商船は既にこの時代、インドを經て東洋の海上を往來し、更に北上して支那沿岸にも其の根據地を占めてゐた。而して天文十二年（西曆一五四三年）種子島に漂著したジャンク船によつてポルトガル人の日本通航の端緒は開かれたのである。

第二章　歐羅巴諸國の東洋發展より寛永鎖國に至る時代

第一節　歐羅巴諸國の太平洋進出

一、ポルトガルの太平洋進出

十字軍とイタリア諸都市の繁榮

アラビヤ人の勢力が地中海南岸一帶を蔽ひ歐羅巴諸國と對立してゐた時代は十五世紀の頃まで續いた。その間十一世紀の末頃から小亞細亞地方に土耳古民族が擡頭し始めて次第に其の附近の地を侵し、終にキリスト教の聖地エルサレムを陷れるに至つた。こゝに全歐羅巴のキリスト教國を擧げて聖地回復のため、十字軍の遠征が行はれることゝなつた。

十字軍は前後凡そ二百年の間、幾度か遠征の師を起したけれども、終に其の目的を達することが出來なかつた。その遠征は主に海路によつて行はれ、その軍隊の輸送や軍需の補給を掌つてゐたイタリアの都市ヴェニス、ジェノアまたフロレンスなどが次第に繁榮するやうになつた。是等の都市は十三世紀から十五世紀までの間、東洋貿易を獨占し是等の都市に所屬してゐる船隊は或はコンスタンチノープルを經て黒海に入り、その沿岸でアラビヤ人の隊商から東洋方面の商品を仕入れ、また或るものは地中海東岸のシリヤ地方でこれを積み、歐羅巴の各地方にそれを送つて莫大な利益を收めてゐた。その商品の主なものは支那の絹、印度の木綿、東印度諸島に産出する香料、その他貴金・寶石

イタリア諸都市の東洋貿易

オスマン・トルコの擡頭により東洋貿易阻害さる

などで、中でも香料として、肉豆蔻・丁香・蕃椒・胡椒などの類は歐羅巴人の最も珍重するところであつた。その頃これ等の香料は調味料として用ひられると同時に、藥用に供し、總ての病氣に効能のあるものとして用ひられ、又極めて高價なものであつた。

アラビヤ商人たちが南海方面、殊に馬來半島からスマトラ島、爪哇島、セレベス島、ボルネオ島、モルッカ諸島にかけて盛んに活躍したのは、主に是等の地方に産出する香料を求めて、之れを地中海方面に齎らし、東西の仲介貿易の利益を得るためであつた。ところが、十四世紀のころ土耳古族の中のオスマン・トルコが小亞細亞地方に勢力を占めるやうになつて、やがて十五世紀の半ばにはコンスタンチノープルが其の手に入つた。之れはそれまでアラビヤ商人を通じて東洋の商品を得てゐたイタリヤの諸都市に大きな打擊となつた。この東西の商路に立寨つたオスマン・トルコは未開の遊牧民族で、東洋の物貨の輸送は此の後多くの妨害を受け、また莫大な稅金を課せられることになつたからである。然かもイタリヤの商人等が暴利を貪るため、歐羅巴では東洋商品の價格が極めて騰貴するやうになつたので、小亞細亞地方を經ずに、直接印度に達する新らしい商路を開らかうとする氣運が歐羅巴諸國の間に次第に高まつた。殊に十三世紀の半ばに、ヴェニスの人、マルコ・ポーロが遠く支那に旅行して元の世祖に仕へ、歸國の後、東洋方面で見聞したところを傳へたことは、少からず東洋發展の氣運を促がした。また一方には此のころ中世紀の暗黒と迷蒙の時代が漸く過ぎ去つて、新らしい文化や科學が勃興し、殊に天文學や地理學が著しい進歩を遂げたこと、造船術や航海術が目覺ましい發達を示したことなども大きな原因である。アラビヤ商人が支那から傳へた羅針儀も廣く航海に用ひられるやうになり、この羅針儀の使用によつて暗夜にも安全に航海を續けることが出來るため、遠洋航海

航海術の進歩

が自由に行はれること〻なつて、新らしい航路が開拓され、延いて新大陸が發見されるに至つた。

ポルトガル人の印度航路發見

この地理上の發見に大きな働きをしたのはイベリア半島のポルトガルとスペインの國民であつた。この地方にはアラビヤ人の勢力が十五世紀まで殘つてゐたのであるが、ポルトガルは之れと對抗するため早くからアフリカ地方に進出して、十五世紀の始から、アフリカ大陸の西海岸に沿うて其の國勢は年々南方に伸びて行つた。この海外發展の氣運は航海王と呼ばれたポルトガルの王子ヘンリーの鼓舞奬勵によるところが大きかつた。ヘンリーはポルトガルの將來を海上にありとして、專ら海員の養成に力を注ぎ、毎年探檢船隊を出して此の方面の開拓に當らせたのである。その結果ポルトガル人は大膽な航海國民として雄飛するに至つた。彼等は黃金海岸から砂金や象牙や胡椒、殊に黑人奴隷を盛んに本國に運んだが、やがて其の勢力はコンゴ河口に伸び、ついで大陸の南端喜望岬が發見された。この岬を廻航して大陸の東海岸を北上し、印度の西海岸に達する航路が發見されたのはそれから十年後のことであつた。ヴァスコ・ダ・ガマが一四九八年に始めてカリカットに到著し、こゝに歐羅巴と東洋とが此の新らしい航路を通じ、海洋によつて結びつけられること〻なつた。それはあたかも始めてポルトガル人が種子島に到著した天文十二年に先立つこと四十五年前のことである。

コロンブスのアメリカ發見

直接印度に通ずる商路を拓かうとする努力は他方にジェノアの人コロンブスのアメリカ大陸發見となつて現れた。彼は世界が球體であることを知り、印度に達するには大西洋を西に進むことが捷路であると確信し、その頃スペインにあつたカスチラ王國の女王の助力を得て、その探檢に從ひ、一四九二年に西印度諸島に達した。その後三回の航海を重ねて此の方面を探檢し、アメリカ大陸を發見した。一四九二年には又た回教徒がイベリア半島に築いてゐた王國の首都グラナダが陷り、アラビヤ人の勢力が全く歐羅巴から驅逐された。こゝにスペイン、ポルトガル兩國の國力は益々榮え、貿易と植民との事業が大いに起るやうになつた。而してキリスト教の布教事業も此の新世界開拓の爲に之れと歩調を合せたのである。ローマ法王は一四九三年勅令を下して此の未知の世界を二つに分け、アフリカ大陸の西端ヴェルデ岬の西方三百浬の地點で大西洋を南北の直線で區切り、その東の部分をポルトガル國王に與へ、また西の部分をスペイン國王に委ねること〻したので、これから兩國は夫々與へられた地方の經營に力を注ぐこと〻なつた。尙ほ此の限界線は其の後ポルトガル人の懇願により、法皇の認可を得て翌年兩國の間に條約を結び、更に八百浬西方に移された。之れによつてポルトガルはブラジルを其の版圖に收めることが出來た。これまで地中海が歐羅巴の歷史の上に果して來た重要な役割はこゝに失はれた。殊に地中海の制海權を掌握して其の繁榮をつゞけて來たイタリアの諸都市の地位は、その後この新らしい東洋貿易の中心地となつたポルトガルのリスボンによつて奪はれるに至つた。

ローマ法王世界を二分す

ポルトガルの印度經略

ポルトガル人が始めてインド貿易に著手した當時、南海方面の貿易をこれまで殆んど獨占してゐたアラビヤ商人達は其の利益を奪はれることを恐れていろ〳〵と妨害を試み、また沿岸各地の土侯の間にもポルトガル人の侵入を好まないものがあつた。新鋭武器の大砲を積んだポルトガルの船隊は沿岸の都市を砲擊し、また敵兵を殺戮して大いに之れを威壓した。然かしポルトガルの船隊が全くアラビヤ海を制壓するには、なほ十餘年の歲月を必要とした。その間回敎徒である埃及國王の船隊は屢々土侯等の船隊を援けてポルトガルの船隊と戰つた。更にその背後にはヴェニスの商人等の援助があり、兵器の供給も行はれたと傳へられてゐる。

アルブケルケの事業

アルブケルケがゴアを占領して、ポルトガルの屬領としたのは一五一〇年のことであつた。その地は長くポルトガルの東洋貿易の根據地として、またキリスト教布教の中心地となり、海軍の要地ともなつて、東洋のヴェニスにも譬へられる繁榮を示すに至つた。アルブケルケは印度總督として始めてゴアに入つてから、本國召還を受けて歸國の途上ゴアの近海で永眠するまで、僅か五年間であつたが、その間に極めて大きな事業を成し遂げた。ポルトガルの東洋發展の基礎は全くアルブケルケの手で築かれたといつてよい。先づマラバール海岸が平定され、セイロン島の經略が行はれた。一五一一年にはアルブケルケは自ら十九隻の船隊を率ゐて馬來半島のマラッカを襲ひ、この東印度の咽喉ともいふべき要衝の地を占領した。この港は其のころ南海貿易の中心地として、支那・印度・アラビヤその他東洋各地からの商船が輻湊してゐた。中にもアラビヤ商人は此の港に集まる東印度諸島、殊にモルッカ諸島の香料類を歐羅巴方面に輸送することにより利益を收めてゐたもので、こゝに彼等が南海貿易に占めてゐた地位は全く失はれることとなつた。なほ當時マラッカを支配してゐたアラビヤ人マームッド・シャーが追はれて半島の南端に移つて建設した市が現在のジョホールである。

斯くて東印度貿易の中心地からアラビヤ商人を驅逐したアルブケルケは、次に西に轉してアラビヤ海方面に於ける彼等の活動を封ずる爲、波斯灣の入口の要港オルムス島を征服しこゝに要塞を築造した。この地は地中海方面に通ずる門戸として當時頗る繁榮してゐたのである。このころアルブケルケは更に埃及を征服し紅海と地中海とを聯絡させる計畫を樹てゝゐたといふことである。然しそれは實行されなかつた。結局西印度洋ではアデンとオルムスとが確保されたのである。一はアラビヤや埃及との貿易の爲であり、また一は波斯、その他中央アジア方面との貿易の爲めであつた。

ポルトガル人の東印度進出

其の後インドでは長く土侯の叛亂がつゞいた。それはポルトガル人の土民に對する態度が極めて苛酷であつたことによるが、同時にまた彼等は終始航海通商を旨として、その地方の統治に努めず、また其の優勢な海軍力を恃んで、海上から防衛することの出來る土地の外は領有することを望まなかつた爲めである。之れは後のイギリス人のインド統治と比較して注目すべき問題である。

マラッカがポルトガル人の手に歸してから、この土地を根據として彼等は東印度諸島に進出し、また暹羅・ペグー・爪哇・支那等の國々と交を結ぶに至つた。

そのころ爪哇には回教徒の勢力が擡頭してゐた。東爪哇にはマジャパイトを都とした印度教の王國があつて、アルブケルケがマラッカを陷れた時その國王はアルブケルケの許に使を送つて好(よし)みを通じたが、やがて其の國は回教徒のために滅ぼされた。西爪哇にもスンダ地方に印度教の王國があつた。この地方はモルッカ諸島とマラッカを結ぶ航路から離れてゐたので、年々その地方に來航して多額の胡椒を積んで歸る支那船との交渉を除いては、殆んどそれまで重要な價値を持たなかつたが、ポルトガル人がマラッカを占據し、更に一五二一年スマトラ西北岸のパセムを服屬させて完全にマラッカ海峽を扼することゝなつて後は、この方面の海上交通路が一變して、この王國の沿岸、即ち爪哇の西北岸地方は忽ち其の要路に當るやうになつた。マラッカ海峽を避けた支那人、アラビヤ人などの商船がスマトラを迂廻してスンダ海峽を經由するに至つたからである。しかし此の地方にも軈て回教徒の勢力が强大となり、バンタムを首都として回教王國が建てられることゝなつた。かくして此の島は殆んど回教徒の勢力に歸してしまつたが、ポ

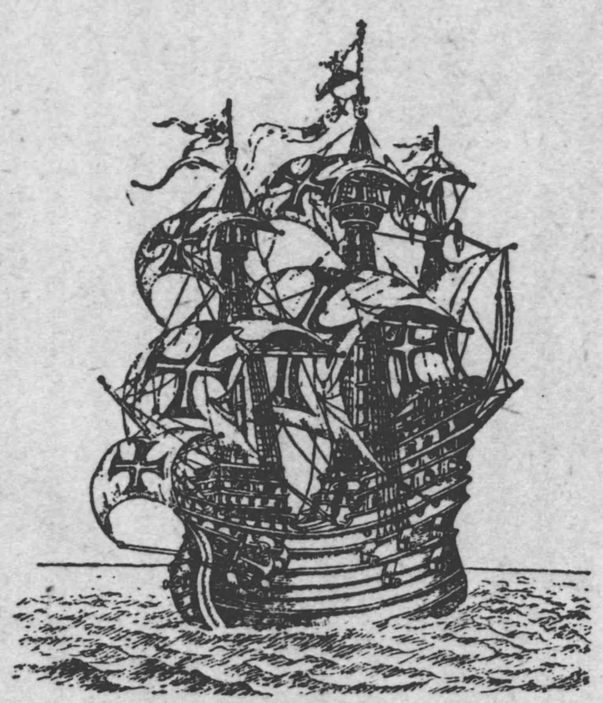
ルトガル人は此の島の北海岸の要港バンタム、グレシク、ジャパラ、バナルカンなどに來航して、香料類を買入れてゐた。就中、東爪哇の東北端バナルカンはマラッカからモルッカ諸島へ航行する寄港地として確保された。この地では奴隷の賣買が行はれてゐたので、ポルトガル船は大勢の奴隷を仕入れてマラッカに送つたといふことである。

ポルトガル人がマラッカを確保したのは南海方面の香料貿易を占有する意圖に出たものであつて、その主な産出地であるモルッカ諸島の探檢が次で行はれ、テルナテ、アンボイナ、バンダを始めとして所謂香料諸島の開發が之れから始まつた。モルッカ諸島に對しては、そのころ東太平洋から西進して來たスペインも野心を有つてゐた。マジェランが南アメリカの南端を廻つて始めて太平洋の探檢航海を行つたのも、スペインのために此の香料群島を探檢することが目的であつた。斯くてモルッカ諸島の領有權に就ては當初兩國間に競爭が行はれたが、一五二九年ポルトガルは金貨三十五萬デュカットを支拂つてスペインから其の領有權を買ひ取つた。而して十六世紀を通じてポルトガル人はこれ等の島々を領有し、城塞を築いて土民を支配し、産出する香料を獨占して之れを歐羅巴の市場に送つてゐたのであるが、是等南方の海上は此の世紀の末にオランダが進出して來るまでは、マラッカを根據地とするポルトガル船隊の制海權の下にあつた。

ポルトガル人の支那通商

一方ポルトガルの勢力は支那の海岸に沿うて次第に北に進み、マレイ人の商船に乘つて始めてポルトガル人が上川島に著いたが、その翌年即ち一五一七年に支那の港灣測量の命をうけたフェルナオ・ペレス・ド・アンドラーデの率ゐる四隻の船隊はマレイ船四隻を從へて廣東港外に現れ、使節トーメ・ピレスは陸路をとつて北京に赴き明の武宗に謁した。回敎徒の反對があつて其の通商が許可されなかつたにも拘らず、

ポルトガル船の圖



一五一一年マラッカを攻撃したアルブケルケ船隊の一船

ポルトガル人の此の方面の貿易に赴くものは年を逐うて增加するやうになつた。支那は當時倭寇その他沿海の海賊に備へて强力な船隊を整へてゐたので、ポルトガルの船隊も擅に活躍することは出來ず、廣東を驅逐されてから、寧波・漳州などに來航して居留地をつくつたが、それも十年を經ずして驅逐されてしまつた。その後一五五四年に、始めて浪泊澳に碇泊して廣東に出入通商する許可を得、更に一五五七年に至つて澳門に居留することが公認された。當時支那の地方官はポルトガル船の武力を借りて海賊の討伐を行つたこともある。尙ほ支那沿海に出沒し、劫掠を事として、猖獗をきはめてゐた海賊、特に倭寇が漸く其の姿を消して行つたことについては後

に述べる。

澳門に商館が設けられてから、ポルトガル人の支那貿易は漸く軌道に乘つた。彼等は此の國から主に絹と茶とを仕入れて之を歐羅巴方面に運んだ。澳門は支那貿易の根據地であつたが、同時に日本貿易も此の地に基礎を置いて行はれるやうになつた。また此の地は後に支那日本のキリスト教傳道に當る耶蘇會の根據地ともなつた。

斯くてポルトガルは東洋の海上にゴア、マラッカ、澳門の三根據地を得たのであるが、是等の據點をつなぐ航路は十六世紀を通じて全く彼等の支配するところとなり、年々季節風を利用して定期の航海が行はれてゐた。彼等が用ひてゐた船は一千噸未滿の帆船であつた。而して其の船がゴアを發してマラッカ・澳門を經て日本に達し、再びゴアに歸航するまでには凡そ二十四箇月を費したといふ。

二、スペインの太平洋進出

スペインの太平洋進出

大西洋上に南北の線を劃して其の西方の經營に當つたスペインの勢力はポルトガルよりも遙かに遲れて太平洋に現れた。コロンブスがアメリカを發見してから二十一年の後、一五一三年パナマ地峽がスペインの探檢家バスコ・ヌーニエス・デ・バルボアによつて發見され、始めて此の海洋の存在することが認められた。ポルトガル人マジェランがスペイン國王の命をうけて五隻の船隊を率ゐ、南アメリカ大陸の南端の海峽を經て太平洋に進んだのは一五二〇年のことで、この海峽は後世マジェラン海峽の名を以て呼ばれるに至つた。彼の船隊は此の未知の海洋に平和な航海を續けた。而してマジェランは此の海洋を「平和な海」即ち太平洋と命名したのである。マリアナ諸島を發見し、フィリッピン諸島のミンダナオの北岸を過ぎて、その船隊はセブー島に到著した。この地でマジェランは土人の爲めに殺されたが、その部下はボルネオ島、モルッカ諸島を經て歐羅巴に歸つた。こゝに始めて世界一周航海が成し遂げられた。

然し無事本國に歸り著いたのは其の五隻のうち僅に一隻に過ぎなかつたのである。マジェランの航海は香料の産出地を求めて、既にポルトガル人が十年程前から領有してゐたモルッカ諸島を探檢するのが目的であつた。爾來その地方の香料貿易をめぐつてポルトガル、スペイン兩國は對立したが、やがて和議が整ひ、スペインが其の慾望を放棄したことについては曩に述べた。マジェランがフィリッピン土人の毒矢に命を殞したころ、西印度諸島のキューバ島に根據地を持つてゐたスペイン軍は北アメリカ大陸に兵を進めてゐた。メキシコを征服すると、こゝにスペインは東太平洋岸に進出することゝなり、メキシコ地方は新スペインと呼ばれ、その植民地として開發されるに至つた。フィリッピン諸島にスペインの勢力が及ぶやうになつたのはそれから四十年後のことである。一五六五年メキシコの市長をしてゐたミゲル・ロペス・デ・レガスピは國王の命を承けてセブー島を占領した。其の勢力が忽ち附近の島々に及ぶこととなつたので、ポルトガル人の反對を受けたが、レガスピはこれを擊退した。

スペイン人のフィリッピン占據

當時、北方ルソン島には、支那や日本から年々商船が來航して土人と貿易を營んで居つた。レガスピは一五七〇年にこの島を占領し、翌年マニラを全諸島の首都と定め、同時にこの地はローマ法王の支配の下にあるフランシスコ會ドミニコ會などの土民への布敎傳道の根據地となつた。マニラとメキシコのアカプルコ港との間には此の後ち年々スペインの帆船が往復するやうになつた。その航海は海流と季節風とを利用するもので、この地方で得られる金や香料類、また支那や日本の商船が齎らす絹や銀その他東洋の商品がメキシコを經てスペイン本國に輸送された。而して

スペイン本國から盛んにメキシコに送られてゐた毛織物などが復たこの方面に船載されたのである。フィリッピンからスペイン船が始めて我が國に來航したのは天正十二年（一五八四年）のことであつた。支那に對しては一五九八年から貿易が開始され、廣東地方に出入することゝなり、又この年に遲羅とも通商條約が結ばれた。斯くしてフィリッピン諸島は其の支那貿易の基礎の上に、爾後凡そ二世紀餘の長い間、スペインの植民地として其の支配下に屬したのである。

三、オランダ、イギリス兩國の太平洋進出

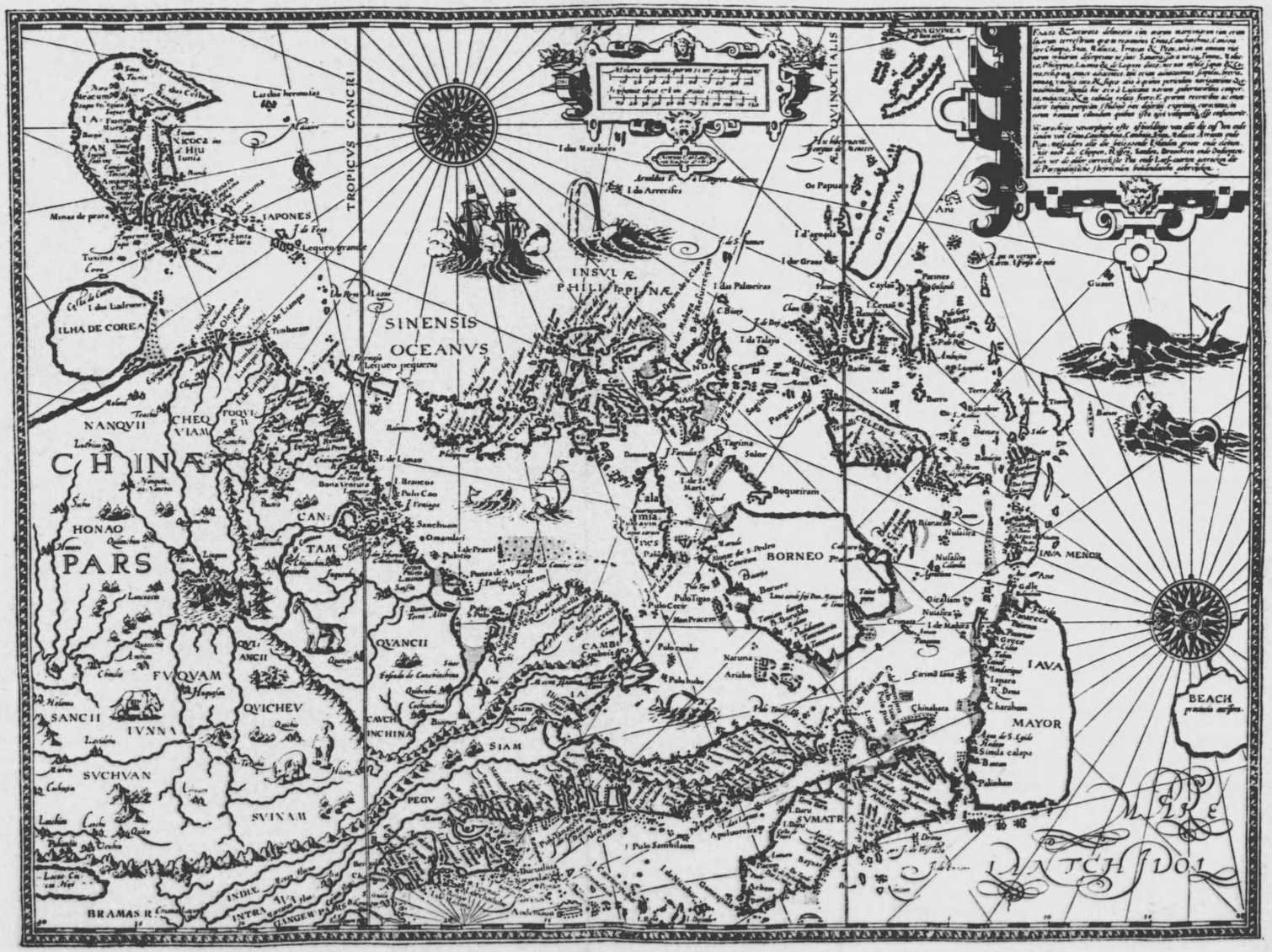
スペインの強大と海上權力

十六世紀の中頃スペインは歐羅巴で最も繁榮し、また最も強力を誇る國となつてゐた。その領地として本國の外、歐羅巴には商工業、特に毛織物工業の發達したネーデルランド地方があり、またアメリカ、フィリッピンの植民地があつた。更に一五八〇年にスペイン國王フィリップ二世はポルトガル國の王位を兼ねることゝなつて其の領地を併せることが出來たのである。これより先、一五七一年その強力を誇る船隊はレパントの戰に土耳古海軍を粉碎して以て地中海の覇權を握り、列國を威壓してゐたが、その繁榮も此の頃を絶頂として漸く衰落の傾向を辿るに至つた。

其の支配下にあつたネーデルランドが一五八一年に獨立してオランダとなり、そのオランダの叛徒を援けたイギリスのエリザベス女王の海軍のため、一五八八年にイギリス近海で其の無敵を誇る彼等の大艦隊を粉碎されたことが、スペインの運命を決定したのである。

東洋から船載される豐富な商品の集まる港として、リスボンが繁榮を誇つたのも其の頃迄のことあつて、その後、

リンスホーテン東印度航海圖（東洋文庫所藏）



（本日は端上左）圖海航しへ添に書著のンテーホスンリしへ傳に蘭和てめ始を等路航、情事の度印東（頃年〇〇六一暦西）間年長慶

北海に面したオランダとイギリスの兩國の商船が直接太平洋方面に進出するやうになると、やがてポルトガル、スペイン兩國が東洋に築いた地盤は其のために侵蝕されることゝなつた。元來太平洋方面から此のリスボン港に集つた商品は、その地方から主にオランダの商船に積換へられて北海方面に輸送されてゐた。ポルトガルは歐羅巴各國との間には殆んど直接の通商關係を持つてゐなかつた。その爲めオランダはポルトガルを通じて東洋貿易の利益に與つてゐたわけであるが、ポルトガルでは此の極めて有利な東洋貿易を獨占する必要上から、印度に達する航路を絶對に祕密にしてゐた。國王の許可なく印度に航行するものは死刑に處せられ、物貨は沒收された。而かもそれは他國人に對しては決して許可されなかつたのである。ところがオランダがスペインに叛いて獨立して後、やがてスペイン國王がポルトガル國王を兼ねることゝなつた爲、オランダの商船は一切イベリヤ半島の港に近づくことを禁止された。半島と北海方面との仲介貿易によつて立つてゐたオランダの商人達にとつては正に致命的な打擊である。空しく自滅を待つか、進んで東洋貿易の開拓に乘り出すか、殘された道はたゞ此の二つであつた。

スペインの東洋貿易とオランダ

蘭人ヤン・ホイヘン・ファン・リンスホーテンの東洋紀行

オランダ人ヤン・ホイヘン・ファン・リンスホーテンの東洋紀行がアムステルダムで出版されたのは丁度そのころであつた。リンスホーテンは少年の頃リスボンに來てゐたが、ゴアの大司教の祕書となつてインドに渡り、八年間その地に滯在して、此の間に見聞した東洋方面の事情を詳細に記したのである。航路に關しては特に正確、綿密を極め、その當時日本方面の海上交通に從つたポルトガル人の水先案内の記錄なども其の儘を紹介してゐる。この書物の他にも東洋貿易に關する紀行や地圖・海圖などが刊行され(挿入繪參照)、その結果、東洋に對するオランダ人の認識は急に高まつて來た。

第一節　歐羅巴諸國の太平洋進出

コルネリス・ハウトマンの東洋航海

オランダの東洋貿易の先驅者となつたのはコルネリス・ハウトマンである。彼はアムステルダムの商人を糾合して會社を組織し、四隻の船を率ゐて出發し、喜望岬を廻つて初めて印度洋に進入した。時に一五九五年、オランダの勢力はこゝに始めて東洋に及ぶことゝなつたのである。次いで船隊はスマトラに寄港し、爪哇のバンタムに達した。ハウトマンが特にこの地方を選んだのは、リンスホーテンの報告によつて、ポルトガル人が西爪哇には殆んど威力を持つてゐないことを知つてゐたからである。ハウトマンはバンタム政府との間に通商條約を結び、最初の交易を營んだ。ポルトガル人はこれを妨害し、土人を使嗾して之れを退け、更にゴアから船隊を派遣して其の撃滅を圖つたが、その船隊がバンタムに達したのはハウトマンが其の地を去つた後であつた。この時ポルトガル船隊はバンタムに對して劫掠を擅にしたので、却つて其の土民の反感を買ひ、猛烈な襲撃を受けて、マラッカに逃げ歸つた。ハウトマンが歸國の後、本國から派遣された第二回のオランダ商船隊が再びバンタムを訪れた時、提督ファン・ネックは豫想外の歡待を受けて其の王宮に導かれたといふ。

オランダ東印度會社の設立

其の後も東洋への商船隊は續々と派遣され、一六〇〇年に第五回目の船隊を率ゐて爪哇に達したファン・ネックはその歸航の途中、始めて支那沿岸マカオ附近に到著した。また其の船隊の一部は馬來半島東海岸のパタニ（太泥）を訪れ、こゝに商館を設けることに成功した。パタニは其のころ西は印度各地、東は支那方面に通ずるジャンク船の寄航地として重要な地點であつた。而してポルトガル人も一五一七年以來この地と通商關係を結んでゐた。

此の頃、オランダ本國では東洋貿易の莫大な利益を目指して貿易會社が數多く設けられた。其等の會社は夫々別に船隊を派遣して、互に激しい競爭を惹き起すやうになり、その結果として、商品の仕入價格は著しく騰貴し、また逆に歐羅巴では東洋の物貨が市場に溢れて、その販賣價格は低落の傾向を生ずるに至つた。然かも是等の會社は互に東洋貿易を獨占する權利を政府から獲ようと苦心して、そのために他を陷れることを計つてゐた。

さうした混亂の間に漸く新らしい氣運が動くやうになり、一六〇二年、オランダ政府は是等の會社を合同して聯合東印度會社を設立した。而して政府は此の會社に對して喜望岬からマジェラン海峽に至る間の一切の航海と貿易の權利を二十一年間獨占することを認めた。其の上オランダ國の名で東洋諸國の王侯と通商條約を締結し、また商業の安全をはかり、秩序を維持する爲めに必要な土地に城塞を築き、守備兵を置く權限が與へられてゐた。且つ海上でスペインやポルトガルの船隊と戰ふ必要があつたので、海外に於ける指揮命令は總て毎年派遣される船隊の司令官に委ねられてゐた。

イギリスの東洋發展

要するに此の會社の目的とするところはスペインとポルトガルとの太平洋に於ける勢力を驅逐し、これに代つて自ら東洋貿易の王座につかうとしたのである。從つてオランダ國民は擧つて株主となつて參加することが出來たが、その外は何人も株主となることを許されなかつた。この後凡そ二百年に亙るオランダの東洋貿易は斯かる基礎の上に、著々と進められて往つた。

オランダと竝んで北海の新興國家であるイギリスにも東洋發展の氣運は早くから動いてゐたが、强力なスペインの海上權力は東洋に達する航路を阻み、イギリス國民をして此の方面に進出することを許さなかつた。その爲めにスペインの勢力の及ばない商路を開拓して印度や支那に通じようとする努力が續けられてゐたのである。陸路露西亞を經て支那に達しようとする計畫、ペルシヤを通じてペルシヤ灣に進出しようとする計畫、または海路北氷洋を突破して

太平洋に達しようとする計畫、殊に彼等が最も期待を抱いてゐたのはアメリカ大陸の北端を迂廻して支那・日本・印度地方に達する航路を開くことであつた。この所謂北西航路の探檢の爲めには數十回に亙る遠征が企てられた。尙ほこの北方の航路を開かうとする計畫にはオランダ人も少からず期待をかけてゐた。オランダ人は主に北東航路、即ちシベリアの北岸に沿うて東洋に達しようとする航路の發見に努力してゐたのである。是等の探檢事業はすべて其の目的を遂げることが出來なかつたが、それによつて北極圈內の地理を明かにした功績は偉大なものであつた。

フランシス・ドレークの太平洋航海

イギリス人が始めて太平洋に來航したのは一五七七年であつて、丁度ポルトガル人が我が國に渡來した天文十二年から三十四年後のことである。この年フランシス・ドレークの率ゐる船隊が始めてマジェラン海峽を通過して南米大陸の西岸に出て太平洋に泛んだのである。ドレークは海岸に沿うて北上し、スペイン船隊と戰鬪を交へて之れを擊破し、その積荷を奪ひ、又その商業基地の破壞に力をつくした。其の後、北方航路發見の希望を抱いて北太平洋に進み、現在の桑港附近まで北上したが、更に轉じてフィリッピンに向ひ、喜望峰を廻つて一五八〇年に歸國し、斯くて世界一周に成功した。

ドレークの成功はイギリス國民に大きな刺戟を與へ、その後探檢隊が續出するに至つた。ドレークが採つた航路に從つたトマス・カヴェンディシュがマジェラン海峽を通過し、モルッカ諸島を經、喜望峰を廻つて第二回の世界一周に成功して歸つたのは一五八八年のことであつた。その年ドレークはイギリス艦隊を率ゐてスペインの無敵艦隊を粉碎し、イギリス國民の前に太平洋に達する航路を開放したのである。玆にイギリスの太平洋進出の歷史が繰りひろげられることゝなつた。

イギリス東印度會社の設立

スペインが海上權を失つてから之れに代つて東洋貿易を獨占したオランダの勢力は年を追うて增大し、リスボンに代つて一躍東洋貿易の中心地となつたアムステルダムの繁榮は著しいものであつたが、それがイギリスに及ぼした影響は東洋物貨の暴騰に外ならなかつた。そこでイギリスは進んで自ら東洋貿易に參加することを決意するに至りその目的に從ふため東印度會社が設けられたのは一六〇〇年のことで、わが國では丁度この年、慶長五年關ヶ原の戰によつて德川氏の覇業が完成し、江戸時代三百年の歷史が始まらうとしてゐる時であつた。家康に仕へて龍遇を得た我が國へ最初に渡來のイギリス人ウイリアム・アダムス（三浦按針）が、オランダ船で日本に漂著したのも此の年である。

獨人の東印度經營

オランダ東印度會社は其の東洋貿易の獨占を承認された二十一箇年の間に、從來ポルトガルとスペインの兩國が東洋貿易に占めてゐた地位を奪ひ取ることに成功した。その東洋貿易の根據地は、初め爪哇のバンタムに置かれた。この港は定期的に來航するオランダ船隊の需要を充たす爲、西爪哇の香料貿易を次第に集中するやうになり愈々繁榮したが、オランダは此の地方から直接モルッカ諸島、バンダ島、アンボイナ島に渡航して其の地方に產出する香料類を獨占することにつとめたので、ポルトガルの勢力は此の香料群島から次第に驅逐されて行つた。

ホルン岬の發見

尙ほ此の頃オランダがマジェラン海峽から東印度地方に達する通航貿易をほとんど獨占する事となつた結果、壓迫を被むつたポルトガル人は此の方面から太平洋に入る新しい航路を開拓するに至つた。即ち一六一六年南アメリカ大陸の最南端ホルン岬を迂廻して太平洋に入る新航路が發見されたのである。

爪哇島に根據地を置いたオランダは更にボルネオ、スマトラ、馬來半島、暹羅、東埔寨、日本などとも通商を開始し、各地に商館が設けられるやうになつた。支那に對しても早くから貿易を開く交涉を進めてゐたけれども、終に成

功しなかつた。日本との通商を開始したのは一六〇九年（慶長十四年）で、肥前平戸に商館が設けられた。

オランダ東印度會社は其の勢力が次第に増し、通商する地域が廣くなつて、これに參加する船の數も多くなるに從ひ、その指揮の必要から印度總督を置くことゝなり、該總督府がジヤガトラに置かれ、一六二一年この地に立派な城塞が竣成した。また其の港には多くの船を容れることの出來る碇泊地が設けられた。卽ち長くオランダの太平洋の根據地となつたバタビヤがそれである。バタビヤとはオランダ民族の名を意味するものである。

印度總督の設置

バンダ島

オランダはモルッカ諸島方面では競爭者を驅逐する一方、土民に對し極めて苛酷な態度を以て臨み、最も廉價に香料を買占めることにつとめ、その爲には彼等は手段を選ばなかつた。バンダ島の例について見ると、一六〇二年オランダ人は此の島で土民との間に香料用植物をオランダ人だけに賣渡す契約を結んだが、その價格については條件が無く、また土民はジヤンク船で自由に他の地方に出かけて、貿易を營むことが認められてゐた。然るに、それを買取る時になつて法外な廉價を主張して讓らなかつたので、土民は憤つて、その認められてゐた權利によつてイギリス人、ポルトガル人との取引を始めた。するとオランダ總督は之れを違約行爲として責め、一六二一年その島を占領し、自國の植民地としてしまつた。其の他にも香料の密賣買を取締るために其の監視の行きとゞく地域以外は、島民を強制して丁香樹を全部伐採させ、又は島によつて其の栽培する樹木を定めて、たとへばバンダ諸島では肉豆蔲、アンボイナ島では丁香樹に限り栽培させるなどの政策をとつたこともある。

フィリッピン諸島を占據してゐたスペイン人にとつても、オランダは又物資に富む支那との貿易を開かうとしたが、ポルトガル人の地盤を覆へすことが出來ず、許可されなかつた。

此爲め其の船隊を支那海上に浮べて、支那からフィリッピン又は日本に往來する支那のジヤンク船や、スペイン、ポルトガルの商船を襲つて其の積荷を掠奪したり、または澳門やマニラなどを攻擊して之を陷れようと圖つた。しかし遂に是等の根據地を其の手中に收めることが出來なかつたのは南海方面に派遣することが出來なかつた爲である。一六一九年にはオランダは其の競爭者であるイギリスと防禦同盟を結び、合同して二十隻の聯合船隊を編成し、バタビヤと平戸とを其の根據地としてスペインとポルトガルの植民地を攻擊し、また其の商船を海上に襲ふことを定めたが、イギリスの勢力が劣つてゐた爲め、オランダと歩調があはず、充分な效果を收めることが出來ない中に僅か二箇年で解散してしまつた。

イギリス、オランダ聯合防禦艦船隊

スペインは支那・日本との貿易を確保し、オランダの勢力に對抗する爲に、一六二六年（寛永三年）臺灣に根據地をつくることゝなり、基隆にサンサルバドル城、淡水にサント・ドミンゴ城を築いた。然かしオランダ人が之に對抗する爲め此の島に進出して來て、後に彼等を驅逐してしまつた。

オランダ人が臺灣に據るやうになつたのは、こゝを根據として其の地方に集る支那のジヤンク船を通じ、支那貿易を行ふ爲であつた。一六二二年イギリス、オランダの聯合船隊はボルドガルの根據地澳門を攻擊したが、失敗して澎湖島に退いた。ついで此處に城を築いて支那沿岸を脅かし、地方の官憲と通商の交涉を行つたが、支那の態度は頗る强硬で、しかも支那の强力な船隊は頻りに澎湖島に迫つて、遂にオランダ人は臺灣に移ることを强ひられた。そこで一旦タイオワンの島、今日の安平に移り、そこに城を築いたが、後に其の對岸のプロビンシヤに市街をつくつた。而して支那のジヤンク船をこゝに招いて貿易を營んだ。この地はゼーランヂヤと呼ばれ、オランダ人は後に一六六一年

（寛文元年）鄭成功の攻撃をうけて開城するに至こゝに據つてゐたのである。

斯くてオランダが西太平洋の海上權力を其の手中に收め最も優勢を示してゐた頃、イギリスはインドに著々と其の地盤を築いてゐた。

アムボイナ島の虐殺

初めイギリスは爪哇のバンタムに根據地を設け、太平洋方面ではバンダ、セレベス、ボルネオ、爪哇、スマトラ、馬來半島、暹羅、東埔寨、日本の各地方に商館を置いて貿易を行つたが、船數も少なく、實力も劣つてゐた爲めオランダとの競爭に敗れた。オランダは他國の勢力をモルッカ諸島から驅逐するために全力を盡してゐたが、その結果は一六二三年のアムボイナ島の虐殺事件となつて現れた。當時アムボイナにあつたイギリス人が、オランダ人襲撃の陰謀を企てたといふ理由で之を捕へ慘酷な方法で處刑したが、虐殺された人々の中には日本人も混つてゐた。オランダ人はこの事件を口實としてモルッカ諸島から總てのイギリス人を放逐することに成功し、やがて一六二四年にはバタビヤにあつたイギリス人も驅逐されてしまつた。斯くしてマラッカ海峽以東に於てはイギリスは殆んど勢力を失つたのである。

イギリス人のインド支配

然し既に此の時分、イギリスはインドに於て、ポルトガル人の勢力を奪ひ、これに代つて壓倒的な優勢を贏ち得てゐた。初めイギリスの根據地は西海岸のスラートにあつた。而して一六一〇年この地方の海上で、ポルトガル船隊と猛烈な戰鬪を交へて之れを破つたことが、イギリスのインド支配を決定したのである。インドに對して之れまで凡そ一世紀の間ポルトガル人が築き上げて來た地位は、その優勢な海軍力によつて、その制海權を完全に掌握してゐたためであつたが、之を失つた時、彼等は新に優勢な海軍力を背景として登場して來たイギリスの前に、跪かなければならなかつた。一六一四年にもポルトガル船隊はイギリス船隊と印度洋に戰つて敗北した。勝利に誇つたイギリスは更に一六二〇年には波斯國王を援けてポルトガルの根據地である波斯灣口のオルムスを奪回することに成功した。オルムスが陷つたことによつて波斯、中央アジア方面との貿易路が斷たれた。ポルトガル人の築いた堅固な城塞は此の後イギリス人の據るところとなつたのである。同年、イギリス東印度會社はコロマンデル海岸のマドラスパタンに土地を得、城塞を築く權利を得て、東海岸に確固とした基礎を占めることゝなつた。これが後のセント・ジョージ城である。從來彼等が據つてゐたスラートは自由港として各國の商船に開放されてゐたのであるが、こゝにはじめてイギリスだけに開かれた港を獲て、イギリスは此の後こゝを根據としてインドの經營に專ら進むこととなつた。

第二節　太平洋に於ける日本と歐羅巴諸國との交涉

一、歐羅巴諸國の日本貿易

（イ）ポルトガル、スペインの日本貿易

ジパングの追求

我が國が始めて歐羅巴に存在を知られるやうになつたのはマルコ・ポーロの東方見聞錄にジパングの島として紹介された記事によるのである。彼は其の中で、ジパングには黃金が極めて豐富で、宮殿の屋根はすべて黃金で葺かれ、大廣間の天井は黃金の延板であり、窓も黃金で飾られ、部屋々々には純金製のテーブルが置いてある、と記した。黃

金國ジパングはそれ以來大きな魅力となり、歐羅巴人に東洋への關心を喚り、また其の東洋への發展を促がした。コロンブスのアメリカ發見も、その探檢航海の目的の一つはジパングを搜し求めることであつた。コロンブスは大西洋を西にすゝみ、最初西印度諸島に達した時、その地方をアジア大陸の東端と信じてゐたので、その一島をジパングに當るものと考へて之れを占據し、これにエスパニョーラ島と名付け、スペイン領としたのである。このエスパニョーラ島は其の後、コロンブスがさう信じた儘、十六世紀の始まで、ジパングに相違ないと一般に考へられてゐたけれども、やがて此の方面の探檢と開拓が進むに從ひ、アメリカ大陸とアジア大陸の間に太平洋が橫はつてゐることが知られるやうになり、ジパングを新に太平洋の中に求めて努力が續けられることゝなつた。

ポルトガル人の日本進出

殊にモルッカ諸島をポルトガルのために先に占有されたスペインとしては、未だポルトガルの勢力の及んでゐないジパング島を發見し、これを占據しようとする希望は熱烈なものであつた。マジェランの最初の太平洋航海からレガスピのフィリッピン占據までスペインは四回の探檢航海を此の方面に行つてゐるが、その目的の一つはジパングを求めることであつた。然し彼等は遂に其の目的を遂げることが出來なかつた。その間にポルトガル人は支那方面に進出し、その結果日本にも來航することゝなつたのである。

ポルトガル人が初めて日本に到著したのは天文十二年（西曆一五四三）のことで、暹羅から支那に向つたポルトガル人のジャンク船が暴風雨に逢つて種子島に漂著したのである。此のときに初めて鐵砲が我が國に傳へられた。それは關ヶ原合戰に先立つこと凡そ六十年に當るが、その六十年の間にポルトガル人を通じて我が國に採入れられた歐羅巴の文化や科學の影響は頗る大きなものがあつた。當時の人々はポルトガル人を南蠻人と呼び、その商船を南蠻船と稱した。

キリスト教の傳播

澳門に根據地を持つてゐたポルトガル人は日本と貿易することが大きな利益であることを知つて、年々來航するに至つた。そのころ西國地方には島津・大友・松浦など有力な大名が割據して居り、是等の諸大名はそれ〳〵自國の領內に大きな港を持つてゐた。薩摩の山川・坊ノ津・豐後の府內・肥前の平戶などがそれである。是等の港はいづれも中世以來貿易港として著しい發達を遂げて來た地で、諸國の商人達が集まり、また支那や琉球方面の商船も多く來航してゐた。ポルトガル船が來航するやうになつてから、大名たちは競つて之を自領內の港に招くことに力を注いだ。この南蠻船が、支那から、インドから、また歐羅巴方面から齎らす豐富な商品によつて其の領國を富ますことが出來たからである。一つには新らしい歐羅巴の文化に接觸し、科學知識を吸收することであつた。更に鐵砲や大砲・火藥・彈丸に使用する鉛などを始めとして、ポルトガル船によつて齎らされる多くの軍需品の類を手に入れることも出來たし、時には軍費や兵力の供給を彼等から仰いだことさへあつた。

而してポルトガル人の東洋貿易に常に力を併せて進んで來た耶蘇會が日本布教に盡力したので、キリスト教は忽ち西國諸大名の間に弘まるやうになつた。ポルトガル船の貿易と耶蘇會宣教師の布教との間には常に密接な聯絡があつた。その領內に布教をすることを許さず、又は布教に對して好意を有たない大名の領國には、ポルトガル船は容易に近づかなかつた。フランシス・シャビエルによつて最初の布教が行はれた薩摩では、領主島津貴久があまり好意を示さなかつた爲め、當初主に其の地方を訪れたポルトガル商船もやがて來航しないやうになつてしまつた。また平戶の松浦隆信は初め布教に好意を示し、ゴア總督や耶蘇會の印度地方區長に親書を送つたことがあつたが、領內佛教徒の

反對を受けて後に布教を禁じた。それまで布教に當つてゐた宣教師等はポルトガル商船の平戸入港を停めて、キリスト教の保護者であつた大村純忠の領内、横瀬浦に入港させた。その後になつて隆信はまた布教を許し、平戸に天門寺といふキリスト教の寺院を設けた。商船は再び此の港に入るやうになつたが、隆信の態度がはつきりしなかつた爲め、宣教師は大村領福田に入港させることを圖つた。その結果、永祿八年（西曆一五六五年）松浦氏の船隊は福田沖にポルトガル船を襲ひ之れと戰を交へた。ポルトガル船が支那から船載する絹や生絲を買入れるために、是等の寄港地には京都や堺などの商人が多く集つて來るのが常であつたが、この時も福田には堺の商人等の大船が凡そ十隻ほど碇泊してゐた。松浦氏の船隊は多くの鐵砲を備へた七十隻の小船で編成されてゐた。堺の商人等は之と行動を共にして、港内に碇泊してゐたポルトガル船を襲ひ、交戰三時間に及んだ末、双方共に多大の損害を被むつて退いた。ポルトガル船は大砲を備へてゐたにも拘らず、松浦氏の船隊が周到な準備を整へ、また其の攻撃力が猛烈であつた爲め、その威力を顯はすことが出來なかつたのである。

松浦隆信のポルトガル船を討つ

此の海戰は我が沿海で行はれた最初の歐羅巴人との交戰であつた。この交戰にあたつて我が沿海を守る水軍の威力は充分に發揮され、ポルトガル人に少からず畏怖の念を抱かしめたのである。

長崎の開港

一方キリスト教の布教は著々と進み、元龜元年（西曆一五七〇年）に始めて長崎港が開かれ、ポルトガル船は此の港に來航することゝなつたが、後ち天正七年（西曆一五七九年）大村純忠が其の地を耶蘇會に寄進したので此の港は日本布教の根據地となるに至つた。

これは、本能寺の變によつて織田信長の國内統一の事業が挫折する三年前のことであつた。此ころ近畿方面でもキリスト教の信仰は極めて廣く行はれ、京都や堺などには立派な教會堂が設けられ、有力な大名の歸依するものも少なくなかつた。後に瀨戸内海の水軍の統率者となつた攝津の小西行長は殊に信仰に篤く、彼れの率ゐる船隊には十字架を描いた旗が飜つてゐたといふ。

天正年間の遣歐使節

九州地方で最も熱烈な信仰をもつてゐた大友宗麟、有馬晴信、大村純忠の三大名が遠くローマ法王の許に使節を送つたのは天正十年（西曆一五八二年）のことで、其のころ耶蘇會の巡察使として來朝してゐたアレッサンドロ・ワリニヤーニ師の先導によつて、宗麟の近親マンショ伊東祐益と、有馬晴信、大村純忠の近親ミゲル千々岩清左衛門とを使節とし、ジュリアン中浦、マルチノ原など、いづれも十四、五歳の少年が之れに加つたのである。一行は澳門からマラッカを經て、印度のゴアに行き、歐羅巴に歸航するポルトガル船隊に便乘して遠く喜望岬を廻つてリスボンに到着した。マドリッドでスペイン國王フェリッペ二世に謁し、それから地中海出てイタリアに渡り、ローマ法王グレゴリオ十三世に謁した。この時一行は歐羅巴諸國の皇帝の使節と同じ待遇を以て迎へられ、ヴァチカン宮の「帝王の間」で謁見を許されたといふことである。その後一行は西歐羅巴の各地を巡り諸國の王侯の歡迎を受け、日本の代表者として立派に其の使命を果たし、天正十八年（西曆一五九〇年）長崎に歸著した。一行が西歐羅巴を巡つてゐたころ、既に大西洋に無敵を誇るスペインの制海權は、次第に北海の新興勢力であるオランダとイギリスとによつて脅かされてゐた。スペインの無敵艦隊がイギリス本土を襲はうとして、却つてキャプテン・ドレークの率ゐる艦隊のために粉碎されたのは、まだこの使節の一行が歸國の途中、澳門に滯在してゐた頃のことであつた。

此のころ我が國内でも情勢は全く變つてゐた。

第二節　太平洋に於ける日本と歐羅巴諸國との交渉

織田信長の後をうけて統一の事業を完成した豐臣秀吉は、九州地方に兵を進めて島津氏の勢力を抑へた後、ポルトガルの代表者と會見した際、その席上彼はポルトガル人の日本通商を大いに歡迎し、近畿地方にも來航して、堺か又は其の附近の港で交易を營むよう熱望したといふ。然かもそれから數日經つと秀吉はキリスト教の布教を禁止する命令を發し、耶蘇會の領地となつてゐた長崎を沒收してしまつた。之れまで宗教の名によつて歐羅巴人の手に歸してゐた此の港を取戻したことは、キリスト教を通じて歐羅巴の强國が我國に差伸べようとした侵掠の手を拂ひ除けるためであつた。秀吉は商船の渡來は決して禁止しなかつたが、キリスト教の布教と密接に結びついてゐたポルトガル人の貿易は、その後ち少からず打擊を蒙ることとなつた。

秀吉のキリスト教禁止

ポルトガル人の日本貿易

ポルトガル人の日本貿易は日本と支那との間の中繼貿易を主とするもので、支那の黃金や生絲や絹織物などが其の主な積荷であつたが、同時にインドや歐羅巴方面の商品も齎らされた。日本からは主に銀を積んで支那に送るのである。ポルトガルの商船は年々澳門から來航して長崎その他の港で其處に集つて來る京都や堺などの商人と交易を行ひ、歸航の途につくのが常であつた。是等の商船と聯絡を保ちながら布教に盡くしてゐた耶蘇會の宣教師は、長崎や京都や豐後の府内などを始めとして國内各地に住院や分駐所を設けて布教の根據地としてゐたが、ポルトガル商人の商館や代理店はどこにも設けられなかつた。これは十七世紀の初めに日本貿易に參加するやうになつたオランダやイギリスの場合と異つてゐる點である。

奴隷貿買

尙ほその頃ポルトガル船によつて日本人が奴隷として海外に送り出されてゐた事實をこゝに附け加へて置かう。庶民が貧窮の結果、その子女を賣る場合もあつた。掠奪され誘拐されたものもあり、戰爭によつて捕へた捕虜をこれに充てたこともある。ポルトガル船は奴隷として是等の人々を買ひ求め、これを船載して、各地方の植民地に運んだのである。中には遠くポルトガル本國にまで送られ、その地で勞役に服したものもあつたといふ。

秀吉はキリスト教の布教を禁止した時、耶蘇會に對してポルトガル人が日本人を奴隷として國外に運び出すことを難詰した。耶蘇會では早くから此のことを禁じてゐたにも拘らず、盛んに行はれてゐたのである。

スペイン人の渡來

フィリッピン諸島にあつたスペイン人が始めて我が國に來航したのは天正十二年（西曆一五八四年）であつた。この年マニラから澳門に向つた商船が途中で針路を誤つて泉州の沿海に出で、丁度ポルトガル船のマカオから長崎に向つて航行するものに遇つて、共に日本に來航した。同船はポルトガル船が入港を避けてゐた平戸に入港し、領主松浦隆信の款待を受けた。この後隆信は屢々商船をマニラに派し、また其の地の商船を招かうとしてフィリッピン諸島長官に好を通じて之れを求めたのである。或る時その使者は長官に對して、若しスペイン國王がボルネオ、モルッカ諸島、邏羅または支那などを討つ意志があるならば、松浦隆信は其の友人小西行長と共に部下の兵士を派遣して之を援ける用意があることを告げたといふ。

サン・フェリペ號事件

文祿元年（西曆一五九二年）に豐臣秀吉は原田孫七郎を使者としてマニラに派遣し、諸島長官に降伏を勸告した。その後長官の使者として、友好を求める書面を携へて來朝したフランシスコ會の宣教師ペドロ・バプチスタは秀吉に謁して後、その許可を得て京都に留まり布教に從つてゐたが、慶長元年（西曆一五九六年）に起つたサン・フェリペ號事件によつてスペインとの關係は俄然惡化した。サン・フェリペ號は一千噸の帆船でフィリッピンからメキシコに向ふ途中、暴風雨に遇ひ、土佐の浦戸に入港したが、この時乘組員が人々を威嚇する目的から、世界地圖を擴げて、

スペイン國王の領土が廣大であることを誇つた。その多くの國々は如何にしてスペインの版圖に入つたのであらうか。この質問に對して彼はスペインは先づ土地を征服する前に宣教師を派遣し、人民をキリスト教に歸依させ、その大半が教徒となるに及んで彼等を煽動して叛亂を起させ、之に應じて軍隊を派遣して其の土地を占領するのであると答へたといふ。この話が秀吉に報告されると、秀吉はスペイン人の行動を疑ひ、やがて宣教師ペドロ・バプチスタ等を捕へ、日本人信徒と共に死刑に處した。この事件は耶蘇會の宣教師がフランシスコ會の日本進出を阻み、これを陷れようとした策動が功を奏したものであるが、マニラのスペイン人が日本貿易に進出することを惧れた澳門のポルトガル人が其の背後にあつたことも考へられる。その後呂宋に兵を送つて之を征服しようとする計畫もあつたが、實行に移されない中に秀吉は薨じてしまつた。

(ロ)　オランダ、イギリスの日本貿易

オランダの過出

ポルトガル人が凡そ半世紀の間、殆んど其の莫大な利益を獨占して來た日本貿易に新らしい競爭者が割りこんで來た。慶長五年（西曆一六〇〇年）オランダ船リーフデ號が漂著したのである。それは丁度關ケ原合戰のあつた年で、德川家康は大坂にあつて此の船が豐後に漂著したことを知ると、これを堺に廻航させ又その船に乘組んでゐたイギリス人ウイリアム・アダムスを召して來航の顚末を訊ねた。この船は一五九八年（慶長三年）にオランダのテクセル港を出發した五隻から成る東洋遠征船隊の中の一隻であつて、イギリス海岸から西に進み、マジェラン海峽を經由して翌年太平洋に入り、暴風雨の爲めに船隊は分散したが、リーフデ號はチリ海岸から日本に向ふことゝなつた。而して

リーフデ號

難航を重ねて豐後に漂著した時には、船員は疲勞と飢餓との爲に、歩行に堪へるものは僅か六人に過ぎなかつたといふ。當初ポルトガル人等は此の强力な商敵が日本に進出して、これまで彼等が獨占してゐた貿易の利益を侵し、その地位を奪ふことをひたすら惧れたので、彼等を海賊の仲間であると誹謗し之を退けることに努めた。其の危惧は程なく現實となつて彼等の前に現れた。ウイリアム・アダムスが德川家康に寵用されることゝなつたのである。

三浦按針

ウイリアム・アダムスはイギリスのケント州ギリンガムといふ小さな町に生れ、少年時代にはロンドン附近の造船工場に徒弟として働らき、その後イギリス艦隊の航海長または艦長として勤務し、一五八八年スペインの無敵艦隊がイギリス本土に迫つた時にはフランシス・ドレークの指揮する艦隊に一艦長として、スペインの海上權力を潰滅し去つた歷史的壯擧に加り、次いでオランダ人に傭はれて東洋への航途についた。アダムスが乘組んだリーフデ號が太平洋の波濤に飜弄されて漸く豐後の沿岸に漂著した時、彼の前には新らしい運命が開けてゐた。この時彼は三十六歲であつた。家康はアダムスを寵用して側近に侍らせた。彼は外交顧問となつて、歐羅巴諸國との間の外交事務に參與し、また歐羅巴の情勢について色々と家康に教へたのである。而して江戸に屋敷を賜はり、また三浦半島の逸見（現在横須賀市の一部）に領地を與へられた。アダムスは水先案内であつたから、按針の名で呼ばれ、三浦按針と稱した。彼の江戸の屋敷は日本橋附近にあつて、近年まで其の附近には按針町の名が殘つてゐた。尙ほアダムスと一緒にリーフデ號で漂著したオランダ人ヤン・ヨーステンも江戸に屋敷を與へられてゐたが、その地は八重洲河岸の名で呼ばれてゐた。

アダムスは家康の厚い信任を受けて、單に外交事務に關係しただけではなく、歐羅巴の進んだ科學知識を傳へるこ

とにも大に力を盡した。彼は數學（幾何學を含む）の知識を家康に授け、又その命を承けて砲術を幕臣に教へたこともある。更に少年時代に造船所で得た技術や、多年航海に從事して蓄へた經驗を傾けて、そのころ頓に高まつてゐた海外發展の氣運に貢獻したところも少なくない。家康は彼に命じて西洋型の船を二隻建造させた。一隻は八十噸、他は百二十噸のものであつた。アダムスは其の建造に當つて伊豆伊東の河口を利用して船渠に代へ、巧みに進水させたといふ。彼は此の船に乘つて近海の航海に從ひ、また關東一帶の沿岸測量を行つたのである。その百二十噸の船は後に幕府からフィリッピン諸島長官ドン・ロドリゴ・デ・ヴィベロに提供され、太平洋を越えてメキシコのアカプルコ間の航海に用ひてゐたといふから、その構造は頗る優秀なものであつたに相違ない。

徳川家康の外國貿易奬勵

尚ほイギリス人が東洋に達する新らしい商路を北方に開かうとして長い間所謂北西航路の探檢に從つてゐたことは前に述べた通りであるが、アダムスは其の頃わが國にもまだ十分に知られてゐなかつた北太平洋方面の探檢を志し、この方面から歐羅巴に達する北西航路を開拓しようと計畫したことがある。家康は此の企圖に少からず期待をかけ、出來るだけの援助を與へる意向を示してゐた。彼はアダムスの努力によつて北西航路が發見されてイギリスとの間に直接交通の開けることを大いに希望してゐたけれども、その計畫は終に實現しなかつた。

家康は幕府の基礎を築く必要から專ら海外貿易に意を注いだ。支那との貿易を開かうとして國交の回復を計つたことや、朱印船の制度を設けて盛んに海外渡航を奬勵したことは一にこの目的に出たものである。歐羅巴諸國との關係も此の頃から極めて複雜となつた。舊敎國であるスペインとポルトガル、新敎國であるオランダとイギリス、この經

メキシコとの關係

濟的にも亦た宗敎の上からも互に相容れない國々が、日本貿易の利益をめぐつて爭ふことゝなつたからである。この頃ポルトガルは以前の通り、澳門の根據地から年々長崎に商船を派遣して貿易を營んでゐた。家康はフィリッピン諸島長官に親書を贈つて友好を結んだので、スペイン船も年々相模の浦賀に寄航することゝなつた。家康は此のフィリッピン諸島長官の斡旋によつてメキシコとの貿易を開かうと計畫した。メキシコを通じて歐羅巴の商品を獲得しようとしたのであるが、マニラの日本貿易が盛んになるに從ひ、日本とメキシコとの間に直接商路の開けることは却つてフィリッピンの利益を害するものとして、マニラの官民が之を好まなかつたので、家康の希望は容易に達せられなかつた。慶長十四年（西曆一六〇九年）マニラからアカプルコに向け歸國の途中、上總の海岸で遭難した前フィリッピン諸島長官ドン・ロドリゴ・デ・ヴィベロを駿府に招き、己の希望を語り彼れの盡力を求めた。この時家康がヴィベロをアカプルコまで送り屆けた船は、曩にウイリアム・アダムスが命を受け建造したイギリス型の船であつた。この船には京都の商人田中勝助等が日本商品を携へて便乘してゐた。彼はメキシコに渡つて其の地の經濟事情を調査して歸つた。丁度この頃メキシコでは北太平洋上、日本近海にあると信じられてゐた金島・銀島の探檢の爲に船隊を派遣しようとしてゐた時であつた。その船隊の司令官セバスチアン・ビスカイノは總督の命をうけて、ヴィベロに對する好意を感謝する爲め浦賀に來航した。田中勝助等は此の船に便乘して歸國したのである。而して探檢船隊は幕府の許可を得て、本州の東北部海上を探檢し、またスペイン船の寄港に適する港灣を調査する爲に、東北地方の太平洋岸一帶の測量を行つた。斯くて遠く太平洋を越えてメキシコとの間に通商關係が結ばれようとしてゐた頃、伊達政宗は家臣支倉常長をローマ法王の許に遣つた。それは一つには此の通商の開始に就いて盡力を求める爲めであつた。支倉の一

伊達政宗の羅馬遣使

行はフランシスコ派の宣教師ルイス・ソテロと共に慶長十八年（西曆一六一三年）に仙臺に近い月ノ浦を出發して太平洋を横斷し、メキシコのアカプルコに到著した。次いで其の東海岸からスペイン艦隊に便乘してスペインに著き、元和元年（一六一五年）マドリッドでスペイン國王フェリッペ三世に謁見し、また貿易開始のことに就いてスペイン政府と交涉した。その後バルセロナからゼノアに渡り、ローマに入り、ローマ法王パウロ五世に謁見し、政宗の親書を捧呈して、宣教師派遣を請ひ、貿易開始の斡旋を求めたのである。

スペイン政府はこれよりさき、ドン・ロドリゴ・デ・ヴィベロと同じ船で、アカプルコに渡つた宣教師が、マドリッドに齎らした德川家康の書翰によつて、その通商の要求を知り、これに應じて毎年商船一隻をアカプルコから浦賀に渡航することに定めたけれども、之れはマニラの官民の猛烈な反對があり、又その頃から日本でキリスト教が禁止されるやうになつた事情もあつて、終に實現するに至らなかつた。支倉の一行も其の使命を果すことが出來ず、支倉は其の後一旦フィリッピンに渡り、元和六年（西曆一六二〇年）に歸國したが、このとき既に國內ではキリスト教に對する迫害が盛んになつてゐた。

キリスト教の禁止

德川家康が初めキリスト教の布教を容認したのは、スペインやポルトガルの商船を招いて、外國貿易を盛んにする必要があつたからであるが、新敎國であるイギリスとオランダとの勢力が漸く我國に及ぶやうになつて、是等の舊敎國の侵掠政策の本質が次第に曝露され、また强調されるやうになつた。アメリカ大陸や太平洋上の島々がキリスト敎の布敎を前衛として次第に侵掠され、植民地化された事情が詳かに報ぜられた爲め、幕府はキリスト敎の蔓延を警戒し、慶長十七年（西曆一六一二年）になつて、キリスト敎禁止を斷行するに至つたのである。それは又一つには其の

オランダの日本通商

ところ大坂に勢力を占めてゐた豐臣方に對する政策に出たものであつた。

オランダとイギリスとの日本貿易は舊敎國と異り、キリスト敎とは全く關係ないものであつた。オランダとの通商が初めて開かれたのは慶長十四年（西曆一六〇九年）のことである。その前年本國ヘーグではスペインの講和使節を迎へて、オランダ政府との間に十二箇年の休戰條約を締結する交涉が行はれてゐた。而して東洋貿易に關しては現狀維持を條件とするものであつたから、東印度會社では其の條約が締結されないうちに、廣く東洋諸國の君主と條約を結び、出來るだけ通商區域を擴張して置く必要があつた。その命をうけて來航したオランダ船は肥前平戸に到著し、其の商人長等は領主松浦隆信の斡旋で駿府に赴き家康に謁見して通航許可の朱印狀を受け、この年直ぐに平戸に商館が設けられるに至つた。その商館は寛永十八年（西曆一六四一年）長崎出島に移轉を命ぜられるまで凡そ三十年間つゞいたのである。

イギリスの日本通商

イギリスの商館が平戸に設立されたのはそれから凡そ四年後のことで、東印度會社から派遣された司令官ジ・ン・セーリスがクローヴ號で慶長十八年（西曆一六一三年）初めて平戸に來航し、國王ジェームス一世の親書を家康に捧呈し、幕府から特に有利な條件を附した通商許可の朱印狀を與へられたのである。家康の側近にあつたイギリス人ウイリアム・アダムスの斡旋によるところが大きかつたことはいふ迄もない。平戸に商館が設立されるや、アダムスは其の館員となつたが、元和六年（西曆一六二〇年）その地に歿するまで東印度會社の爲めに盡くしたのである。

平戸の地位

幕府はオランダに對しても、また新たに交易を開くやうになつたイギリスに對しても、直接關東地方の港に來航することを希望し、その商館を江戸に近い浦賀に置くやう勸告したが、兩國とも之に從はず、平戸に商館を置いた。こ

れは平戸が支那貿易の要津に當つてゐた爲めである。支那貿易を開始することは彼等の念願としてゐたところで、其のための足場として平戸を最も有利な寄港地として選んだのである。是等商館の貿易は主に中繼貿易で、支那の生絲や絹織物、暹羅や東埔寨、交趾支那方面で得られる皮革類や染料用の蘇枋木その他香料や藥種などを日本に齎らし、之を日本の銀に換へることであつた。また歐羅巴の毛織物や印度の綿織物なども多く船載されてゐた。然かし支那はイギリス、オランダ兩國に對しては通商を許さなかつたので、彼等は支那の商品を得るために、南洋の各地で支那商船から之れを求め、またオランダの强力な船隊は屢々外洋でポルトガル船や、支那ジャンク船を襲つて、その積荷を掠奪したのである。

平戸商館の貿易

此の兩國の平戸商館は其の商品を賣捌くために商館員を全國各地に派遣し、また京都・堺・大坂・江戸などに代理店を設けてゐたが、其の國內通商は內地の商人等の利益を阻むことが多かつたので、その反對を受けて元和二年（西曆一六一六年）に禁止され、長崎・平戸の二港だけが通商地に指定された。その後はイギリス商館は次第にオランダ商館のために壓迫され、特にオランダが元和八年（西曆一六二二年）澎湖島に支那貿易の根據地を得てからは到底之と對抗することが出來ず、終に其の翌年イギリス商館は解散することゝなり、イギリスは日本の根據地を失ふ結果となつた。

英蘭聯合防禦船隊

之より先き、元和六年（西曆一六二〇年）にイギリス、オランダ兩國の間に防禦同盟が結ばれ、兩國の東印度會社はそれ〳〵十隻の船を出して防禦船隊を編成し、西太平洋上の覇權を制して、スペイン、ポルトガルの根據地を襲ひ、また其の商船を脅かした。平戸はバタビアと共に其の根據地となつた。その最初の聯合船隊が平戸に來航した時、途中臺灣海峽でマニラから日本に向ふ一隻のポルトガル船を拿捕した。その船長日本人平山常陳は日本に到着すると、直ぐに幕府に對して其の不法を訴へ出たが、オランダ人等は却つて其の船に便乘して日本潛入を企てたマニラの宣教師を捕へて幕府に引渡し、且マニラ、澳門貿易が繼續する間は、結局宣教師の渡來の絶えない事を巧妙に說いてゐたが、殆んど其の效果はなく、宣教師の密航を企てるものは跡を絶たなかつた。幕府は元和九年（西曆一六二三年）に來朝したマニラ使節を退け、遂に布教禁止を理由として、その通商を禁ずる旨を傳へた。玆にマニラとの通商關係は斷絶したのである。

マニラ貿易の禁止

ポルトガル商船は此の後も年々長崎に渡來し、ポルトガル人、スペイン人の在留するものも少なくなかつた。その後幕府は鎖國の方針を定めたが、寛永十三年（西曆一六三六年）に至つて、遂にポルトガル人等が長崎で日本人と雜居することを禁止し、出島に之れを移し、嚴重な監視を附して少數のポルトガル人だけに貿易を許可し、その他のものは悉く國外に放逐してしまつた。その翌年に島原の亂が勃發した。幕府は、このキリスト敎徒の叛亂の背後にポルトガル人の援助のあることを疑つて、ポルトガル人の通航を禁止する決意を固めた。而して寛永十六年（西曆一六三九年）に來航したポルトガル船に對して、この後澳門との往來を禁止する旨を傳へた。更に其の翌年には澳門から派遣された使節等を死刑に處し、また其の船を燒き捨てゝしまひ、澳門との關係も玆に全く絶えることゝなつた。斯くしてオランダは日本貿易を完全に其の手中に收めることに成功した。

ポルトガル貿易禁止

オランダ人は、啻に競爭者として他の歐羅巴人等を日本の市場から驅逐しようと計つただけではなく、日本商人も

オランダ日本貿易を獨占す

其のために屢々壓迫をうけた。彼等は最も強力な商敵であつたからである。臺灣の問題も其の一つの現れである。已にオランダが寛永元年（西曆一六二四年）臺灣に支那貿易の根據地を得てからは、その地方に渡航する日本商人との間に利害の衝突が起つた。その結果臺灣長官ピーテル・ノイツの不法行爲に對して、濱田彌兵衞が之れを捕へ、懲めた事件があつた。濱田が歸國の後幕府に訴へ出た爲、平戸商館は寛永五年（西曆一六二八年）に一旦貿易を禁止されたが、それも長くはつゞかず蘭領印度總督が事件の當事者ノイツを幕府の手に引渡したので、寛永九年その事件は解決した。然かもその後、忽ちにして海外渡航の禁止が合せられ、日本商人の海外貿易は全く絶えるに至つたのである。

呂宋遠征の計畫

オランダの勢力が西太平洋を壓してゐた此のころ、幕府はキリスト教の禁令を徹底させるために、このオランダの強力な海上權力を利用して海外遠征を計つたことがあつた。幕府が宣教師の渡來を根絶する目的から其の根據地である呂宋島を征服する計畫を樹てたのは、島原の亂の直前であつた。この呂宋征服の意圖は夙に豐臣秀吉の時代に萠してゐたが、秀吉の薨去によつて行はれず、その後寛永七年には島原の城主松倉重政が自力で其の征略を企て、家臣を送つて其の地の狀況を視察させたが、それも實行されなかつた。三度こゝに其の計畫が熟したのである。幕府は其の軍隊輸送の爲にオランダ商館に商船の援助を求めた。オランダ側では此の遠征軍を勝利に導かうとして、四十五隻の戰艦を送つて戰鬪に參加させる心算でゐた。然かし島原の亂が勃發したので幕府は其の計畫を放棄してしまつた。

島原の亂とオランダ人

此の島原の亂に當つても、オランダ人は幕府軍の爲に少からず援助を與へた。平戸商館は叛徒の立て籠つた原城を攻撃するため、幕府軍に大砲・彈藥・射手を供給し、また松平伊豆守信綱の命によつて、商館長は自から商船に乘つて原城下に赴き、海上から之れを砲撃した。然かし其の砲撃は效果が少なく、また叛徒の側から國內の戰爭に外國人の援助を求めたことを國辱であるとして、矢文によつて攻圍軍を難詰したので、幕府はオランダ船に平戸歸航を命じた。

オランダ人を出島に移す

オランダ人は幕府が惧れてゐたキリスト教の布教に全く關係なく、また幕府のために盡くすところが少なくなかつたにも拘らず、幕府は其の後オランダの貿易に對して次第に壓迫を加へたが、ポルトガル人の通商を禁止してから後は、その直轄領である長崎が衰微することを惧れ、これを救ふために寛永十八年（西曆一六四一年）遂に其の商館を平戸から長崎に移轉させ、嘗つてポルトガル人が交易を營んだ出島に之れを置き、嚴重な監視の下に貿易を營むことを許した。この出島の商館は其の後幕末までオランダの日本貿易根據地として續き、鎖國後の日本は、たゞ年々長崎に來航するオランダ船を通じて世界情勢を知ることが出來たのである。

二、海外發展の氣運

（イ）戰國諸大名の水軍と造船

瀨戶內海の水軍

戰國の諸大名は互に海上の覇權を爭ふため水軍を整備し、また優秀な兵船を盛んに建造したので、水軍の戰術も造船技術と共に大いに進歩を示した。

瀨戶內海は早くから水運が發達した地方であるが、軍需輸送のために常に水運が利用された。足利尊氏が九州から

東上した際にも、長門豐浦の串崎の海賊衆を主力とした七千隻から成る水軍を動員したといふ。

戰國時代に入つて沿海の諸大名は、其の海上權力を爭つて其の覇權を握る爲に、この內海の島々に勢力を有する海賊衆と結び、その勢力を利用することが盛んに行はれた。その中でも能島・來島・因島にあつた村上氏と、能美島にあつた乃美氏とは最も有力なものであつて、殊に村上氏は伊豫の河野氏等の舊族とも關係があり、瀨戸內海の制海權を其の手中に收めてゐた。毛利元就は早くから村上氏と親しみ、また緣を結んで、之を其の配下に置いてゐたので、完全に內海の制海權を握ることが出來た。また乃美氏も小早川隆景の一族として、隆景の下にあつて毛利氏のために水軍として働いてゐた。彼の嚴島の戰によつて毛利氏が完全に中國の覇者となることが出來たのは、全く此の村上氏等の水軍の力によるものであつた。天正四年にこの水軍は攝津石山城の本願寺を攻擊に向つた織田信長の水軍と木津川沖で闘つた。そのとき織田の船隊は大型兵船十隻と數百隻の兵船とから成つてゐたが、毛利氏の水軍は三百隻の兵船を以て之を包圍し、火箭を放つて之を惱まし、大型兵船二隻を打取り、全船隊を潰走させたといふことである。その後村上水軍は、豐臣秀吉の中國征伐の際にも屢々その軍を惱まし、長く毛利氏の配下として忠勤を盡してゐた。

伊勢灣の水軍

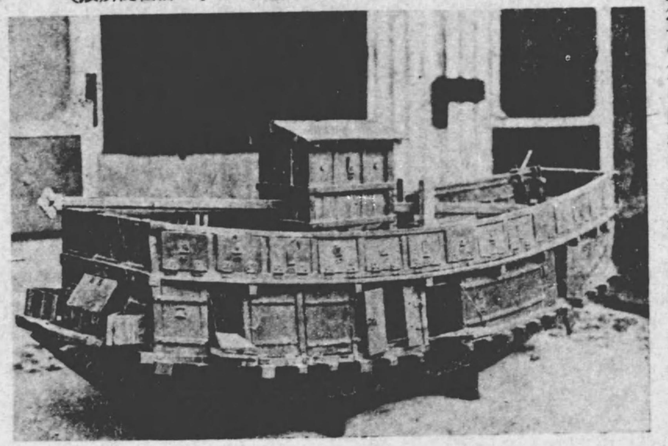
伊勢灣も東國との海上交通上に重要な地位を占め、大湊は其の要津であつた。戰國時代には北畠氏が此の港灣を支配し、その部下に强力な海賊衆を水軍として加へ、この方面の制海權を收めてゐたので北畠氏の勢力は堅固であつた。伊勢が織田信長の侵略を受けて、北畠氏は勢力を失つたが、織田方に加つた九鬼嘉隆が北畠氏に代つて海上勢力を占めるに至つた。九鬼は紀伊の海賊衆の出であつて、信長が天正二年に伊勢長島の一向一揆を討伐に向つた時、九鬼は伊勢灣の海賊衆を率ゐて海上から攻擊し、遂に之を陷れることが出來たのである。天正四年には攝津木津川沖で

關東の水軍

駿河灣の水軍

兵船の構造

小早川隆景朝鮮役に使用の軍船模型（八王子・信松院所藏）



村上水軍の爲に敗れたが、後に大砲を積んだ七隻の大型兵船を伊勢灣で建造して再び大坂灣に進み、天正六年には六百隻から成る村上水軍を擊破することに成功した。

關東方面では小田原に根據を置いた北條氏が强力な水軍を持つてゐた。三浦半島が其の根據地で、この地で兵船が盛んに建造され、また水夫の育成事業も行はれてゐた。

駿河地方を占有してゐた武田信玄も駿河灣の海賊衆の勢力を利用し、海軍を編成してゐた。武田勝頼が北條氏政と戰を交へた時に、武田方の海賊衆は伊豆の沿岸に侵入し、また北條方の兵船を奪ひ取つた程であつたが、武田氏が滅亡して後は其の强力な水軍は總て德川家康の手に歸し、北條氏の水軍も後に德川氏の支配するところとなり、三浦半島は長く江戶幕府の水軍の根據地となつた。

戰國諸大名は、何れも斯樣に强力な水軍を養成し、海上の制覇を心懸け、海戰に備へて優秀な兵船を建造することに意を注いでゐたから、造船技術は此の時代に著しく進歩し、また兵船としての裝備や防禦にも、優れた方法が採入れられてゐた。

織田信長が九鬼嘉隆に命じて伊勢灣で建造させた七隻の兵船は横七間、縦十二、三間の大型のもので、鐵板を張つて裝甲を施し、各大砲三門と數門の精巧な長銃とを備へてゐた。また文祿の役に豐臣秀吉が自身朝鮮に渡航しようと計畫して、毛利氏に命じ建造させた日本丸と呼ぶ大船は、十八疊敷の間が三間あり、また五千石の兵糧を積むことが出來たといふ。尚ほ此ころ毛利氏の下で建造され、朝鮮役に用ひられた小早川隆景の兵船の模型が現存してゐるがそれによれば、舷側を竹楯や板楯で圍みて銃丸や矢を防ぎ、その楯は之を倒せば螺番で外に開いて、之を足場として敵船に躍りこむことが出來る。また中央の櫓に設けられた井樓の周圍を始め、船の首尾・兩側などには敵船を狙撃することが出來るやうに銃眼が穿たれて居り、兵船としては殆んど完備したものである。

朝鮮役は我が造船技術を大いに發達させ、其の後國民の海外發展の氣運がいよ〳〵高まるに及び、俨秀な大船が盛んに建造されるに至つたのである。朱印船に關しては暫らく措き、兵船について其の最も發達した形式のものは、德川氏がその水軍を支配してゐた向井將監忠勝に命じ、寛永十年から二年を費して、相模の三浦三崎で建造させた大型兵船安宅丸である。龍頭鷁首の船首飾を裝ひ、銅板で裝甲を施した長さ三十尋の大船で、三重の櫓を設けた城郭のやうに堂々とした戰艦であつた。櫓は二百挺を備へ、一挺ごとに水手が二人つき、總て四百人の水手が法螺や太鼓の音に應じて進退したといふことである。

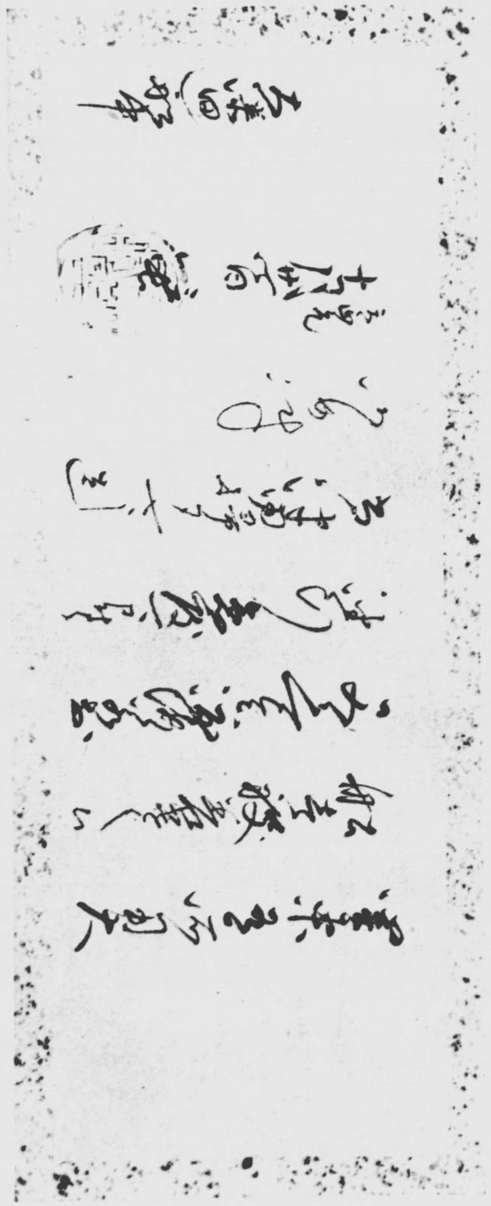
安宅丸

（ロ）豐臣秀吉の雄圖、

室町幕府が明に對して屬國として交を結び、勘合貿易を行つた爲め、一旦跡を絶つたかに見えた倭寇は、その後、

倭寇

（蘇所館軍海）狀文注船軍の長信田織



天正元　十月中四日　信長

仍如件

大湊船中

尚津田藏部可申出候也

十月中四日

大湊船中

油斷急度可申付候

又々可令渡海候若於

船壹艘差遣之候

關東有所用大

日明貿易が全く停止されるに及んで、再び支那沿岸を劫掠するやうになつた。江北・江南から福建・廣東にわたる一帯の海岸は連年その侵略に惱まされ、殊に支那沿海の海賊や流民の群が之れに合流し、大擧して進むところ、嚴重な明軍の防衛陣も、到底これを喰ひ止めることは出來なかつた。常に八幡大菩薩の旗を飜へして迫つたので、バハン船の名で呼ばれてゐる。彼等は戰略に富み、島々の間に隱れて、沿岸守備の虛を衝いて之を襲ふのが常であつて、裸體に日本刀を帶びて進む倭寇の姿は恐怖の的となり、倭寇襲來を聞けば、泣く子も聲を潛めたといふことである。その行動は極めて慓悍に、また敏速であつて、その進むに當つては弦を放れた矢にも似て、また退く時は潮の引くやうであつた。弘治元年（明の嘉靖三十四年、西曆一五五五年）杭州灣に上陸した倭寇の群などは、一日三十里の强行軍を行つて蕪湖に出て、更に南京に逼り、城門を死守する官兵に多大の損害を與へたと傳へてゐる。この强力な倭寇に備へる爲、明朝では沿岸各地に城塞を築いてゐたが、海上にもまた嚴重な防備が施こされ、三隊からなる海軍が設けられてゐたのである。第一隊は堅牢な大船を集めた遠洋船隊、第二隊は沿海警備の船隊、第三隊は河川警備の船隊で、これ等の船隊には大砲や火弩を備へ、或は沿岸の島々を巡察し、又は江灣の警備に當つた。倭寇の猖獗は次第に防衛陣を整備させ、その結果は明の嘉靖末年戚繼光の掃蕩となり、遂に倭寇の群は擊破されて、彼等は支那沿海から其の姿を消すに至つた。其の後倭寇は鋒先を轉じて南海地方に現れるやうになり、臺灣や呂宋島安南方面が盛んに倭寇の劫掠を受けることゝなつた。殊に呂宋島は殆んど年々倭寇に襲はれ、カマヤン地方では倭寇が海岸に城塞を築いて根據地としたことさへあつた。丁度この頃からフィリッピン諸島に勢力を扶植するやうになつたスペイン人は倭寇の襲來に備へて沿岸に城塞を設け、また船隊を整へたのである。一五七四年（天正二年）に六十二隻の武裝したジャン

船を率ゐてマニラを襲つた支那海賊リマホンの部將の中には、日本人シオコといふものがあつて、その手兵を率ゐて城内に攻入り、大いにスペイン兵を惱ましたが遂に陣歿し、リマホンもまた敗れて退いた。

豐臣秀吉の朝鮮出兵

豐臣秀吉によつて全國統一の事業が完成されるに及んで、わが沿海に對立してゐた豪族の水軍も、漸く統制の下に置かれ、從つて、海外への侵寇もまた一切禁止されることゝなつた。所謂倭寇は、結局積極的な私貿易に外ならないものであつたが、こゝに公の規律の下に、この私貿易が統制されることゝなつたから自然消滅するに至つた。而して後に述べる朱印船の制度が設けられることゝなつたのである。

豐臣秀吉は國内統一の事業を完成して後、海外經略を志し、朝鮮・琉球・臺灣・呂宋などに使者を派遣して服屬を求めた。秀吉の理想は東洋諸國を經略し、之を統御の下に置き、皇化を普くアジア全土に及ぼさうとするにあつた。その征明の計畫は、已に九州征伐に先立つて描かれてゐたのである。天正十三年（西曆一五八五年）大坂城で秀吉に謁したポルトガル宣教師ガスパル・コエリョは、秀吉の口から此の計畫を示された。秀吉はコエリョに向つて、國内を統一した曉には大陸に遠征を企てる心算であると告げ、その爲めにポルトガル人に二隻の大型兵船を建造するやう求めたといふことである。

文祿の役

征明の計畫が愈々熟し、朝鮮出兵の議が整ふに及んで、天正十九年秀吉は渡航の準備として、沿海諸國に命令を發して大小の船を造らせ、東は常陸から南海を經て四國・九州に至る太平洋岸の國々、北は秋田から中國に至る國々にそれ〴〵造船を課し、また水夫を提出させ、その船を翌文祿元年の春に加藤清正・小西行長等の諸將の率ゐる軍勢は大擧して半島に渡り、敏速果敢な行動によつて忽ち國都京城を陷れた。この華々しい戰果に較べて、藤堂高虎・加藤嘉明等の率ゐる水軍の狀勢は甚だ不利であつた。その軍船は優秀で、且つ乘組の士卒も紀州や瀨戸内海の海賊衆として多年海戰に長けた軍勢であつたにも拘らず、陸軍との協力は緊密に行はれず、また諸將間の不和も甚しく、更に半島の制海權を固守する朝鮮水軍の名將李舜臣の作戰は頗る周到なものであつたから、我が水軍は數度これと戰つて敗れ、終に半島の西岸に進出することが出來なかつたのである。半島の制海權を我が手中に收めるか否かは我が軍の戰果に重大な影響があつて、明も亦これを最も惧れてゐたといふ。その制海權を收めることによつて、我が軍は容易に海を越えて、明の國都北京に迫ることが出來るからである。

慶長の役

日明間の和議が敗れて慶長の役が起つた。慶長役の當初わが水軍は陸軍と協力して朝鮮水軍の根據地閑山島を攻撃し、これを陷れ、その水軍を殆んど全滅させて一旦半島南部の制海權を收め、陸軍の行動を有利に導いた。この時李舜臣は一時退けられてゐたが、やがて明の援軍が次第に增派され、江南地方の强力な水軍が此の方面に現れた頃、再び起用された。この聯合船隊は、秀吉の薨去の爲に戰爭を停止して、半島から撤退しようとする我が軍を海上に遮らうと試みた。島津義弘の率ゐる水軍はこれと順天附近の露梁で會戰し、苦戰の後、之に多くの損害を與へたので、全軍は無事撤退することが出來た。斯くして秀吉の朝鮮出兵は、殆んど得るところなくして終つたが、この壯擧は我が國民の海外雄飛の氣運を大いに促し、その後南方への進出はいよ〳〵活潑となつて來たのである。

三、南方への進出

(イ)朱印船

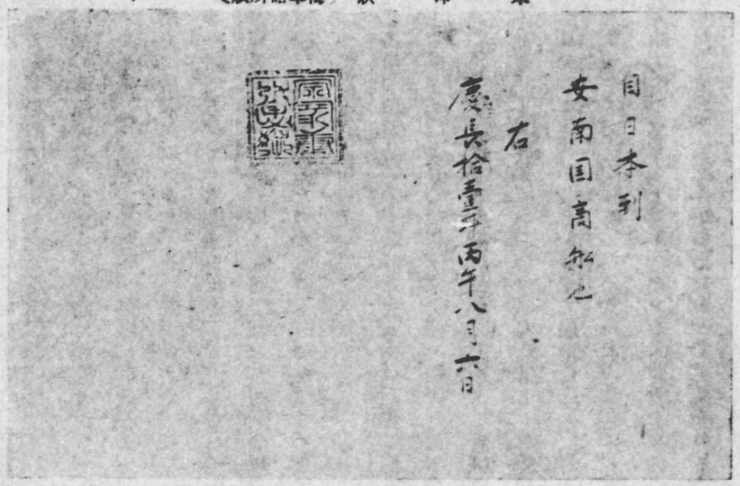
朱印船制度の起原

豐臣秀吉は其の統一事業を完成するに及んで、對外貿易の利益に著目し、それまで盛んに行はれてゐた倭寇の海外進出を抑へ、これを統制し、大いに奬勵した。文祿元年海外渡航許可の朱印狀が初めて長崎・京都・堺の商人等に下附された。この朱印狀の形式はそれまで、國内の港々に自由に出入することを許可するものであつたが、これが轉じて遠く海外に渡航して貿易を營む商船に與へられることゝなつたのである。之が朱印船貿易の起原である。然かし秀吉は斯くして海外貿易を奬勵したにも拘らず、その朱印船の渡航先である南方の國々に對しては、決して國交を修めようとはせず、却つて之を威壓し、その服屬を求めようとしてゐた。其のことは呂宋や臺灣の例に就いて見ることが出來る。故に秀吉によつて發行された朱印狀は、國内でこそ之がなければ海外渡航を許可されないといふ強い効力を持つものであつたが、渡航先の國々で其の威力が行はれるとは限らなかつた。

朱印船の制度

秀吉の事業をついだ德川家康は海外貿易を奬勵し、朱印船の制度を其のまゝ用ひた。而して家康は南方の國々と親しく國交を結ぶことを計り、朱印船の制度を設けたことを其等の國々の主權者に告げ、朱印狀を携へた日本船は保護し、朱印狀を携へないものは、通商を許可しないやう求めたのである。こゝに朱印船の制度が確立した。國内に向つては海外貿易に參加する大商人や大名その他外國人などを幕府の統制の下に保護することゝなり、同時に渡航先の國々に對しては、倭寇の害を除き、平和的な通商を保證するものであつた。その朱印狀の書式は普通渡航先を定め、發行の日付を記し、將軍の朱印を大きく押したものであつて、有效期間は一航海に限られ、歸朝の後には之を返すことゝなつてゐた。其のころ幕府の外交事務に當つてゐた佛僧が朱印狀の發行を掌り、豐光寺承兌・圓光寺元佶・金地院崇傳の三人が次々に其の任に當つたのである。これ等の人々の手で發行された朱印狀の臺帳ともいふべき記錄が、異國御朱印帳・異國渡海御朱印帳などの名で今日なほ京都南禪寺に國寶として傳へられてゐる。また朱印狀の殘つてゐるものも少なくなく、これ等を調査すれば當時朱印船の渡航地や船主を明かにすることが出來る。もつとも南禪寺に傳つてゐる記錄は慶長九年から元和二年まで十三年間に發行された渡航許可朱印狀の臺帳で、その後寬永鎖國までの分は現存してゐないが、この十三年間

朱印狀（海軍館所藏）



に就いても、その間海外に渡つた朱印船の數は凡そ百八十隻に及んでゐる。

朱印船の渡航先

朱印船の渡航先は、臺灣・澎湖島・南支那沿岸・印度支那・マレイ半島方面から、南洋一帶にかけて甚だ廣い範圍に及んでゐる。南支那では漳州・澳門・印度支那方面では暹羅・交趾・東埔寨・安南・パタニ（太泥）・マラッカ、南洋方面では呂宋が最も多く、その他ボルネオ、モルッカ諸島などである。

朱印船貿易家

是等の諸地方に年々朱印船を派遣して貿易を行つた船主は、京都や堺・伊勢・長崎などの大商人が最も多い。島津忠恆・有馬晴信・松浦鎭信・加藤清正など西國の諸大名、長崎奉行や代官なども之れに參加し、更に我が國在留支那人や歐羅巴人で船主となつたものもあつた。ウイリアム・アダムスやヤン・ヨーステンも屢々暹羅、交趾方面に朱印船を送つてゐる。

其ころ朱印船貿易に手を染めた商人達は、皆これによつて莫大な富を蓄へた。京都の角倉了以・茶屋四郎次郎・攝津の末吉孫左衞門・長崎代官末次平藏・長崎の荒木宗太郎・伊勢大湊の角屋七郎兵衞などが最も有名である。

角倉了以

京都の角倉了以は醫者の家に生れ、その父は嵯峨の天龍寺の僧で、足利幕府の遣明使の隨員となつて支那に渡つたことがある。了以は早くから海外貿易に志し、文祿年間に秀吉の朱印狀を得て安南に商船を送つた。其の後家康に仕へ、慶長九年には其の命を承けて大船を建造し、專ら安南貿易を行つた。その子與一も父を援けて通商に當つてゐた。寬永三年に安南に渡航した角倉の朱印船には、書記役として天竺德兵衞が乘組んでゐたといふ。天竺德兵衞は其の後寬永七年にはヤン・ヨーステンの朱印船で暹羅に渡航したが、晩年になつてから其の渡航記を書いて長崎奉行に提出した。之が天竺德兵衞物語であつて、長崎から暹羅に至るまでの航路や暹羅の地理・產物・人情・風俗などを細かく記してある。

天竺德兵衞

茶屋四郎次郎

角倉了以と竝んで京都屈指の富豪となつた茶屋四郎次郎は早くから德川家康に仕へて功勞があつたが、代々德川氏の呉服師として將軍に近侍したものである。すでに文祿の頃から安南貿易に從事し、寬永年代まで五代に亙つて其の利益に浴してゐた。其等の朱印船が交趾ツーランの日本町附近に入港する實況を記した興味深い繪卷物が、名古屋の情妙寺に傳へられてゐる。

末吉孫左衞門

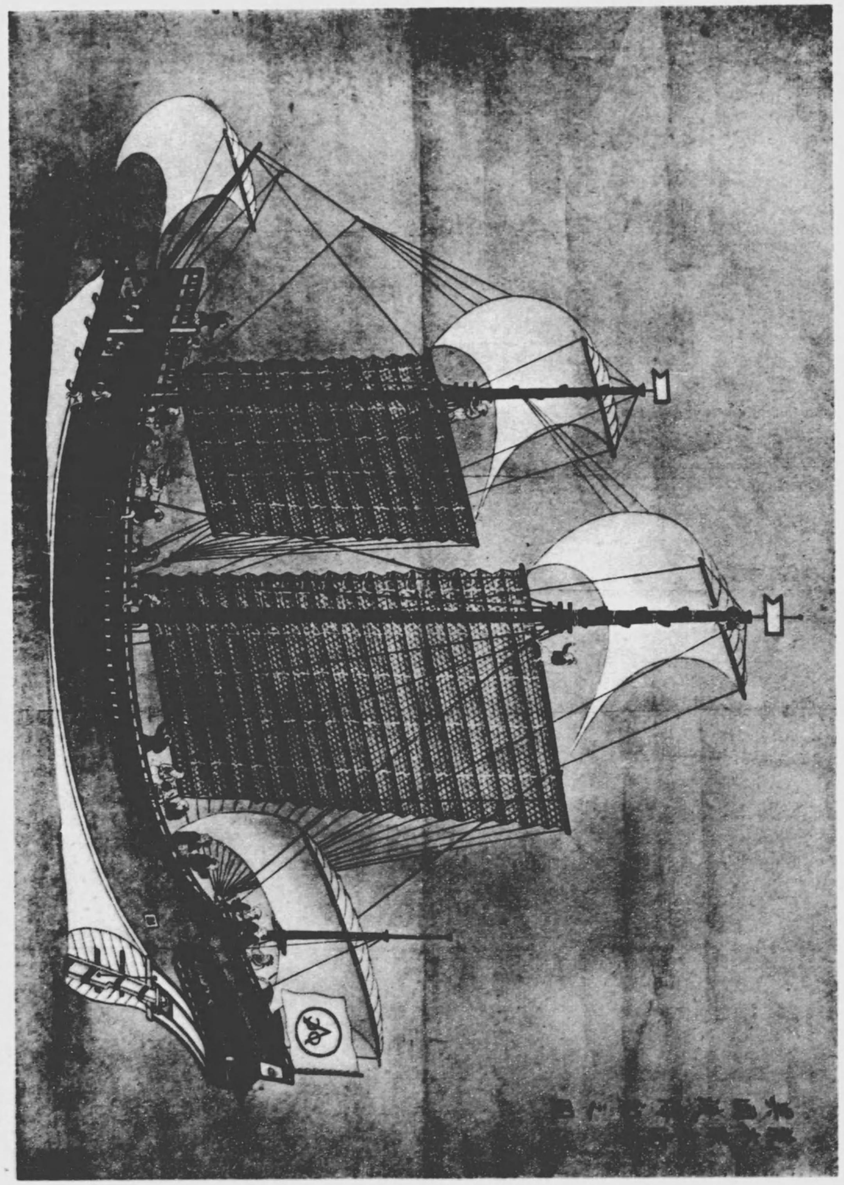
攝津の末吉孫左衞門の父は、早くから東國地方との廻船業を營んで德川家康の好遇を受けてゐた。孫左衞門の時に呂宋・安南・暹羅方面に朱印船を送り、大いに貿易を行つた。末吉船と呼ばれるものが之れである。

末次平藏

長崎代官末次平藏も當時の貿易家として屈指の人物であつたが、その後も盛んに此の方面に朱印船を派して貿易の利を收めた。殊に元和二年長崎代官村山東安をキリスト教を信仰するものとして幕府に訴へ、これを陷れて自ら代官となつてからは、益々勢力を得、貿易の利を蓄へた。彼はまた臺灣との通商にも從つてゐた。臺灣でオランダ人を膺懲した濱田彌兵衞は、末次氏の商船に船頭として乘つてゐたものであつた。平藏の死後その子が後をついだ。島原の亂が勃發した時、幕府は彼に命じて、攻圍軍のために必要な軍需資材である楯板や、繩・綱・筵などの類をすべて調達し運漕させた。その勢力が極めて大きかつたことが察せられる。寬永鎖國の後、その孫の代になつて末次氏の富は其の極に達し、五、六十萬石の大名も到底及ばないと噂された程であつたが、鎖國の禁令を潜つて支那方面に貿易を行つてゐた爲め、延寶四年にそれが發覺して遂に處罰されてしまつた。

荒木宗太郎　長崎の荒木宗太郎も南方に志を伸べた一人である。文祿元年に秀吉の朱印狀を得て海外貿易に手を染め、その後、專ら暹羅・安南地方との通商に從ひ自ら其の地方に渡つて取引を行つた。そのころ交趾地方を領有してゐた安南の王族阮氏は、宗太郎を迎へて其の娘と結婚させた。彼は此の王女を妻として歸國し、長崎に餘世を送つたといふ。彼が南方に往來するに使つた朱印船には、珍らしい徽章を描いた船旗を用ひてゐた。（圖版參照）それはオランダ聯合東印度會社（Vereenigde Nederlandsche Oostindische Compagnie）が徽章として用ひてゐたローマ字のV・O・Cの組合文字を倒にしたもので、彼の朱印船は、當時西太平洋上に覇權を握つてゐたオランダの商船に僞裝する目的から、之を用ひてゐたのである。

角屋七郎兵衛　伊勢大湊の角屋も朱印船貿易家として名高い。この地は古來東國との海上交通の要津として繁榮してゐたところであつたが、角屋七郎兵衛の一族は、安南貿易に從事して莫大な富を蓄へたのである。その祖先は北條・德川兩氏の命に從つて關東筋の廻船を業としてゐたので、德川幕府の好遇を得て、大いに海外貿易に力を盡すことが出來たのである。その上、角屋の商船は家康から與へられた三葵の紋を旗印として、內地沿岸を往來し、各地の港灣に自由に出入することを許されてゐた。この特權は江戸時代を通じて與へられてゐたものである。寛永のころ其の一族は伊勢の本家を中心として、堺・長崎・奥州岩城に各勢力を扶植して互に連絡をとり、家門の繁榮に努力してゐた。その朱印船の渡航先である交趾フェフォの日本町に在住して、其の貿易に從事してゐたものがあつて、鎖國後も長くその地に留まり、貿易を營んでゐたが、寛文年間その日本町に佛寺を建立し、遠く故國長崎の荒木宗太郎の一族の許に書面を送つて、その佛寺に用ひる扁額や梵鐘を調製することを求めたこともある。



（藏所氏男知事務市尊長）　船　印　朱　の　郎　太　宗　木　荒

のもたし書印を[V・O・C]記の社會族印朱ダンラオは旗船。るれさ目注、點るたれ入り取を道航の船朱型巴羅歐は式樣

此の他呂宋から茶壺を多く船載して巨利を博し、後に秀吉の忌諱に觸れて沒落したとつたへられる堺の呂宋助左衞門、或は博多の島井宗室・大賀九郎左衞門なども朱印船貿易家として名高い。

朱印船の貿易

朱印船が南方に渡航して營んだ貿易は、普通わが國に産出する銀や銅・鐵・硫黄・樟腦・食糧品などの商品を是等の地方に賣らし、その地方で得られる支那の生糸・絹織物、または印度方面の綿織物、歐羅巴の毛織物類、南洋各地の土産としては黄金・硝石・鉛・または皮革類、染料用の蘇枋木・香料・藥種の類などを積んで歸國するのである。これ等の船載品は或は衣服の原料として、また軍需用品その他生活の必需品として、いづれも其のころ國内で需要の多い商品であつた。殊に當時國内で武具や武裝に用ひられる爲、皮革類の需要が高まつてゐて、南洋地方の鹿皮が其の質が優秀だつたので、早くから澤山輸入された。臺灣・呂宋・暹羅の三地方からの輸入が最も多く、暹羅では年々日本人の取引する鹿皮は十五萬枚に及んだといふことである。また呂宋では日本向の鹿皮貿易があまりに有利であつた爲め鹿の濫獲が行はれ、その肉を食用に充てゝゐたマニラのスペイン人が鹿の不足することを憂へて政府に日本貿易を停止するやうに陳情したことさへあつた。また日本刀の鞘を裝ふ爲めに缺くことの出來ない鮫皮も南洋地方から船載されたのである。之は印度支那地方の沿海に棲む魚の皮で、我が國の沿海では採れないものであるから、頗る珍重されてゐた。

オランダやイギリスが日本貿易に參加して、直ぐに暹羅・交趾方面との仲介貿易に著手したのは、わが朱印船が盛んに是等の地方と往來し、生糸や皮革や染料類の輸入に、莫大な利益を收めてゐることを知つた爲であつた。

次に朱印船の構造や其の航海技術などについて見るのに、わが朱印船は其の船體の構造からいつても、また航海技

歐羅巴の航海技術の採取

術から言つても、多年遠洋航海で鍛へられ、また海上戰鬪力を充分に蓄へた歐羅巴諸國の商船に比べては遙かに劣るものであつた。彼等から造船技術を學び、また天文・氣象その他航海に關する進んだ文化を採入れたことは著しいものであつた。長崎の池田興右衞門入道好運が、ポルトガルの航海者マヌエル・ゴンサロから航海術を學んで、長崎から澳門・呂宋・暹羅などに渡る航路や、その航海中緯度を測量し、氣象を觀測し、水深を測定する方法を理論と經驗とに基づいて記した元和航海記は、科學を基礎とした我が國最初の航路誌として極めて貴重なものである。また當時呂宋や暹羅方面に貿易を營んでゐた末吉孫左衞門の商船に用ひた航海圖が現存してゐるが、羊皮紙に記したもので歐羅巴の商船が使用した海圖と殆んど同じものである。

元和航海記

船の構造

船體に就いては普通支那船の樣式が採られ、これに歐羅巴風の構造が加味され、遠洋航海に適した大船が建造されたのである。その形狀は、例へば京都の清水寺に現存する末吉船の繪馬額、長崎の清水寺の所藏する末次船の圖などによつて見ることが出來る。角倉氏の用ひた船は長さ二十間、幅九間、乘組員は三百九十七人であつたといひ、また加藤清正が慶長九年に建造した大船は長さ二十間、幅五間餘で座敷は三重に設けられ、十六疊の廣間もあつたし、浴場の設備も整へられてあつたといふことである。

平和的通商

元來江戸幕府の外交方針は一に平和通商にあつたので、朱印船の渡航者も渡航地に於て、また海上に於て決して徒らに事を構へて、歐羅巴人等と衝突することはなかつた。當時西太平洋の制海權は殆んどオランダに歸し、オランダの船隊は屢々海上を遊弋してポルトガル、スペインの商船や支那ジャンク船を襲ひ、また澳門、マニラなどの根據地を脅かしてゐたが、わが朱印船に對しては全く危害を加へることはなかつた。

有馬晴信ポルトガル船を焚く

然し彼等は海外にあつて、決して歐羅巴人を恐れ、その橫暴に對して屈服してゐたのではなく、彼等の爲に不法な處置を受ける時は、斷乎起つて之を徹底的に膺懲する氣概を示したのである。慶長十四年有馬晴信が德川家康の命をうけて伽羅を買入れるため占城に送つた朱印船の船員が澳門でポルトガル人の爲めに殺害されたことがあつた。晴信は其の翌年澳門から長崎に來航したポルトガル商船を擊つてこの報復を企てたので、同船の船長は我が兵船に包圍されて逃れることが出來ず、數多の商品を積んだまゝ自爆して沈んだ。而して二百餘の乘組員が船と其の運命を共にしたのである。

濱田彌兵衞

臺灣支那貿易に從事してゐた末次船の船頭濱田彌兵衞が臺灣でオランダ人を懲らしめたことも有名な事件である。臺灣は既に豐臣秀吉が南方發展の足場として、之を手中に收めることを計り、また德川家康も慶長十四年に有馬晴信に其の地の狀況を探らせたことがあり、元和元年には長崎代官村山東安が遠征したこともあつた。我が朱印船は其の地方で土產の鹿皮や、支那ジャンクが齎らす支那の生絲や絹織物を仕入れて歸るのが常であつた。オランダ人が此の島に根據地を築いて支那貿易に參加するに至つて、日本船の渡航することは彼等の利益を傷つけるものとなり、これを遠ざけることを計つて、關稅を課し、また幕府との外交折衝によつて渡航を停止させようと努力した。その結果、彼等は寬永五年に其の地に赴いた濱田彌兵衞の船を抑留する不法行爲に出た。濱田は長官ピーテル・ノイツに面會して其の不法を訴へ、機を窺つて彼を抑へ、劍を胸元に擬してその暴慢を挫き、オランダ人を長怖させたのである。

慶長から元和・寬永の年代に亙り、歐羅巴諸國が東洋貿易の覇權を繞つて太平洋上に鎬を削つてゐた時、わが朱印船は其の間に伍して盛んに南方に往來し、また國民は大いに海外に雄飛し、南洋各地に其の根據地を有するものも少

なくなかつた。實に海洋日本の最も輝かしい時代であつた。この輝かしい時代を徒らに歷史の中に葬り去つたものは、實に寛永の鎖國令であつた。

（ロ）南洋の日本町

日本町

倭寇による私貿易の時代から朱印船貿易の時代にかけて、わが國民の海外發展は最も高潮に達した。朱印船が渡航する南洋各地には日本人の居住地日本町が出來た。彼等は此の歐羅巴諸國の勢力が錯綜する地方で故國の風俗に從ひ、その生活を營みながら、或は商人として、或は勞働者として、または傭兵・船員となつて働らき、豪勇果敢な日本人の名を轟ろかしたものである。

日本移民の分布

其のころ日本町が營まれた主な地方は、フィリッピンのマニラ、交趾のフェフォとツーラン、東埔寨のピニャルーとプノンペン、暹羅のアユチヤなどであつたが、是等の地では日本人だけが特別の地域に部落をつくつてゐた。その他南洋各地に亙つて外國人と雜居し、生活してゐた移住民も極めて多かつた。臺灣やマカオを始め、モルッカの多くの島々、爪哇島のバタビヤやバンタム、その他マラッカやパタニなどから、更に印度方面にまでも及んでゐる。フィリッピンの呂宋島や暹羅、交趾や東埔寨などは、朱印船が最も頻繁に往來してゐた地方であつて、是等の地に移住した人々が頗る多く、而して日本町が出來、日本人の勢力が強く植ゑつけられたといふことは決して偶然ではない。

我が國民が盛んに南洋方面に進出するやうになつたのは、明が倭寇に對する防衛陣を整備し、その沿海を嚴重に警しめるに至つた結果であるが、丁度わが戰國時代末のことで、多年國內の鬪爭によつて鍛へられた英氣を海外に發揚しようとする氣運が漸く高まつて來てゐたのである。殊に江戸幕府による强力な統一國家が生れ出るに及んで、新らしい活躍の舞臺を南洋の天地に求めて移住した武士の群や、南方の資源を開拓する目的で渡つた商人や、一般庶民の數は夥しいものであつたであらう。中にはキリスト教の信仰を全うする爲めに故國を去つた信徒の群や、奴隷としてポルトガル商船の船底に積込まれ、心ならずも其の植民地に送られた人々もあつた。

呂宋の日本町

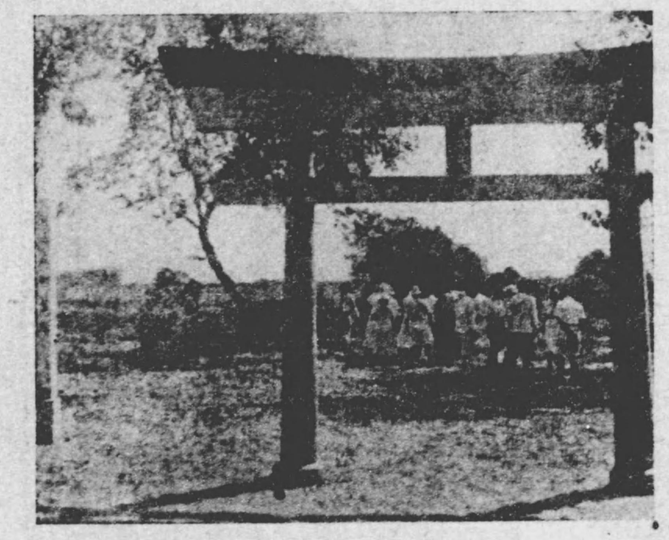
フィリッピンの呂宋島には既にスペイン人が渡來する以前から日本人の移住したものがあつた。我が商船は此の島の土產である黃金や鹿皮などを求め、また此の島に渡航する支那商船と取引する爲めに、早くから平和的通商を營んでゐた。また倭寇として其の沿岸を劫かし、その根據地として海岸に城塞を築いたものもある。またパンガシナン灣の一港に據り、その地が「日本の港」として呼ばれたこともあつた。スペイン人が始めてマニラに入り、こゝを全島の首都と定めたのは一五七〇年（元龜元年）のことであつたが、その時すでに此の地には二十人の日本人が支那人等と共に在留してゐたといふ。マニラが此の島の貿易の中心地として發展するに從ひ、この地に在留する日本人の數は次第に增加し、一五九五年（文祿四年）には一千人に達した。この頃わが國とフィリッピンとの關係は、豐臣秀吉の征服計畫によつて惡化する傾向があつた爲め、呂宋政府は在留の日本人が之れと呼應することを惧れて、マニラ市外の一定地域を日本人部落として此處に移したのである。この日本町は其の後次第に膨脹し、元和ごろには凡そ三千人の日本人がこゝに在住し、彼等は此の町で店を構へて、年々來航する支那船や日本船との商業取引に當つてゐたのであるが、またスペイン人の家庭に入つて召使となり、勞働者や水夫・傭兵となつて彼等に傭はれたものも少くなかつた。スペイン人はフィリッピン統治に當つて常に暴虐な態度を以て土民等に臨んでゐたが、在留日本人は決して其の

横暴に屈してはゐなかつた。而して屢々暴動が繰返へされ、呂宋政府は其の對策に腐心し、不穩の行動に出た日本人を島外に追放し、また歸國を命じたこともあつた。徳川家康は其の島の總督と親交を結ぶに及んで、總督の請に應じて、その地にある日本人の暴動を企てるものに對しては、總督が呂宋の法度に從つて處罰することを認める意味の書を與へた。この日本町に住む人々の間にはキリスト教の信徒も多く、教會堂も設けられてゐた。家康は大坂役の直前キリスト教徒を處罰し、高山右近等の大名を呂宋に追放した。キリスト教禁制の時代に此の異境の日本町は、信徒の安住の地となつてゐたのである。

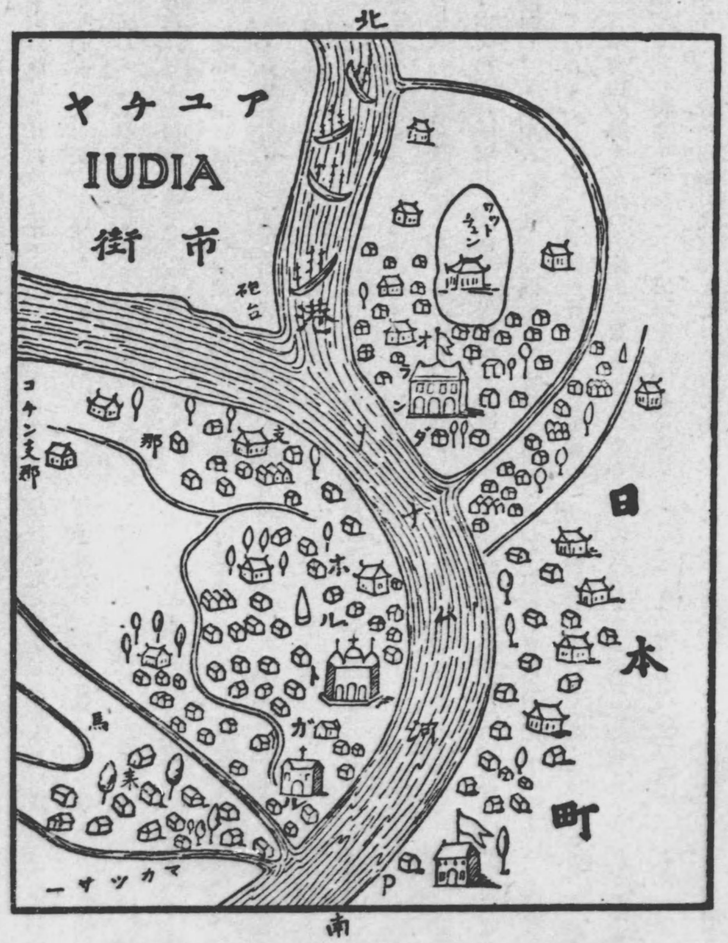
遷羅の日本町は其の國都アユチヤに設けられてゐた。この地は此の方面の貿易中心地として、早くから東洋諸國の商船が集まり、またポルトガル人もマラッカに根據地を築いて、直ぐに通商を開いてゐる。次いでオランダ、イギリス兩國も此處に商館を置くやうになり、メナム河の流に沿うて各國人の居住地が出來た。その中に日本人の居住地、

遷羅の日本町

遷羅の日本町址（長政神社）



アユチヤ日本町の圖



十七世紀支那から入國せる宣教師モッシュレル・クウトウテンの畫きたる繪にて一六八六年印刷のものなり、當時日本町は湖落に向ひつゝあり。

即ち日本町が設けられたのは慶長末年のことである。この頃其の地に在住した日本人の數は三、四百人ほどであつたが、寛永年間その最も盛大を極めた時代には殆んど二千人にも及んだ。彼等は代表者を選んで之を頭領とし、其の統率の下に服してゐたが、山田長政も其の頭領の一人であつた。

山田長政

山田長政は、もと沼津の城主大久保忠佐の轎夫であつたが、慶長年間に其の地に渡り、次第に在住日本人の間に信望を集め、元和年中には遂に其の頭領となつた。遙羅の王室も彼に高官を授けて厚遇してゐたが、後ちに王位繼承問題が起り、長政は遙羅人二萬人と日本人八百人から成る大軍を率ゐて、内亂の鎮定に功を樹てた。その後ち遽ざけられて、六崑の大守に任ぜられ、その地で毒殺された。それは一六三〇年（寛永七年）のことであるが、その年、國王の軍によつてアユチヤの日本町は燒拂はれ、一時わが根據地は潰滅した。然し其の後程なく再建された日本町は、我が鎖國後凡そ半世紀も其の餘命を保つてゐたといふ。

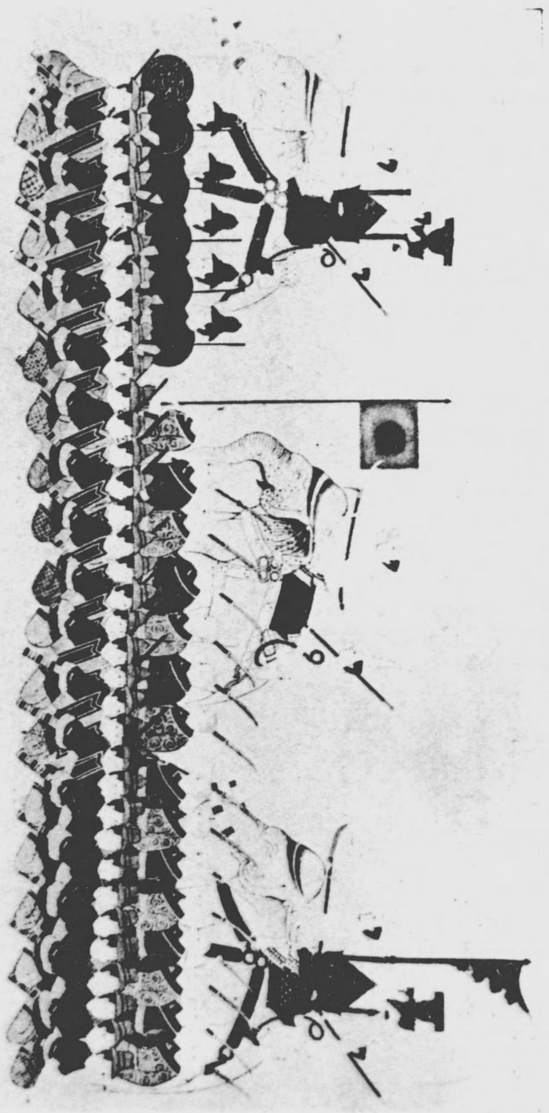
日遙貿易

遙羅と日本との貿易關係は、主に其の地方に産出する鹿皮や鮫皮・蘇枋木などの輸入にあつた。遙羅の日本町に在留する日本人は、其の地方に渡航する朱印船と聯絡をとつて其の貿易事務を取扱ひ、或は是等の商品を仕入れ、その品質を鑑別し、又は手入・包裝・分類などの勞務に從つたものである。また有力者の中には自ら商船を派遣して貿易に從事してゐたものもあつた。尙ほ此の日本と遙羅との間の極めて利益の多い仲介貿易に參加し、次第に勢力を占め、終に日本商船の勢力を此の方面から驅逐してしまふことに成功したオランダ人等も、その地の日本人達の盡力を得て、始めて其の貿易を營むことが出來たのである。

交趾の日本町

交趾も早くから我が商船の渡航地となつてゐたが、朱印船が盛んに往來するやうになつて、その地に在留するもの

（畫壁院寺ムヨ・トッワ國泰）圖列行軍勇義本日



（泰暹)祭ンチカの事勇義本日は圖本、り在にヤチュア都主の時當で設建の王イラナ・ラブ業中紀世七十は院寺（りあに館寫描は高横）。るゐいて立を旗の丸の日地金濱、てしに長隊がるれ乘に先最の衆で列行るけ於に

も多く、慶長年間にはツーランとフェフォとに日本町が出來てゐた。我が朱印船は主に此の地に來航する支那船と交易を營んでゐた。在住日本人は專ら其の貿易事務を掌り、また其の土地で求められる生絲や絹織物を始め、日本向の商品を仕入れる仕事にも從つてゐた。この地方に來航したオランダの商船も此の日本人の力をかりなくては有利な貿易を營むことが出來なかつた。在住日本人の數は數百人に及び、頭領が選ばれて其の統率に當つてゐた。

東埔寨の日本町

東埔寨の日本町は、メコン河の上流にあるプノンペンとピニャルーとに設けられてゐた。この地方にはオランダ商館やポルトガル人町を始め、東洋諸國人の地區が河に沿うて營まれてゐた。而して日本町では數百人の日本人が、頭領の支配の下に其の生活を送り、彼等も交趾の日本町と同樣、その地方に渡航する朱印船の交易事務に從ひ、また自らも貿易を營んでゐた。

歐羅巴人の植民地經營と日本人

此の外、日本人の移住地は南洋の諸地方に分散して居り、それ等の地方で貿易を營み、勞役に服し、また兵士となつて極めて果敢な活躍をつゞけてゐたのである。

歐羅巴人が太平洋上に現はれ、南洋の各地に次第に其の植民地侵掠の歩を進めて行つたころ、海外にあつた日本人等は屢々彼等の橫行に反抗して之を惱ました。其のために日本人は頗る勇壯な民族として彼等の驚嘆し畏怖するところとなつた。死を顧みずして勇敢に戰ひ、また敵の手中に陷る時は、潔く切腹して果てる日本人の行動は、南洋各地方の土民やアラビヤ・印度・支那などの商人には到底見ることの出來ないものであつた。

歐羅巴人は其の植民地の開拓に當り、或は要塞の守備の爲めに、または相互の覇權の爭奪に際して、日本人を傭兵に用ひ、その武力に賴つたことが少なくない。マニラ在住の日本人は屢々スペイン人に雇はれて從軍し、或は外征に、

または内亂の鎭定に功を樹てた。一六一五年には五百人の日本兵が、マニラからスペイン艦隊に乘組み、モルッカ諸島からマラッカ方面の遠征に赴いたこともあつた。マラッカのポルトガル人の城塞守備兵の中にも、日本人の一隊があつて、一六〇六年にコルネリス・マテリーフが率ゐる十一隻から成るオランダ艦隊が之を攻撃した時に勇敢に防戰して、大いに包圍軍を惱ましたので、終に陷落させることが出來なかつた。オランダ人も盛んに日本人を傭兵として守備や攻略の陣營に參加させ、その太平洋の根據地となつてゐた爪哇のバタビヤ城塞を始めとして、彼等がポルトガル人の手から奪ひ取つたモルッカの島々には、いづれも日本人が其の守備兵の中に加へられてゐたのである。

南洋方面にあつた日本人が、斯やうに歐羅巴人の軍事的行動に參加して功勞があつたばかりではなく、また其の貿易事務や植民地開發事業にも加つて大きな役割を果したのは、怜悧にして敏捷な國民性が充分に發揮されたからである。既にポルトガル人は日本人を奴隸として積出し、その植民地經營のために使用してゐたが、オランダ人も亦た多數の日本人を雇ひ入れて勞役に服させた。商館の使用人となつたものもあり、大工・土工として建築工事や土木工事に從事したものもあり、また森林の開發や鑛山の發掘の仕事に參加したものもあつた。總て此の方面に於ける彼等の植民地開發と經營のために、日本移住民が果した役割は極めて大きなものであつたといふことが出來る。また遲羅や交趾・柬埔寨などの日本町に在留してゐた日本人が、歐羅巴人の貿易のために援助を與へ、また仲買商人の役割を果たしてゐたことも注目される。

鎖國令と日本町

寛永の鎖國令はこれら南方各地の日本人の活躍を全く萎縮させてしまつた。從來これ等の地方に移住し日本町をつくつてゐた人々は、多く朱印船貿易を通じて母國との聯絡を緊密に保ちながら生活を營んでゐたのである。而して南洋各地に日本人の爲めの根據地を築いた是等の人々の勢力が頗る大きかつた爲め、歐羅巴諸國は其の强力な國家を背景とし、また大きな資本の力を其の東洋貿易に注ぎ込んだにも拘らず、日本貿易に關する限りに於ては、わが朱印船の活躍に一步を讓らなければならなかつた。然し日本町の人々が母國との聯繫を緊密に保ち、日本貿易だけによつて其の生活を營んでゐた結果は、一旦鎖國令が發布され、朱印船の海外渡航が全く禁止されることゝなるや、その生活は忽ち窮迫に陷つてしまつたのである。

四、寛永鎖國

鎖國の目的

朱印船によつて我が國民が大いに南方に雄飛し、また南洋の各地方に日本町を營んで歐羅巴人の間に伍して活躍し、日本人の理智と武勇とを廣く世界に知らしめた太平洋史上空前の我が國民の進出時代は、寛永鎖國によつてその幕を閉ぢた。

それは既にポルトガル人の渡來によつて初めて我が國に傳へられ、やがて全國に廣まつたキリスト敎の影響を惧れて、幕府が其の布敎を根絕しようとする目的で行つたものであつたが、同時にまた朱印船貿易によつて莫大な富を蓄へ、强大な勢力を占めるに至つた商人や大名等を抑へて、德川氏の政權を安全に保たうとする意圖に出たものであつた。然かも直接幕府の支配することの出來ない南洋の各地に、國內から移住した多くの日本人が集まり、大きな勢力を形づくつてゐるといふ事實は、その中に或ひは高山右近などのやうに、キリスト敎を信仰する廉で追放されたものや、また戰國以來の浪人の群で其の地方に逃れて、幕府を倒さうとする機會を狙つてゐるものも少くなかつたとされ

ば、幕府にとつては實に油斷のならない狀勢と考へられたに相違ない。

幕府は當初その地盤を築く必要から盛んに外國貿易を奬勵し、南方諸國と和親外交を結び、また太平洋制覇の爲に互に鎬を削つてゐた歐羅巴諸國とも夫々友交を修めた。其のためキリスト教の信仰も默認してゐたのである。

キリスト教の禁止

幕府がキリスト教を禁止したのは慶長十七年（西曆一六一二年）のことで、當初は幕府の直轄地の江戸や大坂・京都・長崎などで、宣教師や信徒を放逐しただけであつたが、その禁止はやがて全國に及び、大坂陣の後には殊に激しくなつて來た。それにも拘らず、澳門やマニラから我が國に潛入して教を弘めようとする宣教師の群は跡を斷たず、殊にマニラに本據を置くフランシスコ會等の宣教師の潛入は、きわめて頻繁に行はれてゐたのである。

オランダ人の進言

新教國であるオランダは、早くから我が國に通じて有利な地位を占めてゐたポルトガルやスペインの勢力を驅逐して自ら其の王座に就かうとする目的から、しば〳〵幕府に對して、舊教國が其の植民地侵掠の政策に常にキリスト教宣教師を參加させてゐることを告げ、キリスト教の禁止を進言した。而して其の禁教政策を更に徹底させる爲めには、ポルトガル、スペイン兩國商船の渡來を禁じ、また朱印船のマニラや澳門に渡航することを禁じなくてはならないと說いた。是等の地方との交通が行はれてゐる間は、宣教師の潛入は決して斷つことが出來ないからである。

朱印船とオランダ船との對立

朱印船の海外進出もオランダの日本貿易にとつて不利益となるものが多かつた。その貿易は主に支那や南洋の商品を日本に齎らすことであつたから、オランダ商船は其の商品の仕入地でも亦た日本に著いてからも、常に我が朱印船と競爭が絕えなかつた。殊に日本貿易に最も重要な商品である支那の生絲や絹織物を手に入れる爲に、朱印船が澳門やマニラと往來することは、直接支那貿易に參加することの出來なかつたオランダにとつて、最も不利な條件であつた。オランダは此の交通の停止されることを望んで、機會ある毎に朱印船の海外渡航が、禁教政策に害を及ぼすものであることを幕府に說いた。オランダは幕府の政策に歩調を合せながら、終に幕府を動かして只管自國の利益になるやうに誘導したのである。

鎖國令

幕府は元和九年（西曆一六二三年）呂宋との交通を絕ち禁教の徹底を期したが、その後寛永十年（西曆一六三三年）になつて初めて海外渡航に關して禁令を發布した。最初の禁令は朱印船以外の商船で日本人が、海外に渡ることを禁止し、また海外にあるもの〵歸國を制限する程度であつたが、其の翌年にはポルトガル人の貿易を制限し、彼等の居留地を長崎の出島に創くり、これを嚴重に監視すること〵した。鎖國の政策は年を追うて强化され、寛永十二年（西曆一六三五年）には絕對に海外渡航を禁じ、また海外移住民の歸朝すること〵を許さないこととなり、愈々その翌年に發布された禁令によつて、日本船の海外渡航は一切禁止されるに至つた。それのみならず、ポルトガル人の子孫や、日本婦人との間に生れた混血兒などの日本に在ることを嚴禁したので、是等の人々はすべて澳門に放逐された。その數は凡そ二百七十人ほどであつた。

島原の亂が勃發したのは寛永十四年のことである。十字架を描いた旗を飜へして原城に立籠つた四萬の叛徒を討伐するために十二萬の兵力を動員し、四箇月の日子を費した幕府は、キリスト教の信仰が齎らす禍害を益々惧れ、この後國內では踏繪によつて信者を調べ出し、また賞金をかけて宣教師や信者を訴へ出ることを奬勵する一方、これまで長崎出島に來航することを許してゐた澳門のポルトガル船の往來を全く禁止してしまつた。

海外への通航が禁止されたばかりでなかつた。幕府は又遠洋航海に堪へる大船の建造をも禁じたので、その後は我

が國の造船技術が著しく衰へる結果となつた。

幕府は海外との交渉を絶つことによつて、國内の統制をいよ〳〵嚴重にして、德川氏の政權を鞏固にすることが出來たのである。然し母國との貿易關係を通じて其の生活を營んでゐた海外の日本人にとつて、鎖國令は全く其の發展の途を絶つことに外ならなかつた。故國との連絡を絶たれた彼等の中には、その後もオランダ船や支那船を通じて、故國の親戚や知人に商品を送り、また消息を傳へるものも少なくなかつた。それも猶て寛永十八年（西曆一六四一年）には堅く禁止されたので、こゝに鎖國政策は完全するに至つた。

斯くして我が國民の華々しい海外進出の時代は終りを告げたが、その後も嚴重な取締りを犯して、密貿易を企てようとする人々は後を絶たなかつた。伊藤小左衛門・末次平藏・錢屋五兵衛などがそれである。然し鎖國の禁令は總じて國民の海洋への關心を全く萎靡させ、ひろく世界の情勢に目を注ぐ氣力を喪失させた。而して我が國土を周る海洋を障壁として、國内に狹い平和の日が續いてゐる間に、太平洋の形勢は全く一變し、歐米列國の新たな侵掠の歷史は繰り擴げられて行つたのである。

第三章　歐米近代諸國の太平洋發展時代

第一節　歐米諸國東洋貿易の發展と東洋植民地

一、印度を中心とする蘭・英・佛三國の抗爭

和蘭の東印度諸島經略　十七世紀初頭に於ける蘭領印度諸島獲得の基礎を築いた當時の總督クーンは希代の英傑で、和蘭植民地の擴張に偉勳をたてたのみならず、本國より婦人を移住せしめて自國植民地の人口增加をはかる等、内政上にも亦大きな功績を殘した。當時和蘭本國政府は歐羅巴政策を重んじ、一六一九年英國と倫敦協商を行つて英人の印度諸島渡航を許したが、クーンは本國政府の意思に反して東洋に於ける蘭領より英人を排撃する事に努めた。

アムボイナの虐殺　斯くて一六二一年にはバンタム在住の英人は蘭人の爲に驅逐され、其の翌々年には所謂「アムボイナの虐殺」なる事件が起つた。之は英人を敵視した香料諸島の蘭人が英國船長タワーソン以下英人九名、日本人九名、葡萄牙人一名を捕縛して殘酷な拷問を行つた揚句、彼等は和蘭守備兵を襲撃する陰謀を圖つたものとしてアムボイナに於て死刑に處した事をいふ。此の事件解決の爲め和蘭政府は三千六百餘磅の賠償金を支拂はねばならなかつたが、之れによつて蘭人は印度諸島中の寶庫として當時の印度貿易品中最も重要な位置を占めてゐた香料の主産地たる香料諸島から完全に英人の勢力を擊退してしまひ、次でクーンの後任者ジーメンは、東印度諸島の咽喉を扼すべきマレー半島の南西

端マラッカの地を窺ひ、スマトラ島の北部にあつた亞齊（アチエー）王國國王を懐柔して其の軍と聯合し、一六四〇年マラッカより葡萄牙人を驅逐してしまつた。こゝに於て東印度諸島に於ける蘭人の勢力は確立するに至つたが、其の後も蘭人の發展は目覺ましく、南方に於て一六四二年には彼等によつてオーストラリヤ海岸の探檢が行はれ、タスマニヤが發見され、東方に於てはボルネオを威服せしめ、一六六七年セレベス島より葡萄牙人を追ひ、西方に於てはスマトラ島の各地に漸次商館を設立した。之と共に根據地バタヴィヤの所在ジャバ島に於ては、島内諸酋長のジャバ王に對する叛亂を幾度か鎮壓して王を懐柔し、漸次蘭領を奥地まで進めていつたが、十八世紀初頭にはジャバ王は全く蘭人の傀儡に過ぎなくなつた。

和蘭東印度會社の盛衰

是れより先、一六五一年蘭人は東洋住民地と歐洲本國との航路を確保する爲めに喜望峯に根據地を開き、マオリチュースに碇泊地を設けたが、其の翌年マドラス海岸にパラコルの地をトして印度本土に於ける最初の和蘭商館を建設し、次でセイロン島の葡人と戰つて、一六五六年にコロンボを陷れ、二年後にはジャツフナパタム城砦を抜き、續いて胡椒の産地たるマラバル海岸の葡萄牙植民地を漸次攻略し、一六六九年其の中心地たるサン・トメを占領した。斯くして和蘭人は漸次印度半島南部一帶の海岸線に勢力を扶植するに至つた。

斯くて印度半島及び東印度諸島の海岸線一帶に勢力を扶植した和蘭人は、後ちに支那及び日本との貿易に依り、十七世紀後半より十八世紀初頭にかけて歐人の東洋貿易に首位を占めた。蘭人の東洋貿易を主宰した和蘭東印度會社は毎年六百噸乃至一千噸の船舶を十五隻乃至三十隻づつ東洋に送つてゐたが、これ等商船の歐洲に齎らした東洋特産物は毎年二回アムステルダムの東印度館に於て競賣に付され、其の賣上高は、一六三九年に五百八十萬フロリン、一六五年に一千萬フロリン、一七一〇年に千五百萬フロリン、一七二〇年に千九百萬フロリン、一七七〇年に二千萬フロリンとなつてゐる。然るに十八世紀に入つて英國が漸次東洋に於ける勢力を伸張するにつれて、蘭人の東洋貿易獨占は甚だしく脅威を受ける事となつた。蓋し和蘭東印度會社は國王の特許狀を有し有能な貿易商等によつて主宰されてゐたが、一七〇二年に國王を會社の總裁とし、其の重役を世襲制に改めてより後は、會社の活動は財閥の壟斷するところとなり、其の結果會社の機能は沈滯し、往年の冒險的精神を失ひ、社員の風紀は頽敗に傾いてしまつた。斯くて一七三〇年代より和蘭東印度會社の營業狀態は不振に陷り、漸次往昔の繁榮を失ひ、遂に一七九五年日本及び支那に對する貿易權を保留するほか他の權利を放棄し植民地はすべて本國政府に引渡したが、一八〇〇年に至り、遂に解散してしまつた。思ふに、十七、八世紀に於ける歐洲諸國は東洋貿易の利を第一の目的としてゐたのであるから、東印度會社の貿易不振となつた以後の和蘭人は僅に東印度諸島の領土を維持するのみで、華々しい活動をなし得なかつたのである。

英國の印度發展

英國東印度會社　和蘭人に次で東洋に現はれた英國人は最初マレー半島方面の香料獲得を目的としたのであるが、東印度諸島に根據を有した蘭人の勢力に敵する事が出來ず、アムボイナ虐殺事件以來方針を變へて印度半島に發展するに至つた。英人は一六二〇年既にマドラス地方に發展してゐたのであるが、一六二二年には波斯と同盟して印度西海岸北部の葡萄牙人を驅逐してスラートに根據地を確立し、之に續いて一六三九年には現在のマドラス市の地にセント・ジョージ城砦を築いて通商防衛の基點とし、其の翌年には東海岸北部のベンガル地方にフグリ、一六四二年には其の南方オリッサ地方にバラソルの地をトして夫々商館を設置し、漸次印度東海岸の貿易を確保發展せしめて往つ

た。一六六一年英葡兩國皇室の姻戚關係が成立するや、葡萄牙は印度に殘存する自國領圖を和蘭人の侵略より防護するを條件としてセイロン島のコロンボを英國に讓渡した爲め、英人の印度に於ける勢力は一層南進を見たが、更に西海岸南方に於ける蘭人の勢力範圍に進入して、一七〇〇年マラバル海岸にカルカッタ根據地を確立した。斯くて十八世紀初頭には、印度本土に於ける葡萄牙の勢力は全く失はれ、英國が全海岸線に於ける通商權を保有し、和蘭の勢力が尙ほ南部に殘存するほか新たに佛國の發展を見ることゝなつた。

カルカッタ根據地の成立

英國人の印度に於ける華々しい發展は勿論歐洲に於ける本國國勢の隆盛によるものであるが、一面英國人の東洋に於ける活動を總轄した英國東印度會社の組織及び機能の充實してゐた事も忘れてはならない。前章に述べた最初の英國東印度會社は、詳しく言へば、倫敦東印度貿易會社は政府から對印度貿易及びそれに伴ふ諸種の特權を與へられてゐたが、一六二〇年代には東洋に於ける蘭人の壓迫及び本國に於ける負債等のために經營困難となつた。之れに乘じて他の商人團體が賄賂によつて政府から特許狀を獲得し、コーテン組合或は冒險商人會社等の特許會社を成立せしめた。斯かる英國人相互の競爭が蘭葡兩國人をして英人の活動を妨害せしむる機會を與へる事を憂へたクロムウエル時代の英國政府は、一六五七年十月倫敦東印度貿易會社に更定特許狀を下附して印度に於ける英人事業獨占の特權を確保した爲め、同會社は資本金七十四萬磅を以て再組織され、續いてチャールス二世の時代に於ては五回に亙つて倫敦東印度貿易會社の特許狀が下附され、會社は貨幣鑄造、軍隊の動員及び指揮等に至る權限をも有する事となつた。然かし此の强力な會社は其の後隆盛に赴くにつれて會計の紊亂等により其の機構に弛みを生じ、十七世紀末に至つて本國の國會で論難の中心となり、遂には保守、自由兩黨の政爭の具に供せられた結果、一六九八年の國會は東印度貿易業者總會なる新會社の創立を可決し、こゝに倫敦東印度貿易會社と併立する新特許會社が二百萬磅の資本金を以て成立した。兩會社の對立が英國人の東洋發展の統一を缺く事情は依然變らなかつた爲め、この新會社の出現は其の後政府の惱みとなり、一七〇二年に至つて兩者の合併を命じ、一七〇八年遂に之が實現して、資本金三百二十萬磅の英國東印度貿易會社が確立した。以上概述したところから も察せられる如く、英國東印度會社は新興階級たる商人によつて實權が握られ、政府は諸種の特權を附與して之を保護したけれども深い干渉を行はなかつた。但し會社と本國との連絡は極めて密接であつて、會社の危機は常に本國政府の援助によつて救はれてゐたのである。之れを和蘭及び佛國の東印度會社の性質に比較して見ると、英國この後の發展の故なきにあらざるを諒解する事が出來よう。

佛國東印度會社

佛國の東洋發展　蘭英兩國についで他の歐洲諸國も東洋貿易に進出し、北歐の丁抹が早くも一六一二年に東印度會社を設立したのを始めとして、十八世紀前半にプロシャ、瑞典、佛國等は夫々政府から特權を與へられた東印度會社を起してゐる。是等の中、小國の東洋貿易は每年僅か一、二隻の商船を送つて他の强國の餘利を漁つてゐたに過ぎないから、こゝに彼等の活動を叙述する事は省略し、次に專ら佛國人の東洋發展について述べることゝする。

佛國の東印度會社の濫觴は一六〇四年で、最初に佛國王立東印度會社が創立されたものゝ、一回の航海をも行はずして流産となり、其の後この會社の特許狀を讓渡されて一六一五年に組織されたモルスク商會、或は一六四二年に探檢家リコールが政府より十箇年期限附の特許を受けて創立した東方商會の兩會社が東洋貿易に從事したが、これ等の商人團體に對する政府の支持が十分でなかつた爲め事業の發展は思はしからず、殊に一六四三年以後、佛國政府が內

政に專念するに至つて後は殆んど絶望とさへ思はれるに至つた。然るに一六六一年にコルベール内閣の成立するや、大規模な經濟政策を開始した佛國政府は一六六四年千五百萬法の資本を以て東印度會社を組織し、自ら三百萬法の株主となり、ルイ十四世は此の會社に東洋貿易獨占五十箇年期限の特許を與へた。斯くて佛國東印度會社の活動は開始され、一六六六年にはスラートに商館が設けられ、爾來敏腕を以て謳はれたマルタンの努力によつて會社の事業は隆盛に赴き、一六七四年には蘭人と戰つて、印度半島の東南部にポンヂシェリーの地を獲得した。是れより先、佛國政府は一七一七年に會社を東方商會に併合せしめて、印度商會なるものを組織し、この新東印度會社に改めて佛人の印度に於ける全事業を委任する事となつた。右の如く佛國東印度會社は英國のそれと異なつて終始政府が主體となつて活動してゐるが、これ當時佛國に於ては未だ英國に於ける如き民間資本家の發達がなかつた事に基き、これが延いては印度貿易の發達しなかつた原因となつてゐる。而して一六八八年には貿易の根據地として印度の莫臥兒王國からシャンデルナガールの地を割かしめた。然るに一六九三年再び蘭人と戰を開いたが勝利を得る事が出來なくて、徒らに英國をして印度の殘存蘭領を侵略する機會を與へた結果となり、一六九七年蘭人と和約を結んだ。此の頃から佛國東印度會社は、創立當初からあまり振はなかつた貿易の益々惡化するに苦しみ、一七〇一年に初代佛領印度總督に任ぜられたマルタンの盡瘁も空しく、然かも佛國政府は尙ほ國内問題のために充分に海外に意を用ふること能はず、從つて、印度の會社は本國の充分なる支持を得る事が出來なかつたのである。

莫臥兒帝國治下の印度

印度に於ける英・佛の抗爭　觀つて印度の内部を觀察すると、十六世紀の中頃北印度に起つた莫臥兒王國は國内の大小無數の諸侯を征服したけれども、宗教・風俗・民族を異にする印度各地の割據的勢力は決して完全に統一されたのではなかつた。されば十八世紀初期に至つて莫臥兒王國が衰頽の路を辿り始めるや各地に割據獨立の形勢が生じたが、其の最も有力なりしは南印度のマラータ地方の領首シヴァージの國家であつて、莫臥兒王國を侵蝕したのみならず、スラート地方の英人にも亦武力的脅威を加へた。恰も此のとき波斯軍は北印度に侵入し、一七三九年にはデリーに亂入して大規模な掠奪を擅まにし、續いてアフガン人も亦ガンガ河北の平原に亂入して橫暴を極めた。斯かる印度の狀態は當時この國に野心を抱いてゐた英佛兩國に其の魔手をのばさしめる好機會を與へ、爲に此の兩國は其の本國に於てオースタリー王位繼承戰爭及び七年戰役を中心として續けてゐた反目を印度の地に於ても亦現出する事となつた。

印度に於ける英佛の交戰

一七三五年デュープレーがポンヂシェリー總督となつてから印度に於ける佛人の政治的勢力は次第に擴大した。彼は南印度の混亂に乘じてタンジール王の王位爭奪に關係し、一七三九年ポンヂシェリーの南方カリカルを獲得したが、其の翌年にはマラータ軍を破つて莫臥兒國王に取入る事が出來た。次代の總督デュプレーは佛人と莫臥兒王室との此の親善關係を基礎として諸王間の紛爭に乘じ、自國の勢力を擴張するといふ葡萄牙人以來の巧妙な政策を進め、又土民軍の編成を試みて效果を收めた。斯くして印度に於ける佛人は、本國政府の支持の少ないにも拘らず隆盛に赴きつつあつたが、時あたかもオースタリー王位繼承問題に關聯して一七四四年英佛兩國は交戰狀態に入り、その形勢は忽ち印度にも波及した。一七四五年英國艦隊はコロマンデル海岸に出動して佛領を襲はんとしたが、デュプレーはアルコット王を巧みに使嗾して之を妨害せしめ、反對に翌年九月佛國艦隊はマドラスを襲擊して英國の根據地を占領した。英國は之に對して一七四八年本國より海陸兩軍を派遣してポンヂシェリーを圍んだが、間もなく歐洲戰局に於ける英

佛の媾和が成立し、佛國は英國に略取された加奈陀の一地方と交換にマドラスを英國に賣却した。然るに印度に於ては此の後も尙ほ英佛兩軍間にはアルコット王の王位權承問題を中心として交戰狀態が續けられたが、一七五一年の戰では英國東印度會社の書記クライヴが三百餘の寡兵を以て一萬の敵兵に對抗して名聲を博した。斯くして印度に於ける英佛兩國は對抗のまゝ數年を過ごしたが、一七五七年には歐洲に七年戰爭が勃發し、英佛兩國は再び交戰狀態に入つた。而して佛國東印度會社はヂュプレーの政策が徒らに財政支出を增加するのみで貿易の進展に寄與すること尠なかつたので、既に破產に瀕してゐた同會社はヂュプレーをして其の地位を去らしめてしまひ、本國政府も亦彼に對して何等の支持をも與へなかつた。されば佛國よりも遙かに優れた海軍を有した英國はこの機會に乘じて一七六〇年ポンヂシュリーを包圍して之を陷れた。一方クライヴは英國人に反感を示してゐたベンガル王が英人百數十名を慘殺したのを機會として、一七五七年有名なプラッシーの戰に於てベンガル軍を大敗せしめ、以てカルカッタ附近に確乎たる勢力を普及するに至つた。右の如くにして英國は、千七百五十年代を以て印度に於ける主權確立の基礎を築いたのであつて、以後佛人の回復運動或は蘭人の反抗も無いわけではなかつたが、それ等は毫も英人の勢力を縮少し得るものとはならなかつた。

プラッシーの戰

英人の印度經營　ベンガル地方に版圖を擴大した英國東印度會社は此の後會社役員の私的事業を嚴禁し、土民兵を養成して軍備の充實をはかり、銳意印度經營に努めた。而して一方、會社の貿易事業が順調に發展した反面に於て、印度版圖の經營といふ軍事的政治的任務が重大となつて來たので、土民の反抗を抑壓してベンガル、ボンベイ、マドラスの三地方を確保する必要を生じ、遂に一七七二年に至り本國に百萬磅の補助を請願するに至つた。是に於て英國國會では商事會社たると同時に統治機關たる東印度會社の機能に關して、活潑な論戰が繰返された結果、印度に於ける領土統治權は爾來英國國會の監督下に置く事が可決され、一七七三年所謂印度整理法案が發布された。この法令に基いてベンガル總督の官制が布かれ、前カルカッタ知事たりしヘースチングが之に任ぜられた。

印度整理法案の發布

彼は官制に從つて東印度會社重役と協同して印度統治を主宰する事となつたけれども、時あたかも北米獨立戰爭や英佛戰爭の最中で、英國政府も印度問題に十分の力を注ぐ事が出來なかつた時期であり、且つ東印度會社重役は多人數を以て彼を牽制する事多く、其の任務遂行に甚しい困難を感じたが、領土擴張によつて起る諸種の紛糾を避け、專らベンガル土民を手なづけて印度諸王を懷柔する方針を以て進んだ。

ピット法案の發布

然かし東印度會社の政策は尙ほ本國國會に非難されるところ多く、ベンガル總督のみを以て之を是正する能はざる事が明白となつたため、英佛戰爭の終了後ウイリアム・ピットの內閣成立するや、一七八四年所謂ピット印度法案なるものを發布した。これは東印度會社から印度に關する行政權及び軍事上の權限を分離せしめるを目的としたもので、英國政府に印度事務監督廳を設け、東印度會社當局には貿易事務に關する外、すべて該廳の命令を遵奉すべき義務を負はせ、ベンガル總督を該廳の政務執行機關とした。斯くて英國政府と印度との統屬關係が更に密接となつたが、斯の如き印度に於ける政治的活動の進展と共に、東印度會社は漸次政治的色彩が强くなつたのみならず、英國國民經濟の急速なる發展の結果、印度貿易を一會社の獨占に委ねる必要性が消失して來たので、一八一三年に至り支那貿易の獨占權のみを殘し他の商業上の特權を奪はれてしまつた。更に一八三三年になると支那貿易に於ける特權も亦停止され、こゝに東印度會社は純然たる政治機關となつた。而して英國政府と合體しつゝ東印度會社の進めた印度經

略は、十八世紀末に至つて從來の領土不擴張及び土民に對する不干涉主義を棄てゝ、積極的に領土侵略の方針をとるに至つたが、其の具體的事實は次節に讓る。

歐人の後印度進出　印度半島に續いて叙述の要あるは後印度、卽ち印度支那半島である。此の地方は古くから支那文化の影響を相當强く受けてゐたが、十七世紀に於ては半島の東部メーコン河以東の地帶に黎氏の王朝によつて支配された安南國があり、メーコン、ザルウィン兩河の間に遲羅國があり、其の西方印度のベンガル地方までの地は緬甸國に屬してゐた。此の外メーコン河口の一帶は小國柬埔寨の領有するところであつた。是等諸國は支那の明朝に朝貢してゐたが、最も强力なりし安南國の如きは、明朝との關係淺からぬものがあつた。明朝覆滅の後、明皇室の一人である桂王は新興の清朝に反抗した末、遂に緬甸に逃れたが、一六六一年清軍は遠く緬甸の地に兵を出して王を捕へた。然かし其の後一世紀餘の間、清朝と印度支那諸國とは深い關係を生じなかつた。

葡蘭人の印度支那貿易　斯かる間に、既に十七世紀初期よりこの半島に於て貿易を開始した歐洲人の勢力は海岸地帶に浸潤するに至り、印度支那半島に最初に姿を現はしたのは葡萄牙人及び和蘭人であつたが、葡人は單に季節的貿易をなすのみであつたに反し、蘭人は一六三六―三七年の間に廣南・憲南の地に商館を設置し、土民の反抗を鎭めて自國人の根據地を固めた。其の爲め蘭人の印度支那貿易は著實に進展し、續いて此の地方に現はれた英人も河內に商館を設けたが、一六九七年蘭人に對抗し得ずして閉鎖のやむなきに至つた。然かし十八世紀に入つて前述の如き和蘭東印度會社の衰微と共に、蘭人の後印度貿易は英佛の狙ふところとなり、こゝに印度に於けると同樣、兩國の競爭を惹起した。

歐人進出前の印度支那半島　佛人の印度支那半島に現はれたのは十七世紀中頃に於ける宣教師の活動を以て始まる。しかし貿易の方面に於ては

西山黨の亂　一六八〇年に佛國東印度會社船の派遣があつたのみで大した進展を見なかつた。遙か後れて一七四〇年代に佛領印度總督デュプレーは安南王國と通商互市の交涉を開始しようとしたが、當時佛國の東印度會社は印度貿易に於て英國より受けた打擊のため業務不振に陷つて之を實現する餘力を缺いてゐた。爾來英佛兩國の印度に於ける抗爭は兩國をして印度支那に發展する餘力を有せしめなかつたが、一七七〇年代に於て印度支那半島は、土酋阮氏の叛亂によつて混亂を極めた。卽ち之よりさき十六世紀末に安南の黎氏は阮・鄭兩氏の援助によつて久しく眞氏に簒奪されてゐた王朝を再興したのであるが、爾來鄭氏は黎王朝の執政として權勢を張り、阮氏は廣南に退いて王と稱した。一七八五年遂に土酋阮文岳等の西山黨なるものが蜂起して廣南王阮氏を遲羅に追ひ、ついで黎氏及び鄭氏をも敗走せしめた。

アドラン司教の活躍　斯かる混亂の中にあつて英國東印度會社は社員を印度支那半島に派して調査を行はしめ、佛國のシャンデルナガール司令官も亦た商船を派遣した。其の結果、英佛兩國人はこの機會に後印度の內政に干涉して通商の發展を謀ることの有望な事を知つたが、この事業は逸早く半島在住の佛人宣教師アドラン司教によつて遂行された。彼は阮氏一派に取入つて其の活動を助け、一七八六年には阮家の一王子を伴つて佛本國に赴き、政府に說くに阮氏援助を以てした。

是に於てアドラン司教と阮氏との出發前の內約に基き、一七八七年阮氏と佛國海軍省との間に十箇條より成る攻守同盟條約が締結されたけれども、佛外務省より對後印度政策を委任された佛領印度總督はアドラン司教との間に確執を生じ、消極的な對後印度政策を固守して本國政府を動かした爲め、遂にアドラン司教の計畫は本國より何等具體的な援助を受ける事は出來なかつた。然かし一七九八年陣中に歿するまで司教は半島にあつて阮氏を援助した。斯くて一八〇二年には阮氏は叛徒を平定し、黎氏の舊地を回復して帝位に卽いたが、この王朝にはアドランの努力によつて

佛國人の勢力が根強く喰入つてゐたのである。

清朝と印度支那との關係

此の後に於ける佛領印度支那の成立事情は後述するが、こゝに一言支那と印度支那諸國との關係を述べて置く必要がある。支那西北邊境に大遠征を行つた乾隆帝の時代には、一七六五年以來數回にわたつて緬甸征伐が行はれ、一七九〇年緬甸は清朝の藩屬國となつた。斯かる間に緬甸と暹羅とは相互に反目してゐたが、清朝の勢力に依頼して緬甸を牽制しようとした暹羅は一七八六年に緬甸に先んじて清朝に朝貢の禮を執つた。更に安南の黎氏は早くも一六五九年に清朝の雲南遠征軍に使を遣はして和好を求め、一六六六年清朝から朝貢國の待遇を得てゐた。されば安南の內亂に當り、清朝は黎氏保護のために遠征隊を送つたが、其の絶望なるを知り、後繼王朝の安南統治を認めて之に朝貢國の待遇を與へた。斯くの如く清朝は後印度諸國を藩屬國を以て目してゐたのであるが、その間に政治的な深い關係が存したのではなく、單に朝貢使節を送る程度のものであつた。

二、歐米諸國の支那通商

西葡兩國の支那貿易　マカオを根據地とする葡萄牙人の支那貿易、竝にマニラを本據とした西班牙人の出航支那人との貿易は十七世紀に於ても尙ほ繼續され、殊に葡萄牙人は歐人として單獨に許されたマカオに强固な勢力を張り、香料と並んで當時最も重要な東洋特產物であつた絹・生糸等支那からの輸出を獨占し、支那・歐洲間は勿論、支那・日本間及び支那・マニラ間の航路に優位を占めてゐた。西班牙人は新大陸に豐富に產出した銀をフィリッピンに輸送し、マニラに於て葡萄牙船及び支那人のジャンクから之と交換に支那物產を得て太平洋を航してメキシコに送り、

マカオの盛衰　更に歐洲に實捌いてゐたのである。然るに一五八〇―九八年間の西葡兩國が同一王位の下に統一された時代に支那・マニラ間の貿易に勢力を失つた葡萄牙人は、一六三九年に至つて日本からも貿易禁止の憂目に遭つた。之れを轉機として爾來葡萄牙人の過去一世紀にわたる支那貿易は一路衰頽に向ひ、マカオの商業的繁榮は失はれてしまつた。以後も西葡兩國の支那貿易は連續して行はれてはゐたが、最早往時の隆盛はなく、之に代つて既に印度洋上に勢力を扶植した蘭英兩國が登場する事となつた。次に兩國の支那通商を述べるに先立ち、當時の支那及び其の邊境諸國の狀態について一瞥を與へて置かねばならない。

明清の交替と支那邊境　支那本土には十四世紀中頃以來明王朝が君臨し、爾來二世紀間の平和時代に於て漢民族は南支那の南端まで著實な農業的發展を遂げ、支那本土全體が名實共に漢民族の領土として完成された。然るに此の王朝は、其の軍事的機構に於て不備であつた爲め中期以來北方蒙古族の侵略に苦しみ、加ふるに東南沿海一帶には所謂倭寇の脅威を受け、遂に積年疲弊の結果は軍事費の膨脹を彌縫する爲の諸種の惡政を劃致し、それに基き勃發した內亂により一六四四年覆滅するに至つた。之より先き滿洲渾河上流の興京附近の部酋より興つた奴兒哈赤は漸次滿洲諸部族を統一して、一六一六年金國を興したが、一六二五年に國都を盛京即ち今の奉天に構へた。此の金國は一六三六年に淸國と改められ、奴兒哈赤即ち淸の太祖は晩年に明朝討伐の戰を開始したが、明は山海關を確保し、朝鮮・山東間の海上交通權を掌握してゐた爲め、滿洲軍の支那進入は不成功に終つた。太祖の子太宗は國內政治機構の整調を行ふと共に、一六二七、一六三七の兩年に朝鮮を討伐し、一六二八、一六三二の兩年に蒙古に遠征し、以て淸國の左右兩翼たる朝鮮半島及び內蒙古を確保した。斯かる父祖以來の經營の後を承けて、第三代世祖は叔父睿親王多爾袞

淸朝の北京占領

の輔佐により一六四四年山海關を突破して支那本土に進入し、明朝の後を襲うて北京に都した。爾來清軍は支那內地の大小叛徒を平定したが、南支那に據つて明朝の三王、卽ち福王・唐王・桂王を夫々擁立した明朝遺臣の反抗も一六六一年に至つて絶滅し、ここに支那本土は完全に清朝の治下に置かれる事となつた。此の後史上三藩の亂と稱せられる清軍に轉向した明の將軍等の內亂が起つたが、それ等も一六八〇年代の初期には平定され、又後述する臺灣鄭氏の反抗も亦この頃までには鎭壓する事が出來た。

支那の海禁政策

支那本土を掌握した滿洲族の王朝である清は漢民族の統治に當つては前代の明王朝の制度及び政策を踏襲し、巧妙な文化政策によつて漢人の反清思想を鎭め、爾來約一世紀半に亙る支那史上最も充實した太平時代を現出せしめた。是に於て漢民族の人口は急激に增加し、明代に約一億と稱せられたものが二億三億となり、支那の社會及び文化は圓滿な發達を遂げて其の爛熟期に達したのであつた。清朝の勢力は單に支那本土に止まらず、十八世紀に於ける幾度かの遠征によつて西北邊疆一帶に及び、滿洲は勿論內外蒙古及び新疆・西藏等明朝に於ては實質的に支配權を及ぼし得なかつた地域を統治するに至り、こゝに大清帝國は東亞大陸に動かすべからざる位置を占めたと言ふ事が出來る。

然らば支那の東南沿海及び海上諸國と清朝とは如何なる關係にあつたであらうか。廣大な支那本土に於ては古くより自給自足が可能であつて海外より物資の供給を必要としなかつたから、國民は歷代政府の農本主義政策の下に農田に束縛され、外國交通の著しい發展を見る事が無かつた。明朝政府は國初以來一小船たりとも海外に渡航する事を禁止して極度に國民の海外發展を抑壓した。然かし支那沿海相互間の海上貿易及び南洋の珍奇な特產物の輸入は、禁令の嚴しさに拘らず、莫大な利益を伴ふものであつたから、沿海地方に密貿易の生じたのは當然であつて、其の數は明朝の中頃から漸次增加した。彼等は漳州・泉州等の沿海大都市の富豪の出資によつて、遠く南洋方面へも出航してゐたが、明朝政府は彼等を稱して海寇と呼び、海賊の汚名をきせてゐた。彼等が沿海の土地を有しない人民であり、且つ其の貿易が掠奪的であつた事は當時の歐洲人の活動と比較して見て、これが當時の貿易の一般形態であつたとも思はれる。日本人の海外貿易者も亦武力的であり、支那人は之を倭寇と稱して彼等海寇と同樣に見做してゐる。斯かる海寇の增加は屢々沿海地方に暴動を生ぜしめる原因となつたから、明朝政府は幾度か海岸及び沿海諸島の農漁民を內地の一定地域內に移住せしめる所謂遷界なる政策をとつたが、遂に彼等の根絕は不可能なるのみか、明朝政權の失墜と共に却て力を得ることゝなつた。されば十七世紀初期の支那沿海には海寇、倭寇の日支兩國人の貿易活動が行はれてゐたのであつて、前章以來述べ來つた歐人の貿易は是等の密貿易者との交涉が深かつたのである。倭寇は日本が國人の海外渡航を嚴禁した十七世紀の三十年代から消滅したが、支那海寇は依然として殘き、山東の廟島列島、江蘇の東海島、浙江の舟山列島、福建の澎湖島及び臺灣、廣東の南澳島、上川島等の沿海島嶼が彼等の根據地となつてゐた。清朝は海航禁止の法令を幾分緩和したけれども、積極的海上發展は行はず、漸次歐人の支那貿易の發展につれて是等海寇は其の利益を侵害され、遂に純粹の海賊と化して行つた。

支那沿海の海寇

支那と東洋諸國との交通

次に一言すべきは支那に對する朝貢國の關係である。明清兩王朝ともに支那古來の中華獨尊の思想によつて支那本土以外の海外諸國は總て中國の威令下にあるべきものと考へ、他に自己との對立國家を認めなかつた。斯かる思想は高度に發達した支那文明を有する支那本土と他の文化の劣つた東洋諸國との關係に於て成立出來たのである。之等の

關係を或る程度まで實質的に確保するため、即ち支那以外の諸國を支那本土に害をなさない地位に置くために、清朝は朝鮮・安南・緬甸等に兵を出して其の藩屬國としての關係を維持する事に努めてゐたが、其の他の海外諸國に對しては實質的には何等の政治的關係は無かつた。支那との地理的關係によつて近隣諸國に對し或る程度の干渉を行つてゐる點を除けば、支那の王朝と東洋諸國とをつなぐ關係は朝貢にあつたといへる。明清兩王朝に對して朝鮮竝に印度支那半島の諸國、東方の琉球、或は更に南洋及び東印度諸島の國々の大部分は何れも朝貢使節を送り、我が日本も足利時代に一時これを行つた。而して朝貢とは實質的に見れば官營貿易である。朝貢使節派遣の回數は支那王朝の法律で定められ、使節一行は何れも多數の商人を隨伴して、支那への入國場所及び北京に於ける貿易を許されてゐた。更に規定の官營貿易以外に使節の個人的貿易も行はれ、支那政府は之に一定の稅金を課してゐた。海外諸國のかゝる朝貢使節は廣東その他の海港から支那に入國した爲に、これ等の港は當然外國貿易場となつたわけである。海寇の密貿易以外に於て公然と海外貿易の行はれたのは斯かる朝貢國の貢船であつた。然かし歐人の東印度諸島への發展は漸次これ等貢船の數を減じた事は言ふ迄もない。之を要するに、歐人の東洋貿易の發展は海寇或は朝貢船によつて僅に行はれてゐた東洋相互間の貿易をして衰頽せしめる一途を辿つたものであるが、次に其の經路を述べる。

朝貢船貿易

蘭人の澎湖島占據　東印度諸島に根據地を得た蘭人は葡人を驅逐して支那の生絲及び絹布を獲得せんとしたのは當然であり、殊に日本貿易を開始してより後は支那產物を獲得して日本に輸送する事が絕對的に必要であつた。既に一六〇四年にウァール・ウィーク提督に引率された和蘭艦隊は廣東官憲と貿易開始の交涉を開かうとしたが、マカオの葡人の妨害のため不成功に終つた。是れより蘭人はマカオの葡人を攻擊せんとし、ウァール・ウィークの艦隊は之を決行したが、颶風のため失敗に終り、澎湖島に漂著した。そこで福建省の支那官憲と貿易開始の交涉を開かうとしたが、逆に福建巡撫の軍によつて退去させられてしまつた。其の後一六〇九年蘭葡兩國は十二箇年の休戰條約を結んだが、其の期限の終了するや否や、一六二二年ライエルス・ゾーン提督引率の和蘭軍艦六隻は兵二千を以て第二回のマカオ攻擊を行つた。此の攻擊も惜しいところで失敗に歸したが、蘭艦は直ちに澎湖島に航行し、大山嘴の媽宮澳に上陸し、この地點に周圍支那尺百二十丈と傳へられる城砦を築いた。此の築造に當つて蘭人は約千五百人の在住漢人を使役したが、彼等に對する食糧供給が不充分であつた爲め、その中約千二百人は築城竣工前に死亡してしまひ、殘部は奴隸としてバタヴィヤに賣られ、其の過半數は船中の慘酷な待遇のため死んだと言はれてゐる。更に蘭人は當時この島に碇泊してゐた支那船六百餘隻を掠奪した。斯かる慘忍な方法を以て澎湖島に根據地を作つた蘭人は、爾來海寇の頭目李旦なるものと連絡し、盛んに福建海岸に出沒して掠奪的貿易を行つたが、福建省の支那官憲は之が鎭定のため再び出兵し、之を北山澳より澎湖島に上陸せしめ、蘭軍と對峙すること數箇月にして蘭軍守將を擒にした。こゝに於て兩軍間に和議が成立し、蘭人は同島から退去する事となり、その代りに臺灣に據る事を許された。思ふに、當時の支那官憲は臺灣を不毛の荒地と見て之を支那領土として重要視してゐなかつたやうである。

澎湖島に於ける蘭清の交戰

ゼーランディヤ城及びプロヴィンチヤ城

蘭人の臺灣占據と其の支那貿易　澎湖島を逐はれた蘭人は臺灣の南部に赴き、支那海寇船舶の輻輳してゐた臺江河口の要地に據り、今の安平の地に假砲臺を設けたが、ヨを完成した。續いて一六五〇年には今の臺南の地に一城砦を作つてプロヴィンチヤ城と名づけた。

斯かる間にマニラに於ける出航支那船との貿易に滿足しないで積極的に支那貿易を行はうとしてゐたフィリッピン

の西班牙人は、一六二四年頃から日本の天主教禁壓によつて日本貿易が不可能となるや、益々其の必要を感じ來つたのであるが、今や和蘭人が南臺灣に根據を構へた事は西班牙人の警戒心を一層强からしめた。かくて西班牙のフィリッピン總督は一六二六年遠征隊を組織し、臺灣の東海岸を經て該北端に至らしめた。彼等探檢隊は今の三貂角の地帶を踏査した結果、基隆の地點にサン・サルヴァドル城を築いたが、ついで一六二九年には今の淡水の地に在つた土民の城砦の跡を利用してサン・ドミンゴ城を設けた。北臺灣に根據地を設けた西班牙人は福建沿岸の支那海寇と貿易し、且つ和蘭人の日本貿易を脅かしたから、南臺灣の和蘭人は逸早く一六二九年に第一回の北臺灣攻略軍を送り、續いて一六四一年にも同樣な試みをなしたが、何れも失敗に終つた。然るに西班牙兵がミンダナオ島攻撃のために手薄となつてゐた一六四二年に行はれた第三回攻略軍は、比較的容易に西班牙人の兩城を陷落せしめ、北臺灣より西班牙人の勢力を驅逐する事を得、爾來西班牙人はフィリッピン以外に發展し得なくなつた。

サン・サルヴァドル城及びサン・ドミンゴ城

隣人の對清朝貢貿易

臺灣の根據地を確立した蘭人は更に進んで直接支那沿岸の海港に於て貿易を行はんとして、一六五三年に和蘭東印度會社からシェデルが廣東に派遣された。此の試みも亦マカオの葡人の策動によつて不成功に終つた。そこで之れより二年後カイゼル及びゴイエルの一行は朝貢使の形式をとつて北京に至り、新興清朝の世祖に貿易開始の請願をなした。然かし前述の如き對外思想によつて、清朝皇帝は自國の威德を慕つて朝貢使を派遣した和蘭を嘉賞して八年一回の朝貢貿易を許したのみで、和蘭東印度會社の希望した如き貿易に就ては問題にしなかつた。此の後も和蘭東印度會社は數回の朝貢使を送つたけれども、形勢を好轉せしむる事は出來なかつた。されば一方マカオの葡人を驅逐して其の特權を奪はうとする計畫を棄てず、一六六一年のマカオ攻撃等が行はれたけれども、何れも失敗に終つた。

是れより先き、明朝末期に福建地方の海寇の巨頭に鄭芝龍なるものがあり、臺灣を根據として隱然たる勢力を有してゐた。彼等一味は其の商業的利益によつて無數の船舶と巨大な資本を擁してゐたから、明朝は衰微の餘これを討伐する能はず、鄭芝龍に官位を與へて懷柔するの政策をとり、その福建海岸地帶に於ける支配權を承認する外はなかつた。明朝滅亡後鄭氏一派は明朝の遺子たる福王及び唐王を支持したが、其の望無きを知つた芝龍は清軍に內通して北京に赴いた。然るに鄭成功、卽ち國姓爺として日本人に知られてゐる芝龍の子は父の巨大な資本及び船舶の大部分を讓り受け、直屬の海陸五大商を始め多數の貿易商を統率し、軍隊を養成して沿岸各地より武力的徵稅を行つて財政的基礎を强固にした爲め、漸次他の海寇團を打倒して、福建沿海一帶に獨立的勢力を確保するに至つた。彼は父に反して清朝に降らず、厦門・金門の二島に根據を構へて清軍に反抗し、一六五九年には楊子江方面に進軍した。然るに鄭軍は勝に乘じて深入りし過ぎた末、翌年南京に於て大敗し、遂には厦門の根據さへも不安を感ずるに至つた。こゝに於て鄭成功は蘭人の占據してゐた臺灣に注目し、一六六一年春二萬五千の兵を百餘隻の大小船艦に分乘せしめ、先づ澎湖島を略し、五月の初め臺灣を襲うてプロヴィンチヤ城を陷れた。次でゼーランディヤ城を包圍すること九箇月、翌年一月之を陷落させ、蘭人の臺灣に於ける勢力を掃蕩し、バタヴィヤの和蘭東印度會社は引續いて臺灣回復の軍を出したが、遂に成功せず、占領後三十八年にして臺灣を拋棄するの止むなきに至つたが、蘭人が支那貿易の根據として最も力を盡した地方であつた爲め、この短期間に於て土民の統治に相當の效果をあげてゐることは注意すべきである。彼等は土民慰撫のために多數の宣教師をして天主教を傳教せしめて多數の信者を得、又これに附隨して行はれた教育事業が相當の效果をあげた事は、蘭人の教へたローマ字を用ひて土語を書き記す方法が後世まで土民の間に行は

鄭氏の臺灣占據

れてゐた事によつても知る事が出來る。

清朝の臺灣經營　清軍は臺灣の鄭氏討伐を續行したが、蘭人は之と合同して一六六三年その金門・厦門の攻撃を援助した。然かし其の後清軍と蘭人とは一致を缺いてゐる間に、臺灣の鄭氏は福建地方から農民を移住せしめて臺灣の開拓をはかり、其の島内經營は著々として進行して往つた。こゝに於て清朝は前述の如き遷界政策をとり、東南沿海の海岸線及び海島の住民をすべて内地に移住させ、以て鄭氏の孤立をはかつた結果、一六八三年に至つて清軍は臺灣を征定する事が出來、爾來この島は清朝の領土として漢人の發展するところとなつた。然るに清朝の嚴重な遷界政策は一般海寇の存在に大きな脅威を與へ、延いては蘭人の支那貿易を極度に減少せしめる結果を招いたのは當然である。こゝに於て和蘭東印度會社の清朝政府に對する正式の貿易許可獲得の運動は益々切實となつたが、前述した會社の清軍援助の如きも、之によつて清朝の歡心を買はうとする意味が多分にあつたのである。清朝は此の援軍派遣の功によつて和蘭東印度會社に二年一回の朝貢貿易を許し、福州港から入國することゝ定めたが、一六六七年には再び八年一回に減ぜられた。此の後に於ける會社からの數回の使節派遣によつて一六八六年には五年一回となつた。斯る多少の變遷はあつたが、和蘭東印度會社の運動は遂に成功するに至らず、一六八六年に清朝が廣東外國貿易を公許した頃から始めて毎年一、二隻の商船を廣東に送り得る樣になり、一七六二年にはこの地に商館が設けられたが、既に此の頃は英國の勢力が支那貿易に支配的地位を占める樣になつてゐた。

英國對支貿易の端緒　英國東印度會社は和蘭人に對抗しつゝ極東貿易の開始に努めたが、日本貿易が和蘭人の妨害のため失敗した後約半世紀間は支那に對する活動を中止せざるを得なかつた。されば一六三五年、一六三七年の兩年に東印度會社に屬しない英國船がマカオ及び廣東に來り、葡萄牙人の妨害の爲に貿易の目的を達せずして空しく歸つたこともあつたが、英國東印度會社が其の基礎の確立と共に支那海上に商船を派遣した最初は一六六四年であつた。

英人の臺灣貿易　即ち同年東印度會社所屬のスラート號はマカオに派遣されたが、葡萄牙人の猛烈な反抗にあつて貿易は思ひもよらぬ狀態であつた。そこで英人は蘭人を驅逐して臺灣の鄭氏と武器供給を條件として通商協定を結び、一六七一年以後臺灣及び鄭氏の勢力の下にあつた厦門に於ける支那貿易を開始し、一六七五年には厦門港に商館を設立した。是れよりマカオの葡萄牙人を驅逐する事の困難なるを知つた英國東印度會社は、厦門に根據地を確立して支那貿易を發展せしめる方針の下に進んだが、一六八一年厦門に於ける鄭氏の勢力は清軍のために驅逐され、新たに此の地を占領した清朝官憲は英國人の貿易を從來の如く寬大には取扱はなくなつた。斯くて英人は再び廣東港に眼を向け始めたが、時恰も一六八五年清朝は諸外國の民間貿易を許可した爲め英國人に於ける葡人の妨害を克服して廣東の清朝官憲より貿易許可を承認された。爾來歐洲本國に於ける英葡兩國國勢の興廢に比例して英國人の廣東貿易の隆盛と葡萄牙人のマカオ貿易の衰頽となり、英國東印度會社は更に厦門・寧波・舟山列島に於ても貿易を開始した。

歐人支那貿易の廣東集中　然るに廣東港に於ける清朝官憲の莫大な關稅その他の誅求は英國人の貿易の利を損すること甚だしく、爲めに東印度會社は一七五五年頃から專ら寧波・舟山列島に於ける貿易を發展せしめる政策を取つた。斯かる英人の活動は外國人の活動區域を一地方に制限しようとする清朝官憲の政治的軍事的方針と反し、且つ又關稅の徵收に不便を來たした爲め、一七五七年清朝皇帝の勅令によつて歐洲諸國人の支那貿易港は、マカオの葡人を除き、廣東の一港に限ること

となり、斯くして十九世紀中頃の南京條約に至るまで一世紀間英國を主とする歐米諸國の支那貿易は廣東及びマカオの二港のみに於て行はるゝ事となつた。

佛・墺・普・丁・瑞諸國及び米國の支那貿易　英國と競爭的地位にあつた佛國の東印度會社は支那貿易に於ても對抗的態度をとつたが、廣東貿易に於ては印度に於けるよりも一層強く英國の勢力に壓迫された。元來佛國東印度會社の商船の始めて廣東に派遣されたのは一六六〇年で、又この港に佛國商館の設けられたのは一七二八年であつて相當古いのであるが遠隔せる支那に於ける活動に對しても歐洲に於ける英佛兩國の抗爭は著しい影響を與へ英國との交戰毎に佛國船の廣東來航は杜絶し、佛國東印度會社の廣東貿易は十八世紀末には衰退の極に達した。以上述べた蘭・英・佛・葡・西五國以外の歐洲諸國の支那貿易は微々たるものであつたが、其の大要を述ぶれば次の如くである。墺太利（オーストリー）は一七二二年から五年間に亙つて支那方面に商船を送り、一時中絶したが、一七五五年以後再び微かながらも貿易を續けた。普魯西（プロシヤ）は一六八四年以來東洋貿易の計畫を樹て、一七五〇年にアジア通商會社が興され、一七五二年其の商船が始めて支那に來航したが、其の後頗る振はなかつた。又伊太利の商船は千七百八、九十年代に多少廣東に入港したが、同じく永續せず、十八世紀に入つて歐洲より印度航路をとつた西班牙の商船も伊太利と同じ年代に多少活躍したが、毎年三隻以下の商船を送つたのみである。最後に比較的著實に廣東貿易を行つたのが丁抹及び瑞典の兩國であつて、前者は一七二八年支那通商の會社を設けて以來連年廣東に商船を送り、後者は一七三一年以後廣東貿易に從事した。

北米合衆國の廣東貿易　一七八三年に獨立した北米合衆國の商船が始めて廣東に入港したのは一七八四年のことで、これ以前米人は英國東印度會社を通じて東洋特產物を手に入れてゐたが、北太平洋の毛皮を支那に輸入するの利益あるを見て獨立後直ちに支那貿易に乘出したのである。米國人の支那貿易は他の歐洲諸國の如き特權を有する會社の獨占事業ではなく、ボストン及び紐育地方の冒險的商人の個人的活躍であつて、合衆國政府も建國後未だ間もない事とて特に保護を與へる違はなかつたが、彼等は何の束縛をも受けずに自由な活動が出來た爲めに、其の新大陸の財源を基礎として華々しく英國の支那貿易に割込んで行く事が出來た。尙ほ十九世紀中頃に至るまでの米人の支那貿易航路はボストンより大西洋を越えてアフリカを迂廻し、印度航路をとつたものである。

英米兩國の廣東貿易に於ける發展　十八世紀の廣東を中心とした支那貿易は英國の支配するところとなり、次で北米合衆國がその好敵として擡頭して來たのであるが、こゝに此の事實を具體的に表はすために、英國東印度會社の殘存記錄によつて歐米各國商船の廣東入港商船數を左に記錄の缺除した年のものは計算に入れてない。此の表は大體各五年毎の平均數を示したものであるが、

廣東入港商船數

年代＼船籍の國別	英國	米國	佛國	和蘭	丁抹	瑞典	其他の諸國
一七三二、三四	四・〇	—	〇・五	二・〇	〇・五	〇・五	〇・五
一七三六—四〇	四・八	—	二・四	二・六	一・二	一・二	—
一七四一	五・〇	—	二・〇	二・〇	一・〇	四・〇	—
一七五〇	七・〇	—	四・〇	四・〇	二・〇	二・〇	—
一七五一	一〇・〇	—	二・〇	四・〇	一・〇	二・〇	—
一七六四	一七・〇	—	四・〇	四・〇	二・〇	一・〇	—

一七六八	一五・〇	—	四・〇	四・〇	一・〇	一・〇	一・〇
一七七一—七三、七四—七五	一七・四	—	四・三	四・三	一・八	一・八	—
一七七六—八〇	一九・二	—	三・二	四・〇	二・四	二・二	〇・四
一七八一、八三—八五	二〇・五	〇・三	三・三	二・〇	三・三	二・三	三・三
一七八六—八八、九〇	五二・八	四・三	二・三	四・三	一・八	一・三	二・五
一七九一—九五	三五・八	六・四	一・三	二・三	〇・四	一・〇	二・〇
一七九六—一八〇〇	三六・四	一五・三	—	—	三・六	一・三	〇・四
一八〇一—〇五	四〇・一	三一・六	〇・四	〇・二	一・四	二・六	一・四
一八〇六—一〇	五一・六	二五・六	—	—	—	—	〇・四
一八一一—一五	四二・〇	一九・五	—	〇・四	—	—	—
一八一六—二〇	五二・八	三一・六	—	〇・四	〇・四	—	—
一八二一—二五	五〇・八	三七・四	—	—	—	—	—
一八二六—三〇	七四・六	二八・八	一・〇	五・〇	二・〇	—	一・八
一八三一—三三	九七・〇	五四・〇	三・七	七・七	二・〇	—	二・〇

入港船型の增大

右の表は單に隻數のみを示してゐるが、貿易の發展には船の大小をも考慮に入れねばならぬ。即ち英國東印度會社の支那貿易船に就て見ると、大體貿易開始當初より一六八〇年代までは二百噸未滿のものであつたが、十七世紀以來の二十年間は三百噸程度となり、それに續く十八世紀初頭の二十年間は四百噸程度となり、更に一七二〇年代より大體五百噸のものとなり、同時に各船舶の噸數が一定して從來の如く大小不揃ひなことが少なくなつてゐる。一七七〇年代に至ると七百噸から八百噸に至る五種の船舶が主要商船となり、其の後これ以上の大型船が漸次增加したが、

大型船の國籍

十八世紀の最後には大體千噸級のものが普通となり、十九世紀に入つてからは更に千二百噸級となり、その三十年代には千五百噸程度のものが現はれてゐる。前の表にあらはれた英國商船數は會社船と他の私的貿易船との兩者を含んで居り、後者の噸數は前者のそれに比して遙かに小さく、從つて貿易額も少額であつた。然るに英國以外の諸國商船は英國東印度會社船と同等或は其れ以上の大型船が主となつてゐたから、前の表に於ては單に船舶數のみの增加を以て單純に英國の優勢をきめてしまふわけには行かない。試みに記錄の明瞭な一七三七—四一年に就て見ると右表の如き結果となり、英國が船舶數に於て多數を有するも、一隻宛の噸數は他の四國に劣つてゐることを如實に表はして居る。

國別＼件別	全船舶總噸數	全船舶隻數	一隻平均噸數
英國	一一、六〇五	二四	四八四
佛國	八、二〇〇	一三	六三一
和蘭	八、一〇一	一三	六二三
丁抹	四、二〇〇	六	七〇〇
瑞典	五、四五〇	九	六〇六

然るに英國船舶そのものが漸進的に進歩して大型となつて行くに比して、他の諸國のそれは遲々として進歩しなかつた。之を一八三一—三三年の三年間に就て見ると上表の如き結果があらはれる。

國別＼件別	全船舶總噸數	全船舶隻數	一隻平均噸數
英國	一八五、三三〇	二九一	六三七
佛國	四、六〇〇	一一	五〇八
和蘭	一六、七六〇	三三	四一八
米國	六五、四〇〇	一六二	四〇二

此の如き事をも考慮して最初の廣東入港船隻數表を見ると、十八世紀中頃から他の諸國を壓倒し來つた英國商船が、十九世紀初期に至つて廣東貿易の大

部分を獨占するに至り、又この新世紀に入つて新興の米國が英國の好敵手となつた一面に、英國以外の歐洲諸國の支那貿易の衰頽し來つた經路を明かにし得るであらう。

英人の對支貿易發展政策　斯かる英國の支那貿易の發展は、本國に於ける十八世紀後半以來産業革命發展による生産力の近代化に根本的原因を有したゐた事は言ふまでもない事であり、歐洲に於て第一に産業革命の洗錬を經た英國國民が其の生産品の販路と材料の獲得地域を求めて急速に世界の隅々にまで發展し、遂に海上の王者となつた事は何人も知るところで、支那貿易は其の最も顯著な一つであつた。

支那は當時三億有餘の人口を擁し、且つ諸種の材料資源に富んだ大國であつたから、英國近代産業の發展につれて其の生産品の販路としても將た又材料の供給地としても英國人の發展すべき地として此の上もなく有望な國であつた。然しながら十八世紀の支那は、乾隆帝の下に支那史上未曾有の隆盛時代であつて、强國な政府と進歩した社會とを有し、他の東洋諸地方の如く容易に英國經濟力の犧牲になり得る程度のものではなかつた。英國人は貿易を廣東一港に限られたのみならず、貿易取引の相手は清朝政府の公許した特殊の商人に限られ、且又廣東官憲に重い貿易稅を支拂ふのみならず、それをも超過する賄賂を贈らねばならなかつた。されば本國に於ける産業の發展竝に印度經營の進歩に伴つて、支那貿易擴張の必要が漸次增加したにも拘らず、英人の廣東貿易は其の必要に應ずるだけの發展を遂げる事が出來なかつた。是に於て兩國の貿易を確實な條約的基礎の上に置き、且又廣東以外の支那海港の開放等を目的として直接北京政府との交涉を開く事となり、英國東印度會社は本國政府と共に畫策し、遂に一七八七年本國政府はカスカート中佐を此の目的を以て支那に派遣した。然かし途中で中佐が死亡した爲に此の使節派遣は中止となり、次

交涉使節の派遣

で東印度會社は本國政府に勸說して當時英國政界の一流人物の一人であつたマカルトニー卿を支那に派遣する事となり、卿は一七九三年北京に到著した。然かし大英帝國といへども一般朝貢國と全く同等に見做してゐた清朝政府はマカルトニー一行を待遇するに朝貢國使節の禮を以てし、英國側の通商要求條項には耳をかさなかつた。此の第一回使節の失敗にも屈せず、英國政府は一八一五年アムハーストを北京に派したが、アムハーストはマカルトニーに比して大英帝國使臣たるの誇りを主張することが强かつた爲め、第一回使節ほどの效果も得る能はずして空しく歸國する外は無かつた。思ふに清朝側は英國人の支那貿易を目して、中國の寵命を慕つて支那に來る外夷に對する恩惠的待遇として居り、從つて英商人の態度に不穩なところがあれば直ちに貿易停止を以て彼等を威嚇してゐたのであるから、英國政府の要求する近代的意味の通商條約の如きは全然清朝官憲の念頭に無い事であつた。されば二回の英國政府大官の使節一行は、如何に支那官民が英國人を輕侮してゐるかを體驗したのみで、清朝政府よりは何等の實質的利益を獲得する事が出來なかつたのである。

支那官府農民の汎濫

清朝統治の動搖と沿海の海賊　斯くして英國は其の目的を貫く爲には、武力の行使以外に方法が無くなつたのであるが、十九世紀初頭までは尙ほ遙々極東に兵を送つて、老大國支那を壓迫する決意に達するだけの自信を有しなかつた。然るに支那內部に於ては、打續く太平によつて人口の急激な增加を示し、支那本部の耕作面積に對する過剩人口を增大せしめたが、其の産業機構は强力なる官僚主義的專制國家の制壓の下に近代的な發展をなす能はず、爲めに大地主に隷屬する小作人と、零細な土地さへも失つた農民の群とは、乾隆時代の繁榮の裏面に於て漸次增加して行つたのであつた。斯かる過剩人口の一部分は政府の政策に反抗して、滿洲・內蒙古等の邊疆地帶に流れ出で、そこに支那

農業社會を擴張したが、東南一帶の過剩人口は海外發展の道を絶たれてゐた。僅に清朝政府の許してゐた臺灣移住の如きは、莫大な過剩人口を收容し得なかつたことは、清朝政府の臺灣經營が積極的でなかつたのにも拘らず、この島が忽ちにして漢人を以て充たされた事を見ても明かである。斯かる過剩人口の增加は支那社會の諸種の內部的矛盾を激化せしめ、清朝の政治機構が長年の太平につれて緩みを生じた十八世紀の終末頃から、諸種の內亂を生ぜしめる要因をなした。斯くして一七九五年に於ける貴州苗族の小叛亂が動機となつて、其の翌年から白蓮教徒の大亂を生じ、湖北省以西の五省は約十年間に亙つて動搖したが、一八一三年には山東・河南・直隸の北部三省に天理教徒の亂が起つた。是等教徒の亂といはれるものは、支那各地に於て大小を通じて多數生じてゐるが、要するに祕密結社の指導した反官運動が、貧窮にあへぐ農民の支持によつて勢力を得たものである。清朝政府は是等の內亂を辛うじて鎭定し得たが、その統治に動搖を生じ來る事をば如何ともする事が出來なかつた。

支那の海賊

斯かる支那內部の混亂と相應じて東南海上も亦た不穩な形勢を釀し出した。前述した安南の阮王朝は建國期に於ける財政の基礎を固める一政策として沿海の海賊の巨頭に官位を與へて之を懷柔し、彼等に船舶を給して其の掠奪乃至は掠奪的貿易を奬勵し、彼等の利潤を以て國家收入の增加をはかつた。其の結果、安南沿海の海賊は急速に蔓延したが、彼等の活動範圍が廣東沿海に延びて來ると、既に海賊化してゐた支那の海寇が之と呼應して活動し、清朝が敎徒の內亂に力をそゝいでゐる隙に乘じて猖獗を極め、廣東省より福建・浙江諸省の沿海地方に暴威を逞しうするに至つた。併かも沿岸地方の地方官は沿海居民が彼等海賊と交易を行ふのを默認するものが多いほど綱紀が紊亂してゐた爲め、彼等の勢力は益々盛んとなつた。彼等海寇の勢力を示すものとして、現在殘つてゐる當時の記錄に徵するに、

支那の海軍力

或る英人の記事によれば、一八〇六―七年ころ廣東方面の海寇の一團は既に二萬五千餘人の多きに達し、小は十五噸から大は二百噸に及ぶ大小船舶五百餘隻を有し、大船には六斤乃至十八斤の砲十二門を備へたものもあつたといふが、更に一八〇九年頃には人員七萬人となり、大船八百隻、小船一千隻を有し、各船に十二門乃至二十五門の砲を裝備してゐるものは珍らしくなかつたといふ。又一八一〇年清軍に投降した廣東海賊の一巨頭は部衆五千餘人、大小船舶九十餘隻、大小砲四百餘門を有したと清朝の記錄には見えてゐる。斯かる海賊の猖獗、卽ち所謂艇盜の亂は清朝の福建廣東兩省に於ける海軍の力では殆んど鎭壓する事が出來なかつた。抑も清朝沿海防備の海軍は福建・廣東の兩水師提督によつて統轄されてゐたものが主體となつてゐたが、之を陸軍に比較すると問題にならないほど貧弱なものであつた。從つて外敵の防禦といふ意味もなく、海外遠征の意味の如きは猶ほ更ら無かつたので、單に沿海を警備して漁民を取締り、海寇の增大を防ぐといふ消極的な目的しか持つてゐなかつたが、これは前述の通り清朝政府の中華獨尊の思想による政策としては當然であつたのである。斯かる緩慢な海防組織の下にあつて、海寇の存在は依然として續いてゐたが、聽て彼等は安南海賊の刺戟を受けて俄然强力となり、東南海上に雄飛するに至つた。思ふに、彼等を以て單に海賊と言つてしまふのは正當な解釋ではなく、清朝政府の鎖國政策の下に於て變態的な形をとつた支那人の海外發展の表はれと見るべく、內地に於ける人口過剩や歐人の支那貿易の發展に伴つて漸次有力となつたものが、安南海賊の跳梁が動機となつて斯かる內亂的勢力となつたものと謂へよう。併し斯かる海上の不穩な形勢及び海賊の密貿易の發達は歐人の支那貿易の障碍をなすものであつたから、直接脅威を感じたマカオの葡萄牙人を始め歐洲諸國の商船隊は之が鎭定に助力したが、清朝は一七九六年以來約十五年を經て漸く之を平げることが出來た。然かも其の

鎖定は海軍の擴張による積極的方法によつたのではなくして、沿海居民の隣保制度を嚴重にして海寇との貿易を嚴禁し、彼等の糧道を絶つといふ消極的な方法の勵行が效を奏した事が最も重大な原因をなしてゐる。斯くて清朝政府は畸形的ながら發展した國民の海上雄飛の萌芽をば多大の財政的犧牲を拂つて斷絶してしまひ、其の鎖國主義を固守する政策を盲目的に維持して往つた。

斯かる頑迷な政府の下にあつた老大國が爾來歐米列强の侵略舞臺となる運命に置かれるに至つた經路は次節に讓り、次に南方海上より歐人の東洋發展に對應して北方陸路より極東に進んで來た露國の活動について述べる。

三、露人の東進

露人進出以前の太平洋北部　太平洋南部が古くより歷史の舞臺に現はれたのに反して、北部に於ける歷史的發展は遙かに後れてゐる。露人が此の方面に出現する十七世紀まで、東部シベリヤよりカムチャツカ地方に至る北太平洋沿岸地帶は毛皮獸の棲息した荒野に、主として是等獸類の狩獵によつて生活した諸種の未開の種族が分布してゐたのみであつた。彼等の分布狀態は長い年月の間に幾多の變遷を經た事は言ふ迄もないが、十七、八世紀に於ける大體の狀態は次の如くであつた。卽ち、アラスカ半島からアリューシャン群島一帶には主としてエスキモー族、この地帶からカムチャツカ半島にかけてカムチャダール族が居り、シベリヤ東北端の半島にチュクチ族、其の南方にコリヤック族、更に其の南方なる黑龍江下流域より沿海州にかけてギリヤーク族、その對岸の樺太にアイヌ族が分布してゐた。是等の諸族は原アジア族と總稱され、太古時代にアジア大陸の內部にゐたものが次第に大陸の果てに驅逐されたものと言はれてゐる。次に黑龍江の中流域以西、バイカル湖地方以北の東部シベリヤ一帶には、原アジア族に屬する小部族が幾分は散在したが、大部分はウラル・アルタイ系のツングース族が分住し、正統のツングース及サモギール、ネギタル、オルチャ、マネギール等の小種族に分れてゐた。此のツングース族は更に黑龍江流域及び其れ以南の滿洲一帶に分住し、滿洲族、ソロン、オロチ、ゴルド等の小種族に區別されてゐた。

沿海州方面の原住民族

以上述べた諸種族のうち早くより支那文化の影響を受けた滿洲族は文化の程度も高く、渤海及び金の兩國家を形成した事があり、清朝も亦た滿洲族の國家であつた。然かし此の特殊の場合を除く外、一般はツングース族及び原アジア族の文化は極めて低く、狩獵或は漁撈によつて衣食の料を得、住居には多く天幕を用ひ、時に從つて適當の場所を擇んで居を移すのを普通としてゐた。從つて、純粹の遊牧民ではなかつたが、村落を形成する如き程度には發達してゐなかつた。たゞ黑龍江沿岸の諸部族の間には旣に定住して農耕を營むものも存在してゐたやうである。彼等諸部族はシベリヤの曠野に橇を用ひ、又小舟を以て北太平洋沿岸の航行を行つてゐたが、小種族は更に幾多の部族に分れて小集團をなしてゐたのみで、相互の領土的觀念などは皆無で、未だ嘗て國家的に統一された事は無かつたのである。

清朝の滿洲征服

清朝は十六世紀末に興つて滿洲內外の諸部族を征服したが、十七紀中頃までには黑龍江の下流々域より中流々域に至る江の南北岸一帶に清朝の威令が及ぶに至つた。清朝の是等地方の征服は征服地帶の壯丁を徵收して兵士又は農業奴隸として捕へ歸る目的で行はれたものであつて、征服を終つた地方に於ては殘留土民から毛皮・人參等の產物を貢納せしめる外は何等の義務を負はせず、又何の恩惠をも施さなかつた。從つて漢人農民の幾分が發展してゐた奉天以南の地方を除く外、北滿洲には土民の統治機關は存在せず、たゞ滿洲軍の駐屯した營所と毛皮稅徵收官吏の巡行のみ

が黑龍江南北地帶の土民に對する清朝の施設であつた。

露人東進の端緒　飜つてシベリヤの曠野を隔てた北歐露國に就て見ると、此の國は十五世紀の初、蒙古族の支配から脫して以後、大小諸侯の相互抗爭を經て同世紀末にモスコウ王國によつて統一された。斯かる政爭の間にあつて發達した自治都市のうち北方のノヴゴロッドはモスコウに匹敵した大都市であつて、其の商人は中歐の諸都市との貿易によつて其の經濟的基礎を作つてゐた。彼等は中歐に輸出する最も重要な商品である毛皮を獲得する爲めに漸次東方ウラル山脈西麓に植民を行つたが、一三六四年には此の山脈を越えてオビ河畔に遠征隊を送つた事さへある。此の露人最初のシベリヤ發展が進行しないうちに、ノヴゴロッド市は十五世紀末にモスコウ市に併呑されてしまつたが、それより約半世紀後ノヴゴロッドの巨商であつたストロガノフ家は、北ドヴィナ河の中流々域で製鹽業を起し、其の富力によつてシベリヤ土人と毛皮貿易を開始した。此の頃一五四七年にイワン四世が皇帝（ツァー）の位に卽くに及んで基礎を强固にしたモスコウ王國は、當時歐洲に於ける海外通商の勢に對抗すべき海港獲得を目的として西南國境の擴張を圖つたが、未だ東方進出の餘裕を有しなかつた。然かし北氷洋に出沒する英國船の活動に刺戟されて、先づ前述したストロガノフ家にウラル山脈西麓中部のカマ河畔の土地を與へ、その開拓を條件として軍隊養成の特權を附與し東邊國境の防備を擔當せしめた。是れより國家は毛皮獲得と銀鑛發見の目的を以て該地域に植民を行つた。

ノヴゴロッド市民の東方發展

當時ウラル山脈の東方イルチシ、トボル兩河畔一帶の地はオスチャック・ヴォーグル等の芬種に屬する部族が分住し、彼等は今のトボルスク附近のシビル城砦に根據を構へた土耳古韃靼族の一種で、慓悍な韃靼族に支配されてゐた。此の韃靼族の酋長エヂゲルはイワン四世のカスピ海沿岸征服の結果として、モスコウ王國に歸服しシベリヤ侯に封ぜられたが、一五六三年には他の韃靼族の酋長クチュムの爲めに殺され、爾來シビル城に據つたクチュムは西方露人の住地を侵略するに至つた。

オビ河流域の征服

エルマックの遠征　是に於てストロガノフ家の毛皮獲得は困難となつたのみならず、自衛の爲めに軍隊の增加さへ必要となつて來たが、此の時、同家の爲に適當の軍隊が現はれて來た。是れより先きイワン四世のカスピ海北岸の征服によつて露國と波斯との通商が發展したが、露國隊商は屢々沿道にてコサックの掠奪を被むつた。依つてイワン四世はコサック膺懲の軍を出し、其の一部をカマ河畔に驅逐したが、其の中にエルマックに引率された五百數十人の一隊があつた。住むに土地無く、歸鄕すれば刑罰が待つてゐた彼等は、遂にストロガノフ家の保護を受けるに至つた。斯くして一五七八年、エルマックの一隊はストロガノフ家より兵器糧食を供與されてウラル山脈以東の韃靼族征服に向つて出發し、爾來數年各處に轉戰し、一五八一年十月遂にシビル城を陷れ、翌年までにオビ河上流々域を略ぼ征服した。此の新領土は直ちにモスコウ皇帝に獻上され、一五八三年にはイワン四世より任命されたシベリヤ太守がシビル城に赴任し、土民を管理する事となつた。エルマックは功によつて前罪を赦されたのみならず、シベリヤ公の爵位を授けられた。彼は此の後も尙ほシベリヤの新領土にあつて戰を續け、領土の擴張を圖かつてゐたが、一五八四年八月イルチシ河畔に戰死を遂げ、加ふるに此の時の敗戰によつて彼の勇猛な部隊が四散した結果、露國新領土の軍事的基礎は急に動搖し、久しからずしてシベリヤ太守はシビル城を放棄し、已むなくモスコウに引揚ぐるに至つた。

コサック族の起源

便宜上こゝに露人のシベリヤ征服の武力的活動の主體となつたコサックなるものに就て、簡單な說明を加へて置かねばならぬ。コサックは人種的に見ると、十三世紀に於ける蒙古人の侵入に際し、南方ドン河流域に逃れた露西亞人

と該地方土人との混血種に起源を有するものであるが、十六世紀以後露國に於ける農奴制の激化と共に內地から逃亡した農民がコサックに合流して、其數を著しく增加せしめた。彼等は狩獵と漁撈とを主なる生活手段としてゐたが、其の人口の增加に從つて露國の東南邊境地帶を開拓して農業を營むに至り、半定著的半遊牧的な生活を送つてゐた。然かも東方より斷えず韃靼族の侵略を受けてゐた爲め生活の半ばを戰鬪に割かなければならなかつた結果、彼等は自から勇敢な性質を帶びて來たのである。是に於てモスコウ政府は東南邊境防禦の一方法としてコサックを優遇し、時には流刑囚を送つて其の增加を圖つたが、彼等の內地歸還は嚴重に禁止した。斯かる條件の下にコサックはドン及ドニエプル兩河の河岸一帶に擴がり、隱然たる一勢力をなすに至つたのである。

トボルスクの建設

露人のシベリヤ東進　エルマック戰死後シベリヤを引揚げた露人は、歸國の途上に於て同年卽位したテオドール帝から派遣された將軍マンスロフの一隊に出遇ひ、再びシベリヤに引歸へしたが、シビル城回復を一時斷念し、一五八七年トボル、イルチシ兩河の合流點附近にトボルスク城砦を建設した。爾來テオドール帝の陸續派遣した遠征隊は漸次シベリヤの征服を進め、一五八八年より一五九〇年に至る將軍チュルコフの征伐によつて、ウラル山脈の彼方オビ河の本支流々域一帶の地域は露領として確立し、一五九〇年トボルスクを其の首府と定めた。斯くして重要地點に城砦が設置せられ、內地から農民の移住が實施されたが、一五九八年にテオドール帝の死後より十數年間の所謂暗黑時代には露人のシベリヤ經營は挫折し、一六〇四年にトムスク城砦の設けられたほか特筆すべき事無く、土民の蜂起が相次で起つた爲め、露領シベリヤの根據も動搖する狀態であつた。

エニセイ河流域の征服

十七世紀初頭にロマノフ王朝がモスコウ王國に君臨して政界が安定するや、其の第一代皇帝ミカエル一世は北歐の兩强國たる瑞典及びポーランドと和約を結び、バルチック海方面への進出を一時斷念し、專らシベリヤ發展に努力する政策を取つた結果、此の皇帝の治世中に於て露領シベリヤは著しく東方に擴大される事となつた。斯くしてエニセイ河流域の攻略が開始されたが、一六〇七年に創設された同河下流のツルハンスクを基點として上流地方に遠征隊が送られ、ツングース族との戰鬪が繰返へされた後、一六二〇年遂にエニセイスク城砦を建設した。次で一六二三年にはドーベンスキーの遠征隊はエニセイ河本流を溯り、一六二八年ベケトフの部隊はアンガラ河右岸にルイビン城砦を設け、之を根據地として同河流域の土民を征服した。

レナ河流域の征服

斯くしてシベリヤ三大河の流域の中、オビ、エニセイ兩河一帶の地域を征服したので、殘れるものはレナ河流域のみとなつた。一六二九年エニセイスク太守ヤコブはエニセイ河の水源たるバイカル湖遠征の命をうけて其の北方イリム河に達したが、此のとき彼は部將を派してレナ河上流の偵察を行はしめた。此の偵察隊の報告によつて、レナ上流域に毛皮獸の豐富な事を知つた露人は忽ち此の地方に著目し、一六三一年ガルキン引率のコサック隊三十名はイリム河よりレナ河上流域に進んだが、其の後繼者たるペケトフの部隊は更にレナ河を下航し、一六三二年ヤクーツクに城砦を建設した。續いてレナ支流のオレクマ河に遠征隊が送られ、一六三五年其の河口にオレクミンクス城砦が設けられた。是に於てヤクーツク城砦は、露領東部シベリヤの中心となり、一六三八年城砦は近傍の地點、卽ち現在のヤクーツクの位置に移轉された。此の地帶より東方はスタノヴオイ山脈によつて遮られてゐた爲め、山岳地帶に慣れないコサックはヤクーツクより北部に向つて發展し、一六三六年エリセイ・ピュザ引率のコサック隊はレナ河を下航して北氷洋に達したが、彼等の數年に亙る北氷洋に流入する諸河川の探檢に續き、一六四〇年にスタヅヒンがコルイマ河

を發見して河畔に城砦を建設するに至つて、露國のシベリヤ領土は北氷洋の最東端の河川にまで及んだ。

是に於てシベリヤ東北端の事情が明かとなり、露人の冒險者流は毛皮の巨利を夢みて此の方面に蝟集したが、其の一人であるデジネフは、七隻の小帆船に二十五人の乘組員を以て一六四八年六月コルイマ河口を發し、チュクチ（デジネフ）半島を迂廻してベーリング海峽を經、同年十月僅か一隻の船を殘したのみでアナディール河口に達し、河を溯つてアナディルスク城砦を建設した。此の後久しからずして陸路から此の地方に達した露人冒險者とデジネフ一派との私鬪が行はれ、遂にデジネフ等は其の根據地を奪はれてしまつたが、其れは兎も角として、露人の勢力は十七世紀の中頃までにアジア大陸の最東北端に及ぶ事となつた。

オホーツク海進出

斯かる一方、ヤクーツクの露人は交通不便なる東方の山脈地帶を越えてオホーツク海方面に探檢隊を送つたが、一六四七年に至つてアクナシェフ引率のコサック團五十餘名は遂にオホーツク城砦の建設に成功した。其の後オホーツクの露人は土民の頑強な反抗に遇ひ、一六五四年には城砦を燒打ちされた事もあつたが、次第に之を鎭定してオホーツク海西岸に露人勢力の根據地を確立した。以上の如くにして、ウラルを越えて以來約七十年間の短期間に於て露人は遂にシベリヤの東端にまで到達したが、アナディール、オホーツク兩地點に於て一時停滯し、眼前に控へてゐるカムチャツカ半島に發展したのは約半世紀の後である。之はシベリヤ東端の地勢が露人發展の障碍となつた事も其の原因の一つであるが、シベリヤ露人の關心が黑龍江方面に向けられた爲めである事も見逃すわけには行かない。

露人の黑龍江進出　露人のバイカル湖地方征服は、該地方の土民中の一部族である慓悍なブリヤート蒙古族の反抗によつて手間取り、湖畔にイルクーツク城砦の完成したのは一六五一年、卽ち征服開始後約二十年の後であつた。此の征服の進行中に二、三の遠征隊は黑龍江上流々域に關する情報を齎らし歸つたが、之に基いて一六四三年ヤクーツクを出發したポヤルコフの一行はアルダン、ゼヤ兩河を經て黑龍江を航下し、オホーツク海上に出でて、こゝからウリヤ河を遡航し、一六四六年ヤクーツクに歸還した。續いて一六四九年にはハバロフの一行が同じく黑龍江探檢を行つた。是れ等の探檢隊は黑龍江流域の土民中には農耕を營むものがある事實を報告したが、一年のうち二百日の凍氷期を有し、穀物の獲得に頭を惱ましてゐたヤクーツク地方の露人は此の報告に基いて狂喜し、直ちに黑龍江方面への發展活動が開始された。

最初の清露衝突

先づヤクーツク太守は本國政府に進言してジノヴィエフ一行の遠征隊を送らしめ、シベリヤ各地より公私數隊の探檢隊を送つた。ハバロフの第二回探檢も亦その一つであつて、彼は自費を以て募集した義勇兵とヤクーツク太守からの援兵とを以て一六五一年第二回の黑龍江下航を行つたが、既にポヤルコフ遠征隊の殘虐な行動によつて江畔の土民は農田を棄てゝ逃亡して仕舞つたもの多く、加ふるに微弱ではあつたが、此の地方には清朝の威令が及んでゐた爲に、土民は露人に對して毛皮の貢納を拒んで清朝に援助を求めた。斯くして同年六月ハバロフ軍と毛皮稅徵收のために派遣された清朝の滿洲騎兵五十騎との間に、第一回の露清衝突が起つた。之によつて清朝の北邊警備を擔當してゐた寧古塔（ニンクタ）の海色（ハイセ）將軍は軍を黑龍江に派遣したけれども、ハバロフ軍に敗られ、七百人の戰死者を出した。宛も此のとき黑龍江に到著したジノヴィエフはステパノフを黑龍江司令官に任じて土民の征服を行ふと共に、黑龍江下流々域にてハバロフの創設したコマルスク城砦の經營に從事したが、彼が本國政府から委任された農業の開發は土民逃亡の爲め甚だ困難であつた。ステパノフは此の城砦を根據としてギリヤーク族の住地を襲ひつゝ、一六五八年糧食の徵發を

目的に松花江を溯航した。是より先き清朝當局は、松花江下流々域の土民を上流地域に移住せしめて、露人の暴虐より保護したが、今や露軍の南進するを見て、寧古塔の沙爾呼達將軍は兵船四十七隻を以て之を迎へ撃ち、ステパノフ軍をして慘敗せしめた。次で清軍は北進し、一六六〇年黒龍江下流々域のギリヤーク族居住地に於ける露人を驅逐し、同方面を清朝の威令下に置くに至り、露人の根據地は破壞されてしまつたが、一方この河の中流地帶には前エニセイスクの太守パシュコフが一六五六年以來土人の掠奪を制止して鋭意農業開發に力をそゝぎ、アルバヂン城砦を建設した。然かし此の比較的著實な經營に從つたパシュコフもステパノフの敗戰の影響を蒙つて、遂に空しく退去せざるを得なくなつた。

黒龍江に於ける露人の農業的發展

是れより先き中央及びシベリヤの政府當局の行動とは無關係に、黒龍江の寶庫へは逃亡コサック或は掠奪的利益のみを目的とした冒險者流が蝟集し來たり、政府の經營に多大の障碍を與へてゐたが、今や露國政府が此の地帶を拋棄し、次で清軍も亦た南方に退去するに及んで、是等不逞露人の黒龍江畔に於ける活躍は顯著となつて來た。其の結果惡事を働いて此の地方に逃亡し來つた波蘭系の露人チェルニゴフスキーの一味は一六六五年アルバジン城を再興し、土民より掠奪した毛皮を露國皇帝に贈ることによつて前罪をゆるされ、皇帝よりアルバジン城司令官に任命される事となつた。彼れ以外にも又トルブジンのネルチンスク城砦の經營等があり、黒龍江地方に再び露人の勢力が盛んとなつた。本國及びシベリヤより穀物の供給を受ける事の困難であつた彼等は、自から農業を經營して食糧的自給をはかつたが、其の成績に鑑みて本國政府も亦一六七六年以來流刑囚を送つて彼等の農業經營を援助するに至つた。斯くして黒龍江中流々域に於ける露人の農耕地帶は一六八〇年代には一千デシャーンに達し、且つ黒龍江一帶から徴發される毛皮は、ヤクーツク太守から本國に納入する毛皮税の半數に達したといはれて居る。

清露間の外交交渉

露國の對清遣使と清朝の黒龍江征伐　眼を轉じて玆に露國本國と支那との關係を見ると、露人はロマノフ王朝以前から支那をば黄金と絹を豊富に産する大國として認識し、支那貿易に多大の憧憬を持つてゐたが、國人のシベリヤ發展によつて間接に支那に關する知識を廣め、西葡兩國の東洋貿易の利を目撃するに及んで、遂に一六一八年露帝ミカエルはペトリン一行を北京に派遣して明朝の萬曆帝に貿易の許可を請うた。彼等は直接その目的を達する事は出來なかつたが、北京及び張家口に於ける商業狀態を具さに視察して歸つた。之れによつて貿易の有望なる事を確めた露國政府は、一六五五年及び六〇年と相次いで清朝政府に使節を送つて通商開始の努力を續けた。

斯くて黒龍江に於ける露人との衝突及び露國政府との外交的折衝の兩方面に於て、清朝は露國と交渉を持つに至つたが、偶々最初の露人の黒龍江占據にあたつて清領内に逃亡して來た根特木爾がネルチンスクの故土に歸り、該地方を再占據した露人の支配下に屬するに至つた爲め、清朝政府は其の引渡しを要求するために、一六七〇年孟格德をネルチンスクに派して該地の露人と交渉を行はしめたが、之に對して露國政府はスパファリを北京に派して交渉の圓滑を期した。斯の如き兩國政府の微温的な態度には各々相當の理由があつた。即ち、當時清朝は三藩の亂及び臺灣鄭氏の征伐に全力を注いでゐた際で、滿洲駐屯の軍隊の如きも大部分内地に動員されてゐたから、黒龍江の露人の活躍を阻止する軍事的基礎を有せず、成るべく事を穩便に取り計らはうとしてゐたし、露國政府とすれば經營困難な黒龍江地帶の獲得よりも支那通商の利益の方が遙かに望ましいものと考へてゐたからである。

然るに内地反亂の鎮定に向ふや清朝の態度は强硬となり、吉林船廠に於ける運糧船二百五十隻の建造、遼河及び伊

清露の交戰　通河の水深調査、滿洲水陸要衝に於ける穀倉の設置、北滿に對する軍事移民の擴張等の準備が行はれると共に、一六八二年アルバヂン地方に偵察隊が送られ、翌年には其の下流對岸愛琿に築城が行はれた。同時に今まで露人が蒙古に於て間接に行つてゐた支那貿易を斷然禁止してしまつた。斯くして一六八三年清軍は黑龍江の露人植民地を攻撃してアルバヂン城を孤立せしめ、一六八五年六月之を陷れ、城守トルブジン以下の將兵をネルチンスクに驅逐した。之に於て清軍は凱旋し、墨爾根（メルゲン）に築城して北邊警備に備へたが、數月ならずしてトルブジンはコサックの援兵を得てアルバヂン城を再興した爲め、清軍は再び出動し、一六八六年七月以來約一箇年交戰狀態が繼續した。

清朝の黑龍江確保　**ネルチンスク條約の締結**　然かしながら、前述の如き對支貿易を重要視してゐた露國政府は西隣の諸國と多事なるにも拘らず、黑龍江に清國と兵を構へることの不利益なるを知り、一六八六年十月媾和の使節を送り、清朝は之を容れ、翌年八月清軍をして愛琿・墨爾根兩城に引揚げしめた。爾來露國全權ゴロヴィンと清朝全權索額圖（ソエト）とが、ネルチンスクに於て國境劃定を中心とする諸問題を討議したが、露國側の讓歩的なるに反し清國側の態度は强硬であつた爲め、容易に交涉は進展しなかつた。然るに當時清朝に叛旗を飜へしてゐた蒙古の强酋噶爾丹（ガルダン）が露國に接近しつゝある事實に危懼を抱いた清朝が、稍々態度を改めてより後は折衝は著々進行し、一六八九年九月所謂ネルチンスク條約が成立した。

此の條約は支那が歐米諸國と締結した最初のものであり、有名である。條約の內容を要約すれば、（一）露・清の東方國境は黑龍江北のゴルヴイツァ河及びスタノヴォイ山脈よりアルグン河に至る線を以てし、黑龍江北一帶の地域は清領として承認され、（二）その代りに露國は支那に通商する權利を得た點にある。

恰克圖貿易の開始　爾來露國は黑龍江畔の地を全く拋棄したが、一六九一年以來、露國政府の隊商は北京を訪れる事となつた。然かしながら此の官營貿易、卽ち清朝に對する朝貢貿易は土地遠隔のために費用倒れとなる事多く、圓滿な發達は遂げられなかつた。故に露國政府は清朝と露・蒙國境の協定を行ひ、一七二七年の布揑（ブーラ）條約、翌年の恰克圖（キャフタ）條約を通じて、蒙古邊境の賣買城（マイマッツン）と露領キャフタとの私人貿易開始の權利を得た。爾來この地に於ける露支貿易は急速に發達し、アメリカ毛皮の歐洲進出によつて歐洲の販路を減じたシベリヤの毛皮は、盛んに支那に輸入する事が出來る樣になつた。斯くして露國政府の對清態度は卑屈と思はれるばかりに讓歩的となり、清國官憲の貿易停止の命令によつてキャフタ貿易の衰微するを極力防止せんとする政策を取る事となつた。

カムチャツカ半島の征服　**露人の北太平洋發展**　斯かる露國政府の對清態度の軟化は對支貿易による利益のみならず、その歐洲に於ける地位にも原因してゐる。十八世紀の露國は波斯と戰つて裏海に進出し、瑞典を壓してバルチック海への出口を獲得し、以て歐洲海上に雄飛せんとして全力を盡くしてゐたのである。從つて陸上の東方發展にはあまり意を用ひなかつたが、黑龍江發展を遮られたシベリヤの露人は、更に東方へと進展の步みを進めて往つた。前述の如くアナディールに根據地を得た露人はカムチャツカ半島の存在を知つたが、一六九六―九七年の二回に亙るアトラゾフの引率せるコサック隊の半島探檢の結果、其の毛皮獸の豐富な棲息が明かとなり、露國政府は彼に半島の遠征を許可した。彼は爾來數年間慘憺たるコリヤック族と戰つて東海岸にニズネ・カムチャツカ城砦を築いた。其の後ち彼の跡を追うて半島に現はれた數個の探檢隊と彼との間に屢々私鬪が行はれたが、政府に請うてカムチャツカ討伐司令官に任ぜられたアトラゾフは苦心の後、一七一一年頃までに全半島に露國の威令を普及せしめ、茲に始めて露人は太平洋に面した海岸線を獲得